F43
G56
1
F43-G56-2イウ
1200500764686

ゲーテ作

親和力

澤西 健譯

始

F43
G56
21

澤西 健譯

白水社

1809年『親和力』執筆當時のゲーテ

915
22

親和力　目次

解　説……九
第一部……二五
第二部……二〇一
譯　註……三九二

挿　畫

一八〇九年『親和力』執筆當時のゲーテ……對扉
ミンナ・ヘルツリープ……對二四
シャルロッテ・フォン・シュタイン夫人――自畫像……對二四
ベッティナ・ブレンターノ……對二四
ゲーテ筆――當時のイエナの風景……對二四
當時のカールス・バァトの風俗……對二四
ワイマール遊園に於けるゲーテの園亭……對二〇〇

解說

ゲーテのこの小說はジイドの『窄き門』の姉か母にも當る作品である。ここにはアリサにも似た女主人公オティリエが出て來る。後者が現在我國でも、少しでも文學に嗜好ある者で讀まない人はない位であるのに比し、『親和力』が殆んどその名前さへ知らない人があるのは、その『窄き門』にもまさる魂の美しさと、ゲーテでなくては見られぬ宇宙的な深さと純粹さ、躍動する生命の根源的なはげしさを思ふとき、寧ろ不思議な位である。殊に、その戀愛心理描寫の手法の殆んど現代のラディゲの『ドルヂェル伯の舞踏會』やプルーストの戀愛小說などの祖とも思はしむるものがあるのは、この書の現在の如き普及の不十分さは全く出版界に罪があるとせざるを得ないのである。譯者はかねてこのことを遺憾とし、及ぶ限りこの書の普及に心掛けて來たつもりであるが、又、いづれは生涯に自分の譯を一つ是非つくつて置きたいものと念願してゐたのであるが、偶々、いまこの書の邦譯を試みるを得るに到つたことは、まことに本懷これに過ぐるものはない。思へば、學生の頃より只管この書に思ひを潛むること既に十年に垂んとし、先日行李の底より埃にまみれた當時の卒業論文など取出してみて、この書をわが聖書なりとした書き出しを、いま譯し終へて、可笑しいどころではなく、却つて益々今後とも或は

生涯、自分の思索と生活の中心はこの書にあることを感じた次第である。が、いざ譯しはじめてみると、讀み馴れたものとはいへ、その困難さは全く豫想以上で、途中前途の不安を覺ゆることも再々であつたが、幸ひ遂に之を完了するを得たことは自分として胸一杯の感慨である。又、この拙い譯書が幾らかでも遺漏なきを期し得てゐるとすれば、この古典に對する既往の內外諸文獻に負ふ所勿論洵に多大であつて、これは此處に厚く謝意を表し置く次第である。

さて、從來、主として批評家達の罪であるが、とかく讀み誤られることの多かつたこの書について、讀者の眞の理解に資すべく必要な程度で少しく解說を試みたいと思ふ。まづ、本書の成立年代及び直接の創作の動機となつた、女主人公オティリエのモデルである當時ゲーテの戀愛對象ミンナ・ヘルツリーブについて一言し、次に、何を中心に讀むべきかといふ考察の下にこの書の本質を追求し、最後に從來評家達の間に起つた諸問題について簡略に說明を加へたいと思ふ。

勿論、この小說はゲーテ晩年の六十歲の時の作品である。『ヴィルヘルム・マイスター修業時代』の制作時期に屬するもので、當時『修業時代』の第八卷が世に現れる前に既にシラーは、その思想が必然的に續篇を必要とすることを指摘したが、ゲーテ自身も否定しなかつた。そして、その間に二三の作品をおいて、ゲーテは十九世紀初頭『ヴィルヘルム・マイスター放浪時代』に繰入れる計畫の一列の內容深き短篇に從事したが、その中で、一八〇八年夏カールスバァ

トでの最初の起稿の時既に題材重大にして作者の心中に根ざすことあまりに深く、到底短篇形式に嵌め込むことの不可能を知つたのがこの『親和力』である。かうして出來た最初の草稿は尙不十分にして書直し、一八〇九年夏イェナに於て、家族や知人とも隔離し、惠心沒頭した結果、漸く二卷の長篇小說として完成された。

以上が大體この書の成立年代であるが、作品の諸場面の背景や風俗、會話、人物等についても從來詳細な研究が行はれてゐて、アイゼナッハのヴィルヘルムスタール城、當時のワイマール社會、カールスバァトの生活、作中の遊園設計についてはワイマール公國に於てゲーテ自身が行つた施設等が擧げられ、人物についても、エドアルトがヴェルテルほどでないにしてもゲーテ自身の倒影であることは謂ふまでもなく、その他ルチアネ、シャルロッテ、大尉、ミトラー、建築家、英國貴族等悉くの副人物にまでベッティナ・ブレンターノ、シャルロッテ・フォン・シュタイン夫人等々一々の實在人物の名前が擧げられてゐるが、それ等のモデル研究は此處では勿論格別重要でもないから詳細は略すことにする。

が、これ等は兎も角として、作品發生の直接の機緣である當時ゲーテの本質的戀愛對象ミンナ・ヘルツリーブについての考察は必ずしも無意味ではないのである。その所以は後で述べるゲーテの制作の祕密を知るとき明瞭になるものであるが、それは暫く措くとして、まづ簡單にヘルツリーブについて述べて置かう。一口に言へば、かの女は作品の女主人公オティリエと諸

評家の言葉を照合してみても極めて相似た存在であつたらしい。イエナの出版屋フロムマンの養女であつて、この養女といふ作中のオティリエと共通する境遇からか、その性質も靜かで愼しみ深く、慾求の少い、諦め勝ちな、人の要求や希望に口に出されないうちによく氣の附く愛想のいゝものであつたらしく、又、獻身的犧牲的で、その他家事上の才能などの點でもオティリエと全く同樣である。その義兄の言葉によつても以上のことは明瞭であるが、更に又、精神の發達も徐々としてゐて、生涯なにか夢見るやうなものを持つてゐたといふことも作中のオティリエその儘である。かの女はあとで結婚して長い腦病の後高齡で死んだのであるが、もし老ゲーテでなく若いエドアルトに出遭つてゐたならば、かの女もまたオティリエと同樣の運命を辿つたであらうとさへ言はれてゐる。ゲーテがかの女に再會したのは（といふのは、幼時から既に知つてはゐたのである）、かの女が正に十八歳の時一八〇七年の暮であるが、永遠の青春を誇るこの詩人も漸く諦念の老境に入つてゐたことを思へば、このやうな女性にその時期の最も本質的な戀愛を覺え、後年友人に與へた手紙に依れば、遂に「正當以上に」これを愛するに到つたといふことも如何にも尤もと首肯される。ただ、此處で注意しなければならないのは、そのやうに本質的なものであつたとはいへ、その愛し方は既にロッテやリリーに對するやうな燒き盡すやうな、すべてを突き貫く情熱的なものではなく、愛らしく悲劇的に受動的な女性に對する父親らしい優しさをこめた既にあらかじめ諦念を豫想し、考へ見渡した、悲しくも明るいも

のであつたことである。ここから作品のオティリエの客觀的把握も知られる。が又、此所で忘れてならないことは、このやうな客觀的な對し方であつたにしても、その戀愛の本質性には變りはなく、寧ろ、そのやうな對し方は情熱を益々內攻的に切ないものにしたことである。ここに客觀的な調子にも拘らず、窮極に於てはこの作品が一つのリリシズムに、オティリエへの讃歌に終つてゐる所以が見られる。まことに、後述するやうに、この作品の本質は寧ろ此處に見るべきであつて、第二部に於て第一部の客觀的な調子とは不統一なほどに特に見られるオティリエへの作者のリリシズムは形式上の非難の的とするよりも、むしろ作者の美しさと見るべきである。この同感なくしてこの作品の理解は完全に不可能と言へる。ゲーテがいかに作品のオティリエを愛してゐたかは、その後數年を經た一八一五年に、若い友人ズルピィツ・ボアスレに、カールスルーエからハイデルベルクへの旅の途上、星々の瞬き始める時、自分とオティリエの關係を語り、如何に深く自分がオティリエを愛したかを告白して、殆んど謎のやうに豫感に充ちてゐたと言はれてゐることでも知られる。

さて、次に愈々何を中心に讀むべきかといふ考察の下にこの書の本質を究明したいと思ふ。が、既に謂ふまでもなく、我々はオティリエを中心に讀むべきである。このことを誤つたがために、從來批評家は勿論讀者もこの書の肝腎の本質への理解から殆んど閉されがちであつた。この作品に特に見られる當時ゲーテの思想、所謂自然科學的人生觀なるものに、殊に當時のシュ

ヴューデ・ベルクマンの化學用語『親和力』を標題としてあるため、あまりに眩惑され過ぎたのである。そして、ゲーテの根柢に横たはるその制作の祕密を忘れ、恰も詩聖が單にそのやうな思想を描かんがためにこの作品を必要としたかの如き早合點に陷つたのである。では、何故にそのやうな讀み方は『親和力』の場合と雖も誤りであり、女主人公オティリエを中心に讀むべきであるか。ここに我々はゲーテ獨特の制作の祕密を見なければならない。卽ち、たとへ親和力の如きどのやうな誘惑的な思想であらうとも、單に一つの思想が詩作品の窮極の中心になるといふことはゲーテ以外のどのやうな眞の詩人に於ても到底考へられないことであるが、それに依つて思想を呼び出される譯ではないにしても、旣に內部に熟して來てゐた思想が藝術作品にまで結晶するにはゲーテに於て飽くまで一人の女性との邂逅が必要であつたといふ點から見ても、その制作の祕密は全く、その時期の自己を襲ふ思想に對處すべき理想の姿をつねに女性の姿のもとに描き、其處に思想と生き方と美と救ひの全てを結晶させるにあつたことは明らかなことで、この姿が窮極に於てかれの創造の中心であつたのである。その姿の美しさ、高さがかれを制作にまで驅り立てたのである。その姿の背後に、かれはつねに思想と體驗の重壓から身を以て逃れたのである。作品の本質が飽くまでこのやうな姿、『親和力』でなら勿論オティリエにあつたことは謂ふまでもなく、そして、これは各人物がオティリエへの理解の度によつてそれを中心とした宇宙的層を成してゐる形式的な點から見ても明瞭なことであるが(前述のオティリ

エの實在のモデルであるミンナ・ヘルツリーブの檢討の無用でない所以は勿論ここに在る)、所謂思想はその一つの大きな要素に過ぎなかつたことは一見極めて單に思想の作品の如き『親和力』にあつても絕對に否定出來ない所である。といふよりも、寧ろ、女主人公オティリエに結晶された思想の種類がそのやうな外觀を呈せしめたのみなのである。一見些細な差のやうであるが、これを見誤ることは折角の寶を見失ふといふ大きな過失に到ることであつて、新しき讀者には特に注意をしていただきたいと思ふ。兎も角、以上で大體オティリエを中心に讀むべき所以は說明出來たと思ふが、それではそのやうなオティリエに結晶された作品の本質とはどのやうなものであるか。それはオティリエを中心にこの作品を讀んでもらへばすむことであるが、幾分でも理解に資するために、ここに少しく說明をして置きたい。

それには先づ、オティリエのモデルであるヘルツリーブに一瞥をあたへたと同樣、當時ゲーテの內部に熟して來てゐたその根本思想を明らかにして置く必要がある。それは、まづ、コッタ書店の廣告のために作者自身が草したといふ短文中の一句、「到る處に唯一つの自然がある」、といふ所謂自然科學的な人生觀と、老境に入つて人生の全てに、殊に愛に對して諦め勝ちになつた世間普通の意味の諦念の思想である。前者からは『ヴュルテル』を自然の小說とすれば『親和力』を純粹の小說といふべき客觀的な手法や、旣に述べたラディゲやプルーストにも似た極めて細微な點に到るまでの戀愛心理の法則的な取扱ひなどが生じて來てゐるが、中でも特に著

しくこの作品に現れてゐるのは、戀愛の親和關係と、性格によつて決定される各人の運命とを恰も自然律と同樣に超人格的な不可抗的、決定的なものと見る思想である。即ち、そのやうな戀愛に於ける親和力思想は言ひ換へれば、愛の魔神(デエモン)の思想であつて、シャルロッテや大尉の如き理智の人は簡單に所謂魔神的愛の世界から出てしまへるが、選ばれたる天稟の子ともいふべき、生れながらにして愛の魔神の子であるオティリエはエドアルトと同樣、ひと度この魔神に襲はれると、完全にその支配下を脱することが出來ないのである。一方、性格によつて決定される運命の自然律的な見方は、各人の運命にその辿らざるを得ない道又は法則といふ觀念を與へるのであつて、オティリエは前述の如く不可抗的な愛の魔神の子であるとともに、此處に又當時ゲーテの諦念の思想が作用して、生れながら性格的にすべてに對して、殊に愛に對して諦念の道を辿らざるを得ないといふ一つの法則を與へられてゐる。そして、この矛盾する二つの道の間に挾まれて如何に生きるかといふ點がこの作品の追求する窮極の本質なのであるが、其處には又この作品の根柢に横たはる本質的な意味での諦念の思想が見られるのである。ここに我々は端なくも、自身また愛の魔神の子でありながら、老境に入つてミンナ・ヘルツリーブへの愛の諦念を强ひられてゐるゲーテの苦悶を見ることが出來るとともに、この作品に於て如何にかれがそれを救はんとしたかを知る機會を與へられてゐるのである。このやうに見て來ても、この作品の本質の理解がオティリエの運命の追求にあることは餘りにも明瞭である。

では、オティリエはどのやうな道を辿つたか。これを我々は便宜上五つの段階に分けて最初から更に詳しく辿つてみたい。五つの段階とは、第一に、生れながらの愛の魔神の子としてオティリエが無意識にエドアルトへの愛を深めて行つた時代、第二に普通の意味に於けるオティリエの愛の諦念、第三に自己の法則についてのオティリエの第一の認識、第四に自己の法則についての第二の認識、第五に『親和力』に於ける本質的意味の諦念、オティリエの聖女への高揚である。即ち、エドアルトが大尉を館(やかた)に招んだ代りに、その妻のシャルロッテによつて私塾から館に呼び返されたシャルロッテの養女のオティリエは、間もなく不思議な親和力に導かれてエドアルトとの間に無邪氣な戀愛に落ちて行く。エドアルトの愛が燃え上るやうな輕燥なものであるのに對し、オティリエの愛は祕やかに愼しやかに内に藏しながら進められて行く。一方、シャルロッテと大尉も我知らぬ内に愛に陷つて行く。この理性的な二人の間の戀愛進行は、どのやうな明朗な理智の世界にも混沌した熱情の必然性の痕跡があるといふ、コッタ書店のためのゲーテの廣告文を思はせるものがある。が、もともと理智の人であるこの二人ははやくも危險を感じて自制し、意志を以てこの愛の魔神の世界を去らんとするのであるが、これに對し、生れながらにして愛の魔神の子であるオティリエとエドアルトとの間は未だに無心の儘に進んで行く。この間の戀愛描寫の手法は全く前述のラディゲやブルーストを思はせ、かれらが殆んど心理的な美しさに止るに反し、ゲーテの場合は更に宇宙的な美しさが包容し、その純粹さ生々し

さに於ては到底他の比肩を許さないものがある。この一種宇宙的な美しさは、事件や人物がこの作品に於てすべて象徴的に扱はれてゐると同様に、心理もまた實に微細に描かれてゐるにも拘らずつねに象徴的な宇宙的な含みを持つてゐる所から來るもので、極めて法則的な扱方にも拘らず飽くまで生々としてゐる點と同様ゲーテでなくては見られぬものである。かうして、間もなく大尉と別れ、自分達の始末をつけることの出來たシャルロッテは、しかし同時に、他の二人の間に醸されてゐた危險をも豫防せんとし、兩者を引離すべく、オティリエを私塾か或る金持の邸へ遠ざけんとするのであるが、逸早くもこれを悟つたエドアルトは先手を打つてこれを阻止し、その代り自身館を逃れ去つて、やがて戰場に出て己が運命を試す。玆に於てか、夫妻の平和を破り、シャルロッテを苦しめた罪を感じて、無心であつたオティリエははじめて我に返り、すべてを諦め勝ちなその本來の性情のまま、愛の諦念に入るのである。シャルロッテの懐姙、更に夫エドアルトとの間のその子供の誕生はこの諦念を益々決定的にする。そして、ある日湖畔で、戰場から歸つたエドアルトに偶々出遭つたオティリエは一瞬間不可抗的な愛に襲はれてしまふのであるが、後でその時の感情の動搖のために誤つて子供を湖に溺らしてしまつたことが愕然としてかの女に再び、危く迷はんとした己を知らしめ、愛を諦むべき自己の道を此處に明瞭に認識させるのである。それは己が忘れたときは、神によつて酷くも怖ろしい方法で知らされるものなのであつた。このやうな普通の意味の所謂愛の諦念、愛を諦めるといふ自己の道

の認識がオティリエの第一の認識であつて、やがてかの女は更にこれと矛盾する第二の認識に襲はれるのである。即ち、愛を諦め、エドアルトより離るべく館を去つて私塾へ歸らんとしたオティリエは途中旅宿に到るや、忽ち、止み難く待受けてゐたエドアルトの來訪を受けるのであるが、此處でかの女は再び抵抗し難い愛の魔神に襲はれてしまふのである。そして、いまは如何とも出來ず無益な抵抗を諦めて再び館に歸るかの女の心中には、生れながらの愛の魔神の子である故にその力にも抵抗不可能であるといふ自己の道への第二の明瞭なる認識がある。かうして、やがて、あとで館で、長い沈默の後オティリエは皆の者に手紙を書くのであるが、その紙片の「前略。私は自分の道を踏み外しました。二度と戻る譯にはまゐりません。敵意ある魔神が私の上に權力を得て、私が自分自身と再び一致するやうになつても、外部から私を妨げるのです。後略。」といふ言葉は、愛を諦むべき自己の道にも拘らず、これを踏み外し、しかも再び歸らうとしても、生れながらの愛の魔神の子である故にその力にも抵抗出來ず、歸るに歸れず、行くに行かれず、この矛盾する兩者の間にいまはすべてを靜かに諦觀して死を決したかの女の姿を示すものである。此處には又今述べた愛の魔神の子である故にその力に抵抗することも不可能であるといふ、第一の認識と全く矛盾する第二の認識があると同時に、既に、そのやうな矛盾する二つの道を持つた自己の悲劇的な道或は法則を靜かに知り、耐へ、晴れやかに諦めて行かうとする『親和力』の本質に横たはる諦念の思想が見られるのである。この諦念

は運命よりの逃避ではなく、自己の悲劇的な宿命を全てを知る者の諦讓を以て耐へ、果さうとするものである。オティリエにとつてはいまや二つの道に挾まれて、靜かに死を待つ外に道はない。それをかの女は逃れず、すべてを知る晴れやかさを以て忍び、最後まで耐へ果さうとするのである。『ファウスト』のグレチヘンが運命の盲目的犠牲とすればオティリエは知りつつの犠牲である。このやうに自己の道を明らかに知り、靜かに耐へ、愼しやかに果し、以て自己の道又は法則と一體になり、神と一體になる殉教の女性に對して、ゲーテは遂に「聖女」といふ稱號をさへ奉つてゐる。正に、自己の悲劇的法則に對する女性の最も美しく純粹な高い形式であり、前述の如くこの美しさが遂にゲーテを驅つてこの長篇を書かしめたものであり、この姿の背後にかれは身を以て逃れ去つたのである。此處に勿論『親和力』が窮極に於てこの姿の美しさの、言ひ換へればオティリエの讃歌である所以が見られる。又、一見客觀小說の如く、根本に於ては結局ゲーテらしくリリシュなロマンである所以で、我々は寧ろこれを慶びたい。事實、第二部第十七章がこのやうな聖女オティリエを描く全篇の頂點ともいふべき世にも美はしく崇高な章とすれば、第十八章はオティリエへの作者の何と云ふ樂しい讃歌であらう。この時の詩人の美しくも偉大な心情に眞に同感し得るならば、この作品の形式的不統一や、ナンニイの蘇生等の奇蹟の取扱ひへの區々たる非難は寧ろ自ら恥ぢるに到るであらう。

最後に、從來この作品について起つた二三の問題について附言すれば、先づ、エドアルトと

の間にシャルロッテの產んだ子供の眼がオティリエに似て顏形が大尉に似てゐたといふことや、ナンニイの蘇生等の非科學的な奇蹟についての諸評家の非難に對して、フリードリヒ・グンドルフが試みた、ゲーテに於て事象の法則性は神祕と矛盾するものではなく、むしろ神祕を深めるものであり、人間にとつて探求不可能で非法則的に見えても神にとつては法則的なものであり、ゲーテはただ證明出來るもののみを現實的なものとするほど淺薄ではなく、奇蹟はかれにとつて探求し得べきものと得ざるものとの間の限界點を示すものに過ぎなかつたのだと爲す言說は、人間界の規則に從ひ、人間の手で書いてゐて突然神の手になることを認むるかのやうで、少しく人をまどつかせるものであるが、平面的スケールではなく立體的スケールに於て言はゞ宇宙的運命小說ともいふべきこの作品の宏大なスケールを表現するものとして强ち行き過ぎの言葉とも言へないと思はれる。が、勿論、前述の如く、この奇蹟の問題も形式上の不統一と同樣、オティリエの讃歌としてのこの作品の本質を見るとき、自ら解決出來ることである。それは單に非難すべきものではなく、作者のいぢらしい心情を示すもので、むしろ作品に美しく好ましい神祕の匂をそへるものなのである。

次に、この作品はゲーテがその結婚觀を示さんとした作であると言はれてゐるが、作者の中心目的がそのやうな所にはなく、結婚の問題は作者が單にその思想を表すためにもちひた手段に過ぎないことは謂ふまでもないが、これに關する從來の區々たる言說は紹介するも寧ろ愚か

であり、この點については、この作品がただ、キリストのあの〈すべて色情を懷きて女を見るものは既に心のうちに姦淫したるなり〉といふ言葉を、その全き意味に於て表現したものであると言へば足りるであらう。この作品を支配する、あの清らかに優しい心情、纖細にうち顫へる良心を思ふとき、我々はこのキリストの聖らかな言葉をいつと知れず懷しく思ひ出さずには居れないのである。

又、この作品に於ては、つねに仕事が戀愛の進行の場合に於ても、オティリエの諦念を描くに際しても、一つの伴奏となつてゐることを忘れてはならない。どのやうなものを描いても、この仕事の伴奏がつねに事物を清新に保つてゐて、少しでも頽廢に陷ることをさせないのである。ここに我々は又、近代の頽廢を知らない永遠に若木のやうであつたゲーテの清淨な魂を見ることが出來る。その他、手法的にオティリエの日記をその心理狀態と格別關係のないものと難じたり、第二部前半の建築家、ルチアネ、私塾の助手等の登場する場面を冗長なものと爲すものがあるが、前者は愛の心理のゲーテ特有の形而上學的表現で無關係どころのものではなく、後者はこれあるが故にオティリエの美しい諦念の情が布を縫ふ一條の赤い絲の如く、隙間風の如く鋭く切なく見えて來るのであつて、作者にとつては不可缺のものである。

大體以上をもつて、この解說を終るが、とかく我國の讀者に親しまれることの少かつたこの美はしき魂の書が、この拙き譯書によつて幾らかでも人々の愛好を得るやう譯者は最後に深く

念願して置く次第である。いつの世にも、文學の眞の使命は所詮美はしき魂の追求であり、これを除いては文學の在所はないと信ずるからである。

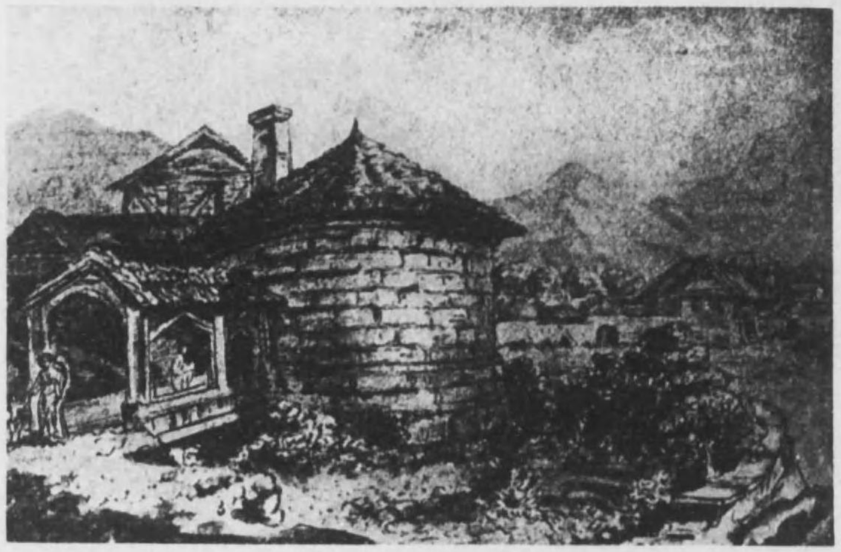
東京、目黑、綠丘にて

譯者

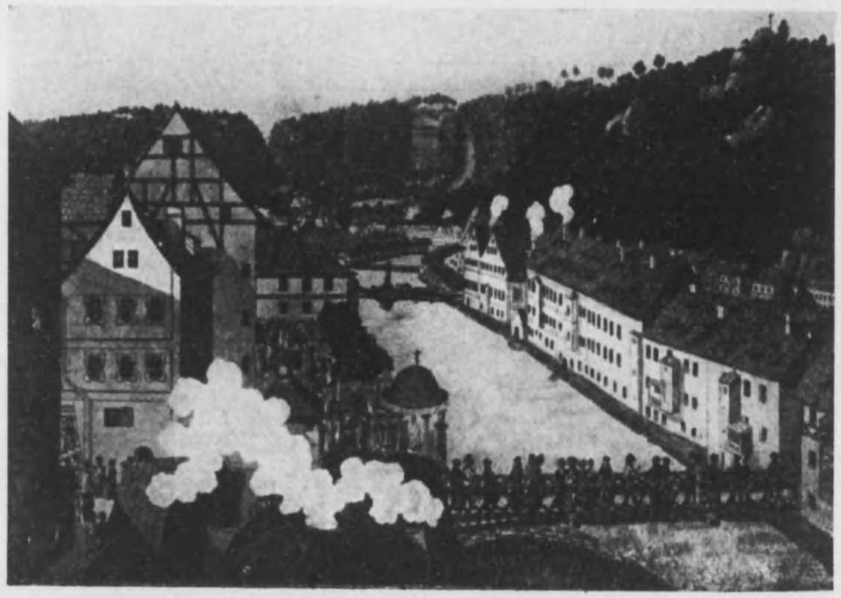
シャルロッテ・フォン・シュタイン夫人自書像

ベッティナ・ブレンターノ

ミンナ・ヘルツリーブ



ゲーテ筆：當時のイエナの風景



當時のカールス・バアトの風俗

第一部

第一章

エドアルト――男盛りのある金持の男爵をさう名づける――エドアルトはある四月の午後の最も美しい時間を、まだ生々と保存してあつた接枝を若い幹につぐために養樹園で過した。仕事はいまちやうど終つた。かれは道具を箱に收めて、滿足げに自分の仕事をながめてゐた。そこへ、園丁が歩み寄つて行き、主人が熱心に力をあはせてくれるのを嬉しがつた。

「家内を見かけなかつたかね？」エドアルトは歩き出さうとしながら訊いた。

「向ふの新しいお庭にいらつしやいます。」園丁は答へた。「奥様がお館と向ひ合せにあの岩壁に沿うてお建てになつた苔張りの小屋も今日は仕上ります。とても綺麗になりましたから、きつと御前様のお氣にも召すことと存じます。眺めが素晴らしいのでございますよ。下の方には村があつて、少し右手には教會が見えますし、その塔の尖端越しに向ふが見えるくらゐでございます。向ひ側はお館といくつかのお庭になつて居ります。」

「全くその通りだ。」エドアルトは答へた。「ここから二三歩出るとみんなの働いてゐるのが見えたよ。」

「それから、」園丁はつづけた。「右手には谷が開けてゐて、豐かな立木のある牧場越しに明る

い遠景が見られます。岩を登る坂路はほんとに見事につきました。奥様は心得がおありのやうですな。あの方のもとでならみんなよろこんで働いてゐます。」

「家内のところへ行つて、僕を待つててくれるやうに頼んでくれないか。」エドアルトは言つた。

「新しく造つたものを見て樂しみたいと言つてゐると言つてな。」

園丁は急いで立去つた。エドアルトもやがてそのあとにつづいた。

かれはいま高臺を下つて、通りすがりに植物室や温床を檢分しながら水のほとりまで來た。それから小橋を渡つて、新しい庭園への路が二股に分れてゐる場所に差掛つた。かれは、墓地を越えて可なり眞直ぐに岩壁に向つてゐるはうの道をやめ、左手に少し遠廻りして雅びな灌木の林の中をそつとうねり上つてゐるもひとつの道を行つた。二つの道が相會してゐるところで、かれはちよつとよい工合に置かれたベンチに腰を下し、それからいよいよ坂路に入つて、いろんな階段や中休み段を通り、狹い、險しくなつたり樂になつたりする道をやつと苔の小屋まで辿り着いた。

戸口でシャルロッテは夫を迎へ、戸口や窓越しに、風景を言はゞ額縁に入れてみせてゐるいろんな繪が一目で見渡せるやうなふうに腰掛けさせた。かれは春になるとやがてすべてが益々豐かに生き生きとなるだらうと思つてよろこんだ。「たゞひとつ言ひたいことがあるんだが、」と、かれは附加へた。「小屋が少し狹すぎるやうな氣がするね。」

「私たち二人にはでも十分の廣さだと思ひますわ。」シャルロッテは答へた。

「うん、勿論、」エドアルトは言つた。「三人目が來てもまだ席がある。」

「無くつてどうしませう。」シャルロッテは答へた。「四人目が來ても平氣ですわ。それよりお客さんが多いときは他の場所でも用意致したいと思ひますわ。」

「ところでいま何の邪魔もなく二人きりでゐるんだから、」エドアルトは言つた。「それに全く落着いた朗らかな氣持でゐるんだから、僕はちよつとお前に白狀しなくてはならぬことがあるんだよ。つまり、この暫くの間胸におさめてゐたことだが、お前に打明けねばならぬし、さうしたいと思ひながらできないでゐることがあるんだ。」

「私もさうらしいことに氣づいてゐましたわ。」シャルロッテは答へた。

「では白狀してしまはう。」エドアルトはつづけた。「明朝の郵便にせき立てられず、けふ決心しなくてよければ、たぶんまだ默つてゐたかもしれないがね。」

「一體何ですの？」シャルロッテは好意を以て迎へながら尋ねた。

「僕たちの友人の大尉のことなんだがね、」エドアルトは答へた。「お前も知つてゐるとほりあの男はいま世間によくあるやうに自分のせゐではなくて可哀相な境遇に落ちてゐる。あれくらゐの知識と才能と技倆のある男が仕事がないといふことはどんな苦しいことか知れない。僕は自分があの男のためにしてやりたいと思ふことをもういつまでも控へてゐたくないのだよ。

で、つまり、奴さんを僕らのとこへ暫く引取りたいと思ふんだがね。」

「それはよく考へて、一面からばかりでなく觀察してみなくてはいけませんわね。」シャルロッテは答へた。

「僕の考へをまづ話してみたいと思ふがね、」エドアルトは答へた。「あの男の最近の手紙は極めて深い不滿にそれとなく蔽はれてゐる。なにか必要なものが缺けてゐるといふのではない。あの男はあくまで自分を制御することができるし、必要なものは僕が世話しておいた。また、僕からものを受取るのが苦しいのでもない。僕たちは一生お互に厄介をかけ合ひで、お互の貸借を計算なんてできないほどだから。仕事がないこと、それがもともとあの男の苦惱なんだ。自分の習ひ修めたいろんなことを毎日毎時間ひとの役に立たせることができるといふのが、それが全くあの男の樂しみであり、情熱でさへもあるんだ。そして、なにもすることがないとか、自分が十分持つてゐることはつかふことができずにこの上研究したり技能を積んだりすることは、ねえ君、これは全く苦痛な狀態だよ。その苦惱をあの男は孤獨のなかで二倍にも三倍にも感じてゐるんだよ。」

「でも、」シャルロッテは言つた。「あの方にはいろんなところから申込みがあつてゐたやうでしたわ。私もあの方のために、仕事をしてゐる男の友だちや女友だちに方々お手紙を書いてあげて、私の知つてゐるかぎりではそれも無駄ではなかつたやうですの。」

「全くその通りだ。」エドアルトは答へた。「だが、このいろんな機會や申込みでさへあの男に新しい苦惱と不安を賦すんだ。さういふ境遇の一つでもあの男にふさはしいものはない。とてもあの男が働きを示すことはできない。自分の時間や考へや生き方を犧牲にしなくてはならない。そんなことはあの男にはできない。こんなことを考へれば考へるほど、感ずれば感ずるほど、あの男を引取りたいといふ希望がつよくなつてくるんだよ。」

「あなたがお友だちの境遇をそんなに同情してお考へになるのはほんとに美しい結構なことですわ。」シャルロッテは言つた。「でも、御自分のことや私たちのことも考へて下さるやうにお願ひしたいと思ひますわ。」

「それは僕も考へてみたがね、」エドアルトはかの女に答へた。「僕たちはあの男が傍にゐると利益をえ、愉快になるばかりだと思ふよ。費用のことなんか言ひたくないんだ。あの男が移つて來てもどうせ僕にとつてはそれは些細なものだし、殊にあの男がゐるためにちつとも不愉快になるわけではないことを同時に考へればね。あの男には館の右の翼にゐてもらへばいゝし、その他は萬事具はつてゐる。このことでどれくらゐあの男はお蔭を蒙り、あの男との交際で僕たちもどんなに愉快になり、また利益を得るかわからない。僕はとうから領地とこの地方の測量を望んでゐたんだが、あの男はそれを世話し指導してくれるだらう。お前の意向は現在の小作人たちの年期が切れ次第に自分が將來領地を管理するといふんだが、さういふ企てはど

んなに危險かわからない。あの男は僕たちを助けてどんなにいろいろな豫備知識を得さしてくれることだらう。僕は自分にかういふ種類の男が缺けてゐることをあまりにも感じる。百姓たちは正しい知識は持つてゐるが、彼奴らの言ふことは混亂してゐて正直でない。都會生れの大學出身者はなるほど明晰で秩序立つてはゐるが事物への直接の洞察に缺けてゐる。あの友だちにならば僕は兩方とも期待できるのだ。その上また山ほど、想像するのも好ましいやうな、お前にも關係のある、澤山のいゝことの豫想ができるいろんな事情がこのことからとびだしてくるよ。いや、よくきいてゐてくれて有難う。だが、こんどはすつかりあけすけに詳しく話して、お前の言はねばならぬことをみんなきかしておくれ。僕は途中で口を挾んだりはしないよ。」

「よろしうございますわ。」シャルロッテは答へた。「では早速一般的な見方からはじめませう。男の方たちは個々の目前の物事を餘計にお考へになるやうですが、これは行爲と活動をその使命としていらつしやるのだから尤もなことです。これに反して、女はむしろ生活のなかで互に關聯しあつてゐるもののことを考へます。これもしかし、女の運命やその家族の運命がこの相關關係に結びつけられてをり、またこの相關的なものこそ女のもとめるものであることを思へば同樣に尤もなことです。ですから、いまちよつと私たちの現在と過去の生活に一瞥をあたへてみたいと思ひます。そしたら、あなたも、大尉をお呼びするのが私たちの目論見や計畫や取極めなどとそんなに全く合致するわけでもないことをお認めになるでせう。

私はでもほんとに私たちのずつと以前の關係を思ひ出してみたいと思ひます。私たちは若い者同士として本當に心から愛し合つてゐました。が、私たちの仲は裂かれました。あなたはお父さんが飽くことのない財產慾からかなり年上のある金持の婦人にあなたを結びつけてしまはれたため私からはなれ、私はまた格別の期待もなくある富裕な愛してはゐないが尊敬してゐる方に私の手をあたへねばならなかつたためにあなたから別れました。私たちはしかし、それから再び自由の身になりました。あなたが先で、あなたの年とつた奧樣が大きな財產を殘して亡くなられたのでした。私があとで、丁度あなたが旅からお歸りになつたときでした。かうして私たちは再びお互を見つけ合つたのです。私たちは思ひ出を樂しみ、思ひ出を愛し、誰にも妨げられず一緒に暮すことができました。あなたは結婚をお迫りになり、私はすぐには同意致しませんでした。私たちはほとんど同じ年齡ですので、私が妻としてどうしても老けてゐましたのに、あなたは良人としてさうでもなかつたからです。が、ついに私はあなたが唯一の幸福と思つていらつしやるらしいことをおことわりしたくはないと思ひました。あなたは宮廷や軍隊や旅で身に受けたあらゆる不安から私の傍で回復し、思慮を取戻し、生活を樂しみたいとお思ひになつてゐました。それも全く私と二人きりで……私は私の唯一人の娘を私塾に入れました。そこで娘は田舍にゐてできるよりは勿論もつといろんな教養を積んで居ります。娘だけでなく、可愛いゝ姪のオティリエもそこへやりました。あの娘はたぶん私の指導で家政のお手傳ひに育

て上げるのがいちばんよかつたでせうけれども。こんなことはみんなあなたの御同意を得て、たゞ私たちが私たち自身の生活をし、以前にあんなに憧れ望んでゐて、やつとあとになつて遂し得た幸福を誰の邪魔もなく樂しみたいためにしたことです。かうして私たちは田舍住ひをはじめました。私が内部を引受け、あなたが外部と全體にかゝはることをお受持ちになりました。私はすべてのことであなたに從ひ、たゞあなたひとりのために生きるやうにとお計ひして居ります。少くとも暫くの間、かういふ遣り方でどこまで私たちがお互に暮して行けるか試してみようではございませんか。」

「なるほどお前の言ふやうに、相關的なものがもともとお前たちの得意とするところとは言つても、」と、エドアルトは答へた。「お前たちが立續けに言ふのを聞いてゐたり、お前たちが正しいと決めたりせねばならないことは勿論ない。今日までのところはお前の言ふ通りだ。僕たちがこれまで僕たちの生活のために築いてきた基礎は立派なものだ。僕たちはしかしこの上更に築きあげ、又發展があつてはいけないだらうか？　僕が庭園で、お前が遊園でしてゐることは、これはたゞ隱遁者めあてだけの仕事なのかい？」

「仰しやる通りですわ。」シャルロッテは答へた。「ほんとにその通りですわ。たゞ、邪魔になるものや異つた分子を入れたくないだけなのです。考へてみて下さい、私たちの計畫は娯樂に關することでもある程度たゞ私たちの一緒の生活といふことだけにかかはつてゐました。あなた

はまづあなたの旅行の日記を順序立てて私にお讀み下さらうといふので、その際それに關係のあるいろんな書類を整理し、私の協力とお手傳ひでこの非常に貴重ではあるが混雜してゐる手帳や紙片から私たちやまた他の人にとつても愉しめるやうなものに纏めたいといふお考へでした。私は淸書のお手傳ひをするお約束をしました。さうして私たちは私たちが一緒に見ることのできなかつた世界を思ひ出のなかで旅をすることをほんとに心地よい上品な樂しく祕やかなものに思ひました。さうです、もう手始めはされてゐます。それからあなたは夕方にはまた笛をおはじめになつて私のピアノにお合せになりました。また近所からの訪問や、近所への訪問もないことはございません。私は少くともこんなすべてのことから私の生涯のうちにたのしみたいと思つてゐた最初のほんとに愉しい夏をこころのなかに組み立ててゐたのでした。」

「でも、たゞ僕にはどうしても、」と、エドアルトは額をこすりながら答へた。「お前がそんなにやさしく道理立てて繰返し言つてはくれるんだが、大尉がゐることがちつとも邪魔にならないばかりか、むしろすべてのことが促進され新しい生命を持つやうになると思へるんだがね。あの男も僕の旅行の一部を共にしたし、いろんなことを、しかもちがつた意味で觀察してゐた。僕たちがそれを一纏めに利用したら、そしたらはじめて美しい全體になるだらうと思ふよ。」

「では、正直に白狀さして下さいまし。」シャルロッテはすこしもどかしげに答へた。「この計畫には私の感情がぴつたり致しませんの。なにかよいことの豫感がないのです。」

「これだからお前たち女の人には全く勝てない。」エドアルトは答へた。「まづ反對もできないほど理窟立つてゐて、降參したくなるほどやさしくて、悲しませたくないほど感情的で、びつくりするほど豫感にみちてゐる。」

「私は迷信家ではございませんわ。」シャルロッテは答へた。「こんなはつきりしない昂奮なんかそれだけのものとしては問題にいたしませんわ。でも、大抵それは、自分や他人の行爲で經驗したことのある幸福な又不幸な結果の無意識的な記憶なんですもの。どんな場合でも、第三者の介入くらゐ重大なことはありません。私は、新しい人物が偶然に又はとくに選ばれて加はつたために關係が全く一變したり事情がすつかり逆になつたりした友だちや、きやうだいや、戀人たちや夫婦を見て居りますの。」

「そんなこともあるかも知れない。」エドアルトは答へた。「たゞぼんやりと生きてゐる人たちの場合はだね。だが、すでに經驗でものの分つた、もつと自意識のある人たちにはありえないことだ。」

「意識といふものは、ねえ、あなた、」シャルロッテは答へた。「決して十分な武器ではございませんわ。そればかりか時にはそれを使ふものにとつて危險なものですわ。これだけのことから少くとも、あまり急ぎすぎてはいけないといふことだけはたしかですわね。もう二三日お待ちして下さらない？　決めてしまはないでね。」

「こんな風では、」エドアルトは答へた。「四五日くらゐあとにしたつて急ぎすぎることになるだらうよ。贊成か不贊成かの理由はお互に述べあつたのだから、どうきめるかが問題だよ。實際、籤に委せるのがいちばんいゝことぢやないかと思ふがね。」

「知つてゐますわ。」シャルロッテは答へた。「あなたは疑はしいときは賭けをしたり骰子を投げたりするのがお好きですわね。こんな眞面目なことにはしかし、それは罪惡だと思ひましてよ。」

「しかし大尉にはいつたい何と書けばいゝのかい？」エドアルトは叫んだ。「僕はすぐ机に向はねばならないんだが。」

「落着いた、もの分りのいゝ、慰めるやうなお手紙よ。」シャルロッテは言つた。

「それでは書かないのとおんなじだよ。」エドアルトは答へた。

「でも、往々、」シャルロッテは答へた。「書かないよりは何でもないことを書くはうが必要でもあり親切でもある場合がございますわ。」

第二章

エドアルトはひとり自分の部屋にゐた。そして、實際、シャルロッテの口から自分の生涯の運命が話されるのをきゝ、お互の狀態や計畫を眼に見るやうに思浮べさせられたことがかれの活潑な氣持を心地よく上氣させてゐた。かれはかの女の傍にゐて、そのお相手をしてゐてほんたうに幸福であつたので、大尉に宛てて親切な同情のある、しかし落着いた、なにも暗示しないやうな手紙を考へ出したほどであつた。かれがしかし机のところに行つて、もいちどよみ通さうと友だちの手紙を取上げたとき、かれにはすぐまたこの秀れた男の可哀相な境遇が思浮んで來た。この日頃かれを苦しめてゐたあらゆる感情が再び眼覺めて、友だちをさういふ不安な境遇にまかしておくことはかれには不可能に思へた。

ものごとを諦めることにはエドアルトは慣れてゐなかつた。幼いころから金持の兩親の獨息子として甘やかされ、その兩親はかれを說き伏せて非常に年上の女と珍らしくはあるが極めて有利な結婚をさせることができたが、この女にもまたかれの示すよい振舞ひにおよそ最大の氣前よさを以て酬いようといふのでここはかぎりに甘やかされ、間もなく女が死んでからは自分自身の主人となり、旅のあひだは自由勝手にくらし、あらゆる多樣變化を意のままにし、過度

なことは欲しないが多量多種を好み、さつぱりとあけすけな性分で、善行もし、健氣で、場合によつては勇敢でさへもある——この世にかれの願ひにさからひうるものがなにがあつたらう！

これまではすべてがかれの思ふ通りであつた。シャルロッテを手に入れることさへもできた。執拗な小說的でさへもある誠實さによつて、かれはそれでも最後にかの女をかち得たのである。そして、いまになつて、かれは、自分の若い日の友だちを招き寄せ、自分の全生活を言はゞ閉ぢようとするときにあたつてはじめて反對され阻まれるのを感じた。かれは不快でいらいらし、ペンを二三度取つたり下したりした。何を書いたらよいのか決心がつかなかつたからである。妻の希望にさからひたくはなかつたが、その要求に從ふことはできなかつた。落着かない氣持であるのに落着いた手紙を書かねばならず、それは全くかれには不可能と言へた。最も自然なことは延期を求めることであつた。かれは言葉少なに友だちに、ここ暫く手紙を書かなかつたことやけふも詳しい手紙を書かないことの許しを乞ひ、この次にもつと重要な安心させるやうな手紙を出すことを約束した。

シャルロッテは翌日おなじ場所への散步を機會に、たぶん計畫をにぶらすには度々その話をするにかぎると信じたのであらう、例の話をまた始めた。

エドアルトにはこの繰返しは望むところであつた。かれはいつもの流儀で親しく氣持よく自分の意見を述べた。かれは感受性に富んでゐるために燃え上りやすく、その活潑な慾望は押し

つけがましくなり、執拗くて相手をいらいらさせるおそれはあつたが、その言ひかたが相手を十分にいたはることでやはらげられてゐるために、うるさくは思つても可愛ゆく思はざるをえなかつたのである。

こんな風にしてこの朝かれはまづシャルロッテを非常に朗らかな氣分に誘ひ、その優雅な言廻しですつかり落着きをうしなはせてしまつたので、かの女はついに、「あなたはきつと、私が夫に拒んだことを戀人には許させようとなさるのね。」と叫んだほどであつた。

「少くとも、ねえ、あなた、」かの女はつづけた。「あなたはあなたのお望みやそれをお話しになる親しげな快活な御様子は私を動かさずにはおかないつてことはお認めにならなくてはいけませんわ。私も白狀をしないではをれなくなります。私もこれまであることを隱してゐましたが。あなたによく似た事情なのです。そして、いま私があなた自身にお求めしてゐるやうな自制をすでに自分に加へてきました。」

「それは聞いてみたいね。」エドアルトは言つた。「僕も、結婚生活ではなんどでも喧嘩をせねばならぬことは十分認めるよ。そのためにお互についてなにか知つて行くわけだからね。」

「ではお聞きになつて下さい。」シャルロッテは言つた。「私とオティリエとはあなたと大尉のやうなものなのです。私はあの可愛いゝ子が私塾で非常につらい境遇に落ちてゐるのをみるのはほんとにいやなのです。世間向きな生れつきの私の娘のルチアネはそこで世間向きの教養

をつみ、語學や歴史やその他教へられる知識を樂譜や變曲と同樣に準備もなくどんどんやつて行き、活潑な性質で記憶力がいゝので、まあかう言ひたいのでございます、すべてを忘れて瞬間にすべてを思ひ出すといふふうなのです。また、自由な態度や優美なダンスやいかにもぴつたりした快適な會話でみんなに拔んでて、生れつきの支配的な性質で小さな世界の女王になりすましてゐますし、學校の女塾長さんなんかは自分の手にかけたのでははじめて本當に出來のいゝ子で自分に名譽を齎し信用を得させ他にも若い人たちが入つてくるやうにして呉れる小さな神樣みたいに見做して、その手紙や月々の報告の最初の數頁はいつもこのやうな子の優秀さについての讃歌でいつぱいなのです。私はそれを十分私の散文に飜譯することができます。これに反して、最後にオティリエについて述べてあることはいつも、他の點ではこんなに立派に成長してゐる娘が發達もせず、能力や技倆を示さうともしないことへの辯解ばかり重ねてゐるのです。この他にも少しばかり附加へてあることも私には同樣にちつとも謎ではありません。私はこの可愛いゝ子に、私に最も大切な友だちであつたその母親の性格をすつかり見るのです。その友だちは私の傍で育つた人で、私がもし教育者か監督者であつたなら、きつとその娘をすばらしいものに仕上げてみたいと思つたでせう。

ですけど、私たちの計畫にはそれは全然ないことですし、あまり生活狀態を引つぱつたり摘んだりし、またかならずしも新しいものを引寄せるべきものでもありませんから、私はむしろ

我慢してゐるんですの。實際、可哀さうなオティリエが全く私たちを頼りにしてゐることをよく知つてゐる私の娘が自分のそんな優越さを生意氣にも利用して私たちの親切をいくぶん臺なしにする嫌な氣持を抑へてもゐるのです。

でも、自分の優越さを時にはひとに殘酷なやりかたで振廻さうとしないほどに敎養のできたものが誰がありませう？　また、そんな厭迫を受けて時には苦しまないでをれるほど氣持を高くしてをれるものがありませうか？　この試煉でオティリエの價値は大きくなります。しかし、私はあの傷ましい狀態をほんたうにはつきりと見て以來あの娘を他のとこに寄宿させようと骨折つてみました。すぐにも返事が來るはずです。そしたら私はもう躊躇致しません。ねえ、あなた、私のはうはまあこんな工合でございますの。私たちはお互に誠實な友情にみちたこころにおなじやうな心配事を持つてゐるわけですわね。それが互に相殺するといふことはないんですから、私たちは一緒に耐へていきませうよ。」

「僕たちは不思議な人間だね。」エドアルトは微笑みながら言つた。「心配なことを眼のまへから放逐してしまひさへすれば、もうすんだことのやうに思つてゐる。全體としては僕たちはいろんなものを犧牲にすることができるが、個々のことで身を捨てるといふことはめつたに從へない要求だ。僕の母がさうだつた。子供の頃や青年時代に母の傍で暮してゐたころは、母は眼のまへの心配から解放されるといふことはなかつた。遠乘りで遲くなると、不幸が起きたの

にちがひないと思ひ、夕立にずぶ濡れになると、きつと熱が出ると心配した。が、僕が旅に出て、母からとほざかつてしまふと、僕はもうほとんど母のものではないかのやうであつた。」

「もつと精密に考へてみれば、」と、かれはつづけた。「僕たちは僕たちのこころにこんなにちかい最も氣高い二人の人物を、たゞ自分たちを危險に曝さないために憂愁と壓迫のなかに棄てておくなんて二人ともばかな無責任なことをするものだね。これが利己的でなくてなにが利己的だらう。オティリエを引取りなさい。大尉は僕に委せるんだね。では、とにかく、やつてみようぢやないか。」

「危險が私たちだけのことでしたら、」と、シャルロッテは氣づかはしげに言つた。「まあやつてみるのもいゝでせうけど。でも、あなたは大尉とオティリエとをおなじ家の者とするのがいゝことだとお思ひになりまして？　およそあなたとおなじ年輩の、つまり、こんなお世辭みたいなことをここでだけ言ふんですけど、男の方がはじめて愛することができ、愛をうけるに値ひする年輩の方とオティリエのやうなすぐれた娘とを。」

「僕にはでもやはり分らないね。」エドアルトは答へた。「どうしてお前にはあの娘がそんなに高く買へるんだらう？　あの娘があの娘の母親へのお前の愛情をうけ繼いでゐるといふことでしか僕には說明がつかないんだよ。あの娘は美しい。それは本當だ。僕たちが一年前に歸つて來て、お前の叔母さんの家でお前と一緒だつたあの娘に逢つたとき、大尉が僕にあの娘を氣

づかせたのを思ひ出す。あの娘は美しく、とくに綺麗な眼を持つてゐる。でも、僕には少しでも印象をあたへたやうにはおぼえてゐないね。」

「それがあなたの感心なところですわ。」シャルロッテは言つた。「だつて私がちやんと居合せたんですもの。あの娘は私より大へん若いとはいつても、年とつた女友達がゐるとそれがあなたには魅力があつて、これから花の咲き出す未來を約束する美しさを見落しておしまひになつたんですわ。これもやはりあなたの人となりによるんですわね。ですから私よろこんであなたと一緒にくらすんですの。」

シャルロッテは正直に言ふやうにはみえたが、でもあることを隱してゐた。つまり、かの女は當時、自分の愛する養女に立派な緣組をさせようといふ魂膽で、旅から歸つたエドアルトの前にわざとオティリエを引出したのであつた。エドアルトに關しては、かの女は自分のことはもう考へなかつたからである。大尉もまたエドアルトの注意を促すやうふくめられてゐた。が、シャルロッテへの以前の戀愛を執拗に心に抱いてゐたエドアルトは左右を見る餘裕もなく、たゞ、あんなにはげしく望んでゐていろいろな出來事のため一見永久に拒まれてゐた寶をついに手に入れることができるといふ感情で幸福なのであつた。

ちやうど夫妻が新しい庭園を下りて館の方へ行かうと立上つたとき、一人の召使がせはしげに登つて來て、すでに下の方から口に笑みを浮べながら言葉をかけた。「どうぞ急いでお越し下

さいまし。ミトラーさんがお館の中庭に飛び込んでいらつしやいました。そして、みんなに、御前樣方をお探し申して、御用がおありかどうかおたづねするやうにとお呼掛けになるんです。用がないかどうかだよ、聞えるかい、早く早く、とおわめきになりますんで。」

「をかしな男だ！」エドアルトは叫んだ。「ちやうどいゝ時に來てくれたと思はないかい？シャルロッテ。では、急いで戻つてな、」かれは召使に命じた。「用は大ありだと言つてくれ。ま あ馬をお下りくださいましつて、な。馬のお世話をして、客間にお通しして朝御飯を差上げるんだ。僕たちもすぐ行くから。」

「いちばん近道を行かうよ。」と、かれは妻に言つて、いつもは避ける慣しの墓場を越す小徑をとつた。が、シャルロッテがここでもまた感情といふものに心をくばつてゐるのを見てかれはどんなに驚いたことであらう。かの女は古い記念碑をできるだけ大切にして、眼や想像力が好んでとどまるやうな氣持のいゝ場所にみえるやうにすべてを一樣にし整理することを知つてゐた。

最も古い石にもかの女は敬意を拂つた。年代順に石垣の側に立並べたり組み入れたり、またはその他の方法で持寄せられてゐた。教會そのものの高い臺石はそれで多樣にし又飾られてゐた。エドアルトは小さな門を入らうとしたとき、不思議な驚愕をおぼえた。かれはシャルロッテの手を握り、眼には涙がたまつてゐた。

が、おどけた客がすぐその涙を引込ませた。かれは館では休息せずに、眞直ぐに村を通つて墓地の門まで乘りつけ、そこに立止つて友だちの方へ呼び掛けたのである。「あんたがたはしかし私をだまさうつてんぢやなからうね？　ほんとに用があるんだつたら晝飯はここでとりませう。が、引止めないで下さい。けふはまだ澤山用があるんだから。」

「ここまで來られたんだから、」と、エドアルトは呼び掛けた。「もつとすつかりおはいりになつたらどうです。僕たちは眞面目な場所に來合せてゐるのです。シャルロッテがこの悲しみの場所をどんなに美しく飾つたかをひとつ御覽になつて下さい。」

「ここへなんか、」と、騎手は言つた。「馬でも車でも歩いてでもはいりませんわい。ここの連中は平和にやすらつてゐる。私とは何の關係もないわけでさ。足から先に引ずり込まれるやうなことでもあつたら、以て瞑すべきですがね。ところで、眞面目なお話ですかな？」

「えゝ、」シャルロッテは叫んだ。「眞面目なお話ですとも。私たち新夫婦が困却し混亂して拔け出ることもできないでゐるのはこれがはじめてですの。」

「そんなふうにも見えませんがね。」かれは答へた。「だが、まあさうと信じませう。おだましにでもなつたら、これきり見限つちまひますぞ。では、はやく私のあとを追つて來て下さい。馬にも休息がよいかも知れない。」

間もなく三人は客間にあつまつた。食事がはこばれ、ミトラーはけふの仕事と計畫とについ

て話した。この珍らしい男は以前は牧師であつて、職務にはやすみなくはげみ、家庭内ばかりでなく隣同士のあらゆるいさかひを、はじめは二三人の住民たちであつたがやがては全教區の又多數の領主たちの紛爭を鎭めたり調停したりすることができたので有名であつた。かれの在職中は夫婦別れしたものもなく、州議會もこの地方からの喧嘩や訴訟で煩はされることはなかつた。法律知識の必要さについてはかれはすぐそれに氣がついた。かれはその研究に全力を傾け、まもなく最も熟練した辯護士にも負けないやうになつた。かれの活動範圍はふしぎなくらゐひろがつて、かれが下から始めたことを上から完成するためにいまにも首都へ引張られやうとしてゐたが、かれはちやうど可成りな富籤に當つて手頃な莊園を買ひ、それを小作貸しにして自分の活動の中心點にさだめた。そして調停したり助けてやつたりすることのない家には留らないといふ堅い意志を以て、といふよりも、古くからのさういふ習慣と傾向にしたがつてやつて行つた。名前の意味に對して迷信的な人たちはミトラー(註)といふ名前がえりにえつてこんな極めて珍妙な天職を持つやうに餘儀なくしたのだと主張した。

食後の物がはこばれたとき、客は主人側に、珈琲のあとではすぐ出掛けねばならないから打明け話をこの上さし控へないでくれと眞面目にたしなめた。夫妻はともに詳しく告白をした。が、事柄の意味を聞知るやいなや、かれは不愉快さうに急に食卓を起つて窓際にとんで行き、馬に鞍を置くやうにと命じた。

「あなたがたは私を知らないのか、」かれは叫んだ。「わかつてゐないのか、でなければひどい意地悪だ。いつたいここに爭ひなんかがありますかいな？　助ける必要があるとでもいふのですかな？　私は忠言をするために生きてゐるとでもお思ひですかな？　そんなことはこの世でいちばん愚劣な仕事ですて。誰でも自分が忠言をして、せずにはおけないことをするんですよ。うまく行けば自分の智惠と幸福を喜べばいゝし、失敗すればそのときは私がちやんと居りますわい。」失敗すまいとするものには自分のしたいことがいつも分るんだが、いまよりよいことを願ふものは全く白内障宵同然ですわ。さう、さう、お笑ひなさい、眼隱しごつこをしてるやうなもので、たぶんなにか摑みはするでせうが、さて何をつかむやら。お好きなことをなさい。全くおなじことですよ。友だちをお呼びにならうと突放さうと、どつちでもおんなじです。この上なく理性的なやりかたでも失敗し、無趣味なことでも成功した例を私は見てきました。頭を惱ますことはありません。どうかかうかやつてみて失敗したつて氣に病むことはありません。私をお呼びになりさへすればいつでもおたすけしませう。それまでは折角だが御免ですな。」

さう言つてかれは珈琲も待たず、ひらりと馬に跨つた。

「そら御覽なさい。」シャルロッテは言つた。「親密な二人のあひだが十分に均衡がとれてないと、第三者なんてものは實際役に立たないものですわね。いまでは私たちは、そんなことが言へるとすれば前よりも混亂して不確かな氣持ですわ。」

夫妻二人は、もし大尉の手紙がエドアルトの最後の手紙と入れかはりに着かなかつたら、まだ暫くは恐らく思ひ迷つてゐたであらう。大尉は少しもふさはしいものではなかつたが提供されてある地位を得ようと決心したのであつた。かれは身分の高い金持の人たちと退屈をわかたねばならないのだつた。かれならそれを逐ひ拂つてくれるだらうと信賴されたのである。

エドアルトはこの事情全體を本當にはつきりと見渡したうへ、さらに全く鋭くそれを心に描き出した。「僕たちは友だちをこんな狀態においていゝといふのかい？」かれは叫んだ。「シャルロッテ、お前はそんな殘酷な氣持にはなれまいね。」

「あの奇妙な私たちのミトラーさんの言はれることは結局やはり正しいんですわね。」シャルロッテは答へた。「こんな企てはみんな冒險なのですわ。それがどうなるか誰も豫想できません。こんな新しい事情は幸福も又不幸も産むことができるので、私たちはとくに手柄や罪を言ふことは許されないわけです。私はもうこの上あなたに反對するほど氣强くはありませんわ。ひとつ試つてみませうよ。でも唯一つお願ひがありますの。それは、短かい暫くの間だけにするやうにしていただきたいのです。そして、私がいままでより以上にあの方のために骨折つて、私の勢力や關係を熱心に利用して、あの方らしい流儀であの方にいくぶんでも滿足をあたへるやうな地位をお世話できるやうみんなを督勵するのを許していただきたいと思ひますわ。」

エドアルトは妻にこの上なく優しく熱烈な感謝の意を示した。かれは自由な愉しい氣持で、

急いで友だちにいろんな提案を手紙で書いた。シャルロッテは追書で、その贊意を自筆で書き加へ、友情のこもつた招待を夫と一致させねばならなかつた。かの女は馴れた手つきで懇切且丁寧に書いたが、いつもにない一種のせはしさがあつた。そして、滅多にないことであつたが、かの女はついにインキの汚斑で紙を穢してしまひ、それでいらだつて消し取らうとしたため益〻大きくなつた。

エドアルトはそれに冗談を言ひ、まだ餘白があつたので第二の追書を加へた。君はこの印からどんなにもどかしがつて待たれてゐるかを知り、手紙の書かれた速さにしたがつて旅の速さをさだめねばならない、と。

使は去つた。エドアルトはそれ以上つよく感謝を表はす方法はないと信じて、繰返し、シャルロッテがすぐオティリエを塾から連れて來させるやうに主張した。

かの女は猶豫を乞うて、その夜はエドアルトに音樂の娯しみをしようといふ氣持を起させることができた。シャルロッテは非常に上手にピアノを彈いた。エドアルトの笛はそれほど快適には行かなかつた。かれは時々大へん努力してみることはあつたが、こんな才能の養成に必要な忍耐と根氣が授けられてゐなかつたからである。かれはだから自分の持ち分を演るに非常にむらがあつて、ある節は恐らく速すぎるだけで上手にやるかと思ふと、他の節では樂に行かずに停滯してしまひ、かれと二部合奏をやりおほせるのは他の誰にも困難なことであつたらうと思

へる。が、シャルロッテはこれに調子を合せることを心得てゐた。かの女は停止したり、再び引きずられて行つたりして、上手な樂長と賢い主婦との二重の義務を果すのであつた。このために、個々の節は必ずしも調子が合はなくても全體としてはつねに節度を保つことができた。

第三章

大尉は來た。かれは豫め非常に條理の立つた手紙を送つておいたので、それがシャルロッテをすつかり安心させた。自分自身についてのこのやうな明瞭さ、自分の事情や友だちの事情についてのこのやうな明徹さは朗らかで悦ばしい期待をあたへた。

最初の數時間の會話は、暫く會はないでゐる友だちのつねとして生き生きと、いな殆んど何もかも話し盡さんばかりであつた。夕方シャルロッテは新しい庭園の散歩をすすめた。大尉はこの地方が大へん氣に入つて、新しい道路によつてはじめて見もし味ふこともできるやうになつたあらゆる美しさに氣がついた。かれは訓練された眼を持つてゐたが、同時に足るを知る眼を持つてゐた。かれは望ましいものを十分に知つてはゐたが、よくあるやうに、自分をその庭内に案内してくれる人たちを、狀況の許す以上のことを望んだり他所で見たなにかもつと完全なものを思ひ出させたりして不機嫌にするやうなことはなかつた。

苔張りの小屋に着いたとき、かれらはそれがとても愉しく飾られてゐるのを見出した。造花と常春藤(きづた)だけであつたが、そのあひだに拵へた人の藝術感のほまれになるやうな美しい野生の小麥や他の畑や樹の實の束があしらつてあつた。——「主(たぬし)は誕生日とか命名日を祝つてもら

ふのは好きませんけど、けふは三重のお祝ひにこの少しばかりの花環を捧げるのを惡くは思はないでせう。」

「三重だつて？」エドアルトは叫んだ。「全くその通りですわ。」シャルロッテは答へた。「お友だちのいらしつたことは當然一つのお祝ひですわ。ところで、あなたがたは二人ともけふが御自分たちの命名日だつてことをお思ひ出しにならないらしいのね。お二人ともオットーと仰しやるんぢやなくつて？」

二人の友は小さな卓子越しに手を握りあつた。「お前は僕にあの小さい時の友情的な行爲を思ひ出させるよ。」と、エドアルトは言つた。「子供のとき僕たちは二人ともそんな名前だつた。が、寄宿舍で一緒に暮し、このためいろんな間違ひが起つたとき、僕はすすんで大尉にこの美しく簡潔な名前を讓つたのだ。」

「それはしかし大して氣前のいゝことでもなかつたよ。」大尉は言つた。「だつて僕はよく憶えてゐるんだが、エドアルトといふ名前のはうが、可愛いゝ唇で言はれたときなどとくにいゝひびきを持つてゐたものだから君のお氣に召したんだよ。」

かれらはいまやかうして三人で、シャルロッテが客の來るのを熱心に反對したあのおなじ小卓のまはりに腰を下した。エドアルトは滿足の態で、妻にあのときのことを思ひ出させたくないと思つた。が、かれは次のやうに言はずにはをれなかつた。「まだ四人目の者のために十分餘

地があるやうだね。」と。

このとき館のはうから森の角笛が聞えて來て、一緒に集つてゐる友人たちの善意と希望を言はゞ肯定し力づけるかのやうであつた。かれらは各々自分自身にかへり、かくも美しい結合のなかで各自の幸福を二重に感じながら、靜かに默つて耳を傾けてゐた。

エドアルトがまづ立上つて苔の小屋の前へ歩み出ながら沈默を破つた。「どうだね、」かれはシャルロッテに言つた。「友だちをすぐすつかり頂上まで案内しようぢやないか。この狹い谷間だけが僕たちの世襲の莊園で居住地だなどと思はれないやうにね。上へ行けば眼界は自由になるし胸も廣くなるよ。」

「それでは、こんどはまだ、」シャルロッテは答へた。「もとの少しやゝこしい小徑を攀ぢ登らねばなりませんわ。でも、この次には私のつくる段々や坂路ですつかり頂上までもつと樂に行けるやうにしたいと思ひますわ。」

かうして岩を越え、藪や灌木林を拔けて最後の頂上に着いたが、そこは平地ではなかつたが、ずつとつづいた豐饒な丘の背をなしてゐた。村や館は後ろの方にもう見えなかつた。谷間にはいくつかの廣い沼が見えた。その向ふに草木に蔽はれた丘があり、沼はそれに沿うて伸びてゐた。最後に險しい岩があり、それが垂直にいちばん終ひの水鏡をはつきりと區切つてゐて、大きな形を水面にうつしてゐた。そこの谷合に勢のいゝ小川が沼に落ち込んでゐるところに、な

かば隱れたやうに水車小屋があつて、周圍とともに氣持よささうな休み場所にみえた。見渡す半圓の世界には谷間や丘や藪や森がさまざまに變化してゐて、その綠の芽はこれからのこの上なく豐かな風景を約束してゐた。また、いろんな場所で一つ一つの木立も眼をとらへて放さなかつた。殊に眺めてゐる友人たちの足下に一群のポプラとプラターヌが眞中の沼のすぐ岸邊に大へん目立つてゐた。それは見事に成長してゐて、新鮮で健康で上にも横にも伸びてゐた。

エドアルトはとくに友だちの注意をここに引いた。「これを僕は、」かれは叫んだ。「小さい頃自分で植ゑたんだよ。まだ若木のときで、父が大きな庭園の新しい部分を設計するとき夏の盛りに引拔かせたのを救つてやつたんだ。勿論今年もまた感謝して新しく枝を張つてみせるだらう。」

みんなは滿足して朗らかに歸つた。客には館の右翼に居心地のよい廣い部屋があてがはれた。かれはすぐそこに書物や書類や器具を置き並べて整理し、いつもの仕事をつゞけられるやうにした。が、エドアルトは最初の數日はかれを休ませてはおかなかつた。かれは馬や又徒步で客を到るところに連れてまはり、この地方や莊園について說明した。そのとき、かれは同時に、莊園についてのもつとよい知識と有利な利用法についてながい間いだいてゐた希望を打明けた。

「まづ第一にしなくてはならぬことは、」と、大尉は言つた。「僕が磁針でこの地方を測量する

ことだね。それはたやすい愉しい仕事だよ。たとへ完全に精確には行かなくても、やはり役に立つ、手始めとしては結構な仕事だ。また大して手傳ひも要らずにできるし、仕上ることはたしかだ。もつと精確な測量を君が望むなら、それにはまた方策が見つかるさ。」

大尉はこの種の測量には非常に熟練してゐた。かれは必要な道具は携へて來てゐて、すぐに仕事をはじめた。かれはエドアルトや仕事に手傳ふ筈の二三人の獵師や百姓に手ほどきをした。天氣は惠れてゐた。夕方と早朝をかれは製圖と線影を描くことで暮した。すべてはまた急速度にぼかしたり着色されたりした。エドアルトは自分の所有地を新しいものが生れ出でもしたやうに實にはつきりと圖面から見るのであつた。かれはいまはじめてそれを知ることができたやうな氣がし、本當に自分のものとなつたやうに思へるのだつた。

このことは、この地方や庭園について話をする機會をあたへたが、かういふ概觀圖によるはうが、一つ一つ偶然の印象によつて自然に對していろいろ試みをするよりもはるかによく出來上るものと思へた。

「これは妻にもはつきりさせておかねばいけないね。」と、エドアルトが言つた。

「そりやいけない！」大尉は答へた。かれは他人の確信を自分の信念で横切ることを好まなかつたし、ひとの意見は實に多様で最も合理的な説明によつても一點に集めるなどといふことはできないことを經驗によつて知つてゐたのである。「そいつは止したまへー」かれは叫んだ。「奥さんは迷つてしまふよ。ただ好きでそんなことをするひとは誰でもだが、奥さんにとつてはなにかゞ爲されるといふことよりもむしろなにかを爲るといふことが大切なんだよ。ひとは自然を手探りして、あれこれの場所をとくに好いたりする。が、思ひ切つてどれかの障碍を除かうとはしない。なにかを犠牲にするほど大膽でないのだ。また、どんなことが起るか豫想することができない。やつてみる。あたつたり、あたらなかつたりする。なにかを變へようとする。が、恐らくそのまゝにしておくべきものを變へ、變へるべきものをそのまゝにしておく。かうして、終ひには斷片的な仕事が殘るばかりで、氣に入つたり興味を引いたりはするが滿足はしない。」

「率直に打明けてくれないかね。」エドアルトは言つた。「君は僕の妻のつくつた庭園には不滿なんだね。」

「考へは非常にいゝんだから、實行がその通りにできて居れば何も文句を言ふところはないだらうがね。奥さんは岩のなかを骨折つてのぼつて行かれたわけだが、かう言つてよければ、奥さんの御案内で登つて來てみて誰でもがちよつと苦しい思ひをするんだぜ。並んでも前後になつても自由に歩けないんだよ。歩調は一瞬毎に破れるしさ。まだ他にも文句がつけられないものはなささうだがね。」

「ほかのやり方ですればたやすくやれたんだらうか？」エドアルトは訊いた。

「全くわけないさ。」大尉は答へた。「小さい部分からできてゐるうへに見榮えもしない岩角を一つこはして取除けさへなさつたら、上へ登る美しい弓形の廻り道と同時に道が狹く畸形になつた場所を壁にするための有り餘るほどの石とを手に入れることがおできになつただらうよ。だが、これは全く僕たちだけの內證で言ふことだよ。でないと、奧さんは途方に暮れちまつて不愉快になられるだらうからね。また、できたことはそのまゝにしておかねばならないさ。もつと金や骨折をかけるつもりなら、苔の小屋から上の方へ、頂きの向ふにまだいろんなことをし、いろんな愉快なことができるんだがね。」

二人の友はかうして現在のことでいろんな仕事があつたのだが、過去つた日々の生々とした樂しい思ひ出にも缺けてはゐなかつた。それにはシャルロッテも加はるのがつねであつた。また、みんなは、差當つての仕事が濟みさへすれば旅行記にとりかかり、そんなにしてまた過去を呼び返さうと計畫した。

それはさうと、エドアルトはシャルロッテと二人きりでは話のたねが少くなつた。かの女の遊園についてのいかにも正しいと思はれる非難を胸におぼえて以來はとくにさうであつた。ながい間かれは大尉に打明けられたことを默つてゐた。が、妻がついに苔の小屋から頂きの方へ再び段々や小徑で仕事をして行かうとするのを見ると、かれはもうこれ以上抑へてゐることはできず、少し廻り道をしたあとで自分の新しい見解をかの女に知らせた。

シャルロッテは愕いた。かの女はそれが正しいことをすぐ了解するだけには怜悧であつたが、すでに爲し終へたことが反抗した。ともかくさうしてしまつたことであつた。かの女はそれを正しく望ましいものと思つてゐたのだ。非難されたことすらも個々の部分としては可愛ゆいものであつた。かの女はその確信に反抗し、自分の小さな創造物を辯護し、すぐ廣く大きく行かうとし冗談や慰みをすぐ仕事に移さうとして擴張された計畫にかならずともなふ費用を考へない男たちを難じた。かの女は動搖し、傷つき、不愉快になつた。古いものを捨てることもできず、新しいものを全く拒絕することもできなかつた。が、決斷力のあるかの女はすぐ仕事を中止して、少し時間をかけて事柄をよく考へ、自分のこころのなかに熟させることにした。

ところで、かの女はいまや仕事をする樂しみも失くしてしまひ、また一方男たちは益々仲よく仕事をはげみ、とくに遊園や溫室に熱心に心を配り、その合間にはまた狩獵とか馬の買入、交換、調練、馬車に馴らすことなどのいつもの騎士らしい訓練をもつづけたので、シャルロッテは日毎に孤獨を感じて行くばかりであつた。かの女は手紙の往復を、大尉のためにも活潑に行つた。が、それでも孤獨な時間がときにはのこるのであつた。それだけに益々塾から來る報告がかの女には快く娛しみになるのだつた。

いつものやうに娘の進步についていゝ氣になつて長々と書いた塾長の冗漫な手紙に、短い追書と、學校の男の助手の筆跡の添書が附けてあつた。その二つをここに示さう。

塾長の追書

奥様、オティリエ様については實際のところ以前のお報せとおなじ内容を繰返しさへすればよいのではないかと思ひます。私はあの方をお叱りすることもできないやうに思へますが、また満足致すこともできません。相變らず謙讓で他人に對しては親切でいらつしやいますが、この遠慮がちで從順なことが私には氣に入りません。奥様は最近お金といろんな衣類をお送りになりましたが、あの方はお金には手をつけませんし、また衣類も手を觸れずにそのまゝになつてゐます。勿論身のまはりはたいへん清潔に大切になさいますが、着物をお着換へになるのもただこのためらしく思はれます。また私は飲食を非常に愼しみがちでゐられるのが感心できません。私たちの食卓には過剰なものはございませんが、美味しい健康な食物を腹一杯に子供たちがたべるのを見るほどうれしいことはございません。熟慮と確信を以て食膳に上したものはみんな食べていただかねばなりません。オティリエ様にはどうしてもさうさせることができないのです。それにあの方は給仕女がなにか手ぬかりをした間隙をみたすために何か用事をなさいますが、これは全く一皿のプディングか食後の果物を見過すためなのです。これらのことでしかし問題になりますのは、私はあとになつてやつと開知つたのですが、あの方は屢々左側に

頭痛をなさることです。これは一時的なものですが、苦痛な又重大なことでもあるかも知れません。その他の點ではまことに美しく可愛いゝこのお嬢さんについてはこれだけでございます。

助手の添書

私共の秀れた塾長はその生徒についての觀察を御兩親や監督者の方々にお傳へする書狀をいつも私に讀ませるのがつねでございます。奥様宛の書狀を私はいつも二重の注意と満足を以てお讀み致して居ります。と申しますのは、この世に拔んづるに到るあの凡ゆる輝しい特性をおもちになつてゐるお嬢様のためにお慶び申上げねばならないとともに、御養女様に於て、他人の幸福と満足のために又確かに御自身の幸福のために生れてゐられる御子様をお授かりになつてゐることを私は少くとも同様に奥様の御幸福と申上げずにはゐられないのでございます。オティリエ様は私が大に尊敬する塾長と一致できないほとんど唯一の生徒さんです。私はこの活動的な女性がその骨折の果實を外面的にはつきりと見たいと望まれることを悪く思ふものでは決してありません。が、はじめは全く堅くて早晩美しい生命に開展する閉されたる果實もございます。御養女様は確かにさういふお方です。私のお敎へ致しますかぎりに於て、あの方はいつも同じ歩調で、決

して後退はせず、ゆつくり、ゆつくりと前へ進んで行かれます。もし、最初から始める必要のある子供がゐるとしますれば、それは確かにあの方かと思ひます。先行するものの結果でないものはあの方には御理解が行きません。容易に理解できるものでもあの方にとつて何物とも關聯のないやうなもののまへには、あの方は無能力であり頑冥でさへあります。が、中間物を見つけだしてあの方にはつきりさせることができると、どんな難しいものでも御理解が行きます。

このやうに徐々にお進みになりますために、あの方は、全く異つた才能を以てつねに前進を急ぎ、すべてを、關聯のないものをも容易に把握し記憶し自在に應用する他の同窓の生徒さんたちに比して立ちおくれて居られます。急速な講義ではあの方は全然だめです。秀れてはゐられるが速度が早く短氣な先生の二三の授業などの場合がそれです。あの方の筆跡や文法の規則把握の無能力についても訴へがありました。が、私はこの苦情について仔細に調べてみましたところ、なるほど書き方がのろくて、さう言つてよければ生硬でもありますが、おどおどともしてゐないし不恰好なこともございません。これは私の專門ではございませんが、フランス語について一歩一歩お教へ致しましたところ、あの方はよくお解りになりました。全く不思議なことではございますが、あの方は澤山又十分よく知つては居られますが、たゞひとに訊かれた場合には何も知らないかの

やうに見えられます。

概括的な言葉でこのお手紙を終らねばならぬとしますれば、私は次のやうに申上げたいのでございます。あの方は教育される人としてではなくて教育する人として學んでゐられます。生徒としてではなくて教師としてです。恐らく奥様はお思ひになるかも知れませんが、私は自身教育者であり教師として、ひとを自分と同型の方と申上げるとき最も尊敬を表したものと信じてゐるものでございます。奥様のよりよき御洞察とより深い人間智並に世間智は私のこの偏狭な好意ある言葉から最善のものをお汲みとり下さることと存じます。又、このお子様にも多くの喜びが期待されることをお信じになるでせう。では、これで失禮致します。なにか重要な愉快な内容の手紙だと思ひますときはまたお手紙差上ることをお許し下さいませ。

＊

シャルロッテはこの手紙を喜んだ。その内容はかの女がオティリエについて抱いてゐた觀念と全く一致してゐた。その際かの女はしかし、教師の同情が普通一生徒の美點への洞察がうむ以上に心をこめたものに見えたので微笑を禁じえなかつた。が、かの女はいつもの落着いた偏見のない考へ方でこのやうな關係をも他の多くの關係と同様そのままにしておいた。理性ある男

のオティリエへの同情をかの女は價値あるものに思つた。無關心と嫌惡とが本來全くつねである世の中で眞實の愛情がすべていかに高く評價すべきものであるかをかの女はその生涯に於て十分に知つてゐたからである。

第四章

莊園とその周圍をかなり大きな尺度で特色があつてわかり易いやうに線や色彩で描き、大尉によつて三角測量で確實に基礎づけることのできた地形圖はまもなく出來上つた。この活動的な男ほど睡眠が少くていゝ人間もまれであつたし、また、日中はたえず眼前の目的に捧げられたので夕方にはいつもなにかが出來てゐたからである。

「それではひとつ、」と、かれは友だちに言つた。「殘りの仕事に、莊園の記述にかからうではないか。それにはもう十分豫備の仕事はできてゐるわけだし、それをやるときつとあとで小作地評價やその他のことが出來てくるだらう。たゞ一つしつかりきめておきたいことがある。本來の仕事をすつかり生活から切離すことだ。仕事は眞面目さと嚴格さを要するが、生活は氣紛れだ。仕事は最も純粹な首尾一貫を要するが、生活には屢〻矛盾撞着が必要だ。否、愛すべく氣持を朗らかにすることでもある。仕事で確實であればあるだけ生活では自由になることができる。二つを混同して確實さを自由さのために奪ひとられたり失くされたりすることがないわけだ。」

エドアルトはこの申出にかるい非難を感じた。生れつきだらしがないわけではなかつたが、

かれは未だかつて自分の書類を部門によつて分けるやうなことができなかつた。他人とともに片づけるべきことと自分だけにかかはつてゐることとを區別しなかつた。同様にまた仕事と事務、娯樂と氣散じとを十分に區別しなかつた。が、いまはそれが容易になつた。友だちがこの骨折を引受け、第二の自己がこの區別をしたからである。が、かならずしも一方の自己はおのれを分割することを好んではゐなかつた。

かれらは大尉の住居になつてゐる翼に現在のことのための書棚と過去のもののための書庫とをつくつた。文書や書類や報告はすべていろんな容器や納戸や戸棚や箱のなかから取出して來て、混亂してゐたものは非常に敏速に好ましく整理され、記號を附した抽斗の中に分類してしまはれた。希望したことは思つてゐたよりも完全にできた。この際一人の老書記が大へん助けになつた。この男は一日中、夜も少し寫字臺から離れなかつたが、エドアルトはそれまでいつもこの男には不滿足だつたのである。

「僕はあの男を見ちがへてしまふよ。」エドアルトは友だちに言つた。「ばかに仕事をする役に立つんだね。」「そりや君、」と大尉が答へた。「古いことをあの男が氣儘に仕上げてしまふまでは何も新しいことをさせないからだよ。だから、あの男は御覽の通り非常に仕事をするのさ。が、少しでも邪魔されるともう何にも出來ないよ。」

二人の友だちはこんな風にして晝間を一緒に過したが、夕方になるときまつてシャルロッテを

訪ふことを怠らなかつた。近隣の土地や莊園からのお客がないときは、そんなことは時折あつたが、かれらの會話や讀書は大抵、市民社會の福祉と利益と安樂を增すやうなことに捧げられた。

それでなくても現在を利用することになれてゐるシャルロッテは、良人が滿足してゐるのを見ながら、自身もまたいろいろ進歩させられてゐるのを感じた。ながい間のぞんでゐて十分にできないでゐたいろんな家の中の設備が大尉の働きによつて出來上つた。これまで少しの藥品しかなかつた家庭藥局は豐富にされた。さうしてシャルロッテはわかり易い本を讀んだり相談をしたりして、その活動的で手助けをすることの好きな性分を以前よりも度々また有效にはたらかせるやうな狀態になつた。

また、いつものことではありながら實に屢々肝を冷やされる危急の場合についても熟慮が拂はれたとき、溺死者の救助に必要と思へるすべてのものが、沼や河や水道工事などの澤山ある近傍でさういふ不幸が屢々起つたので餘計澤山に買ひ込まれた。この題目に大尉は非常に細々と心を配つた。エドアルトは思はず、かういふ事件が友だちの生涯に實に不思議に一時期を劃したことを口を滑らせた。が、大尉が默つて悲しい追憶を避けるやうにみえたとき、エドアルトも同様に言葉を止めた。シャルロッテもまた、このことについては同様に大よそ知らされてはゐたが、エドアルトの言葉を聞えぬふりをした。

「かういふ豫防設備はみな立派なことだと思ふが、」と、ある夕、大尉は言つた。「しかし、まだいちばん必要なものが、つまり、これらすべてを司ることのできる有能な男が缺けてゐるね。僕がそれには知合の外科の軍醫を推薦できるよ。この男はいま好い加減な條件で手に入れることができるんだ。專門の方面で秀れてゐるばかりでなく、烈しい內科の疾患の治療でも有名な醫者より往々滿足をあたへてくれたことがあるんだ。田舍でいちばん缺けてゐるのはやはり應急の手當てだね。」

この男にはまたすぐ申込みの手紙が書かれた。夫妻は自分たちの氣紛れな費用に殘つてゐた可成りの金額を最も心要なことにつかふ機會が見つかつたことを喜んだ。

かうしてシャルロッテはまた大尉の知識や働きを自分の思ひ通りに利用し、大尉のゐることに全く滿足し、すべての結果について安心しはじめた。かの女はいろんな質問の用意をする習慣となり、生を悅んで、あらゆる有害な死をみちびくやうなものをとほざけようとつとめた。陶器の鉛の釉藥とか銅器の綠青はこれまでもいろいろかの女に心配を抱かせてゐた。かの女はこれについても敎へられた。このやうにして自然に、みんなは物理化學の根本概念にまで溯らねばならなくなつた。

皆の前で朗讀をするエドアルトの趣味がかういふ會話に偶然ではあるがいつも喜ばしい機會をあたへた。かれは非常によく響く深い聲を持つてゐて、以前は詩作や演說の生き生きとした

感情のこもつた朗讀で人々に喜ばれ又有名であつた。たゞ、いまかれがやつてゐる對象や讀んでゐる書物はもつとちがつたもので、ちやうど少し前からとくに物理、化學、工學の內容を持つ本であつた。

おそらく同樣な人は多いであらうが、かれの特性の一つは、朗讀中にひとに本を覗かれると耐へがたい思ひをすることであつた。以前詩や劇や物語などの朗讀をしてゐたときは、これは、朗讀者が詩人や劇作家や物語作者と同樣にもつてゐる人を驚かしたり、間をおいたり、期待を起したりしようといふ熱心な意圖の自然の結果であつた。第三者が知つたかぶりに眼で先を越すのは勿論かういふ意圖された作用を非常に妨ぐるものである。だから、かれはまたかういふときはいつも、自分の背後には誰もゐないやうに席をとるならはしであつた。が、いまは三人だからかういふ用心は要らなかつた。こんどは感情の刺激や想像力の奇襲などをもくろむわけではなかつたから、かれは自分でもとくに注意しようとは思はなかつた。

たゞある夕方、かれが無造作に席をとつてゐたとき、シャルロッテが本を覗き込んで驚かした。例の短氣が眼覺めて、かれはかの女を少し無愛想に叱つた。「こんな不行儀なことは、皆を不快にするやうな他のいろんなこと同樣もうこれきりにしてもらひたいものだね。僕が本を讀んでやつてゐるのは、口でなにかを話してるやうなものではあるまいか。書いたり印刷したりしたものが僕自身の考へや心の代りになるんだよ。もし僕の額や胸の前に小さな窓でもつけられて

ゐて、僕がいちいち考へや感じを傳へようと思ふ相手が僕の言はうとすることをとうの昔に知ることのできるやうにでもなつてゐたら、僕は一體わざわざ話したりするだらうか。本を覗かれると、僕はいつもまるで二つに裂かれるやうな氣がするよ。」

大小いづれの集ひに於てもとくに、どのやうな不愉快な、又激烈な、否、勢ひがいゝにすぎない言葉でさへも取除いたり、長びく話を打切つたり、言ひよどんでゐるのを促したりすることのできることでその圓滑さを示してゐるシャルロッテは、こんどもその秀れた才能に見捨てられてはゐなかつた。「私にいま起つたことをお打明けしたなら、きつとあなたも私の過ちをお許し下さるでせう。私は親和力についてお讀みになるのを耳にして、すぐにちやうどいま心を苦しめてゐる私の親戚の二三の從兄弟のことを考へたのです。が、私の注意があなたの朗讀に戻つてみると、全くの無生物についてのお話でした。そこで、また勝手が分るやうに本を覗き込んだのです。」

「お前を誘惑して混亂させたのは譬論だね。」エドアルトは言つた。「勿論ここには土地と鑛物だけが取扱つてあるんだが、人間は本當にナルシス[3]だ。どこにでも自分を映して見るのが好きだ。鏡の裏の水銀箔のやうになつて全世界を裏附けてるんだね。」

「全くだね。」大尉はつづけた。「人間は自分以外の物はなんでもそんな風に扱ふんだね。自分の智惠でも愚かさでも、意志も氣紛れも動物や植物や元素や神々に貸しあたへるんだ。」

「どうか、ただ今の御興味からあまりお外らししたくはございませんから、」シャルロッテは答へた。「簡單で結構ですから、一體ここで親和力とはどういふ意味かお敎へ下さいませんか。」

「それは喜んでお敎へしませう。」シャルロッテに身を向けられた大尉が答へた。「勿論僕にできる程度で、十年ばかりも前に學んで讀んだままなんですがね。科學界でまださう考へてゐるか、新しい學說に合ふかは僕には言へませんが。」

「全く困つたものだね。」エドアルトは叫んだ。「僕らはもう一生のために學ぶといふことはできないんだね。僕らの祖先は小さいとき受けた授業に固執してたんだ。が、僕たちはいま五年毎くらゐには學びなほさなくてはいけないな。あまり流行に遲れないためにはね。」

「私たち女はそんなに嚴密には考へませんわ。」シャルロッテは言つた。「正直に言へば、私にはただ言葉の意味が問題なんですの。交際社會では聞き慣れぬ言葉や術語を間違つて使ふほど可笑しいことはございませんからね。ですから、私はただどんな意味にこの言葉がちやうどこんな對象には使はれてゐるのかを知りたいと思ひますわ。それが科學的にどんな關係にあるのかは學者におまかせいたしますわ。でも學者つてとにかく、私の氣づきましたところでも、なかなか一致しないものでせうね。」

「しかし、いちばん手つとり速く本題に入るにはどこから始めたらよからうね?」エドアルトがちよつと間をおいて大尉にたづねた。大尉は少し考へてゐたが、間もなくかう答へた。

「一見とほく溯つて話してよければ、すぐにも目的地に達するわけだがね。」
「よく氣を附けてうかがひますわ。」シャルロッテは自分の仕事を片づけながら言つた。
そこで大尉がはじめた。「僕たちの認めるあらゆる自然物に於て、僕たちはまづ、それが自分自身に對して一つの關係を持つてゐることに氣づく。もともと分りきつたことを言ふのは勿論變に聞えるだらうが、既知のことを完全に理解してはじめてお互に未知のものへ進むことができるのだ。」
「僕は思ふんだが、」と、エドアルトが口をはさんだ。「例を擧げたはうがお互に分り易くなるんぢやないかな。例へば、水と油と水銀を思ひ浮べさへすれば、その各部分に結合や聯關のあるのが分るだらう。この結合は暴力や他の規定によつてでなければなくならないんだ。が、さういふものを除いてしまふと、すぐまた結合してしまふ。」
「全くですわ。」シャルロッテが同意しながら言つた。「雨滴はすぐに流れになりますわ。子供のときすでに私たちは、水銀を小さな玉に分けたり、また一緒にあつめて流したりして驚いて遊ぶものですわね。」
「では序にちよつとある重大な點について言つてみていゝでせうね。」大尉が附加へた。「つまり、この完全に純粹な、液體狀態によつて可能な關係はつねに決定的に球形によつて現れるといふことなんです。落ちて來る水滴はまるい。水銀球はあなた御自身仰しやつたとほりです。

また、熔けて落ちる鉛は、完全に凝結する時間があれば、球形になつて下につくものです。」
「あなたの仰しやらうとなさることが當るかどうか、先を言つてみていゝでせうかしら。」シャルロッテが言つた。「すべてのものは自分自身にある關係を持つてゐるやうに、當然他のものに對してもある關係を持つてゐるものですわね。」
「それは物が異るにつれてまちまちだらう。」エドアルトが急いでつづけた。「あるときは友だちか古馴染みたいに出逢つて、すぐ歩み寄つて、酒と水とがまざるやうにお互に何の變化もうけずに結合する。が、之に反して、あるものはどこまでもお互に他人づき合ひをして、機械的な混合や摩擦によつてさへ結合しようとしない。例へば、油と水なぞは一緒に搖すぶつてもすぐまたたがひに分れてしまふ。」
「私たちの知合の人たちもその簡單な形式にあてはめて見て大してかはりはありませんわね。」シャルロッテが言つた。「しかし、とくにその場合、人が過去に於てその中で生きた社會團體といふものを思ひ出しますわ。でも、この無生物といちばん似てゐるのはお互に對立してゐる團體ですもの。階級とか職業とか、貴族と第三階級、軍人と市民といつたやうな。」
「だが、しかし、」とエドアルトは答へた。「道德や法律でそれが結合できるやうに、化學の世界にもまた反撥し合ふものを結合する仲介物があるんだよ。」
「つまり、油はアルカリで水と結合できるわけなんです。」と大尉が言葉をはさんだ。

「でも、あまりお話をお急ぎにならないで下さいな。」シャルロッテは言つた。「私もついて行けてることをみせてあげられますやうにね。ところが、もうここらで親和力の話に行き着いたのではございませんか？」

「その通りです。」大尉は答へた。「すぐにその全作用力と特性も分るやうになるでせう。出逢ふとすぐにつかみ合ひ互に規定し合ふやうな物を類縁と名づけるのです。互に對立してゐて、恐らくまさにそのために決定的に求めあひ捉へ合ひ、修正し合ひ、協力して一つの新しい物體を形づくるアルカリ類と酸類に於て、この類縁關係は非常に著しいものです。あらゆる酸類に對して大きな愛好といふか決定的な結合慾を示す石灰をちよつと考へてみて御覽なさい。僕たちの化學的蒐集品が着き次第にいろんな實驗を御覽に入れませう。非常に面白いもので、言葉や名前や術語よりもいゝ觀念をあたへるでせう。」

「打明けて言ひますと、」シャルロッテは言つた。「この不思議な物を類縁と仰しやると、私には血縁といふよりも、むしろ精神的な、靈的な類縁に思へますわ。ちやうどこんなにして人間のあひだでも本當に大きな友情といふものが生れるのかも知れません。反對の性質は一層親密な結合を可能にしますから。では、私はあなたがこの祕密にみちた作用についてどんなものをおみせになるか、ひとつお待ちいたしますわ。もうあなたの（かの女はエドアルトに言葉を向けた）朗讀の邪魔はいたしませんわ。これだけよく敎へていただいたのですから、氣を附けてあなた

の講義をお聞きしませう。」

「お前が僕たちをおびき出したからには、」と、エドアルトは答へた。「さう簡單には放されまいよ。實際こみ入つた場合がいちばん興味があるからね。そんな場合にはじめて遠近、强弱、親疎、多少さまざまの關係を持つ類縁の程度がわかるんだ。類縁は離縁を起すときはじめて興味があるんだ。」

「殘念なことに世間でこの頃頻りに耳にするあの悲しい言葉は自然科學にも出てまゐりますの？」シャルロッテは叫んだ。

「勿論だとも。」エドアルトは答へた。「化學者が分析術者と呼ばれたのは意味深い名譽の稱號でさへもあつたんだよ。」

「でも、いまはもうそんな言ひかたは致しませんわね。」シャルロッテは答へた。「ほんとにこれはいゝことですわ。結合がもつと大きな藝術であり、功績です。結合術者は世界中のすべての部門で歡迎されるでせう。——ところで、どつちみち乘りかけた船ですから、さういふ場合を少し敎へて下さいな。」

「では、早速、さつき例を擧げてお話したことにまたくつついて行きませう。」大尉は言つた。「例へば、石灰石といふものは氣體として知られてゐる弱い酸と密に結合した多少とも純粹な石灰土のことです。この石の一片を薄めた硫酸の中に入れると、硫酸は石灰を捕へて、石膏と

なつてあらはれます。之に反して、弱い氣體の酸は逃亡するのです。ここに分離と新しい化合が生じたのです。いまや、一つの關係が他よりも好まれ撰ばれたかのやうな外觀を實際に呈してゐるのですから、親和力といふ言葉をも使用して差支ないわけです。」

「私が自然研究家をお許しするやうに、私の言葉もお許し下さい。」シャルロッテは言つた。「でも、私にはこの場合どうしても選擇といふものでなく、むしろ自然の必然性を見るやうに思へますの。それさへも殆んどないくらゐです。結局、まつたく機會の問題にすぎないのでせうから。機會が泥棒をつくるやうに、こんな關係もつくるのです。あなたの仰しやる自然物のお話の場合は、選擇はそれらの物を集める化學者の手にあるにすぎないやうに思へます。が、いちどあつまつてしまへば、あとは神樣のお惠みを乞ふほかありません。いまの場合では、再び無限の世界をさまよはねばならぬ哀れな氣體の酸が私は氣の毒なだけです。」

「水と結合して鑛泉となり、健康者や病人の保養に役立つのは全くその酸によることなんですよ。」大尉は答へた。

「石膏のことはどうにでも言へますわ。」シャルロッテは言つた。「もう出來上つて物體となり、心配ないんですもの。それに比べて、追出された物はまた下つて來るまでいろんな難儀に出遭ふかも知れませんわ。」

「僕は大へん間違つてゐるかも知れないが、」と、エドアルトは微笑みながら言つた。「お前の

言葉の裏にはなにか小さな惡意が潛んでゐるやうだね。お前の意地惡を白狀しておしまひよ。つまり僕はお前の眼には、硫酸としての大尉に捉へられてお前との氣持のいゝ交際から引きはなされ、熔解しにくい石膏に變つた石灰なんだね。」

「もし良心があなたにそんな觀察をさせるのだとすれば、」とシャルロッテは答へた。「私は心配ございませんわ。こんな喩へ話は好ましく興味あることで、又類似したものを弄ぶのが嫌ひな人はございますまい。が、人間はそんな要素より數段上にゐるものです。選擇とか親和力とかいふ美しい言葉をここで少し氣前よく使つたのだとすれば、また自分にかへつてさういふ言葉の價値をこの機會によく考へてみるのはいゝことです。私はしかし殘念なことに、親密な解けがたく思はれる二人の結合がたまたま第三者が仲間入りをしたためにだめになつてしまひ、はじめはとても美しく結びついた一人があてもなく遠くへ追ひやられた例を澤山に存じて居りますの。」

「化學者はそこへ行くと、もつととても粹なものだよ。」エドアルトは言つた。「誰も空しく出て行かないやうに、第四番目の者を仲間に加へるんだからね。」

「さうだ！」大尉は答へた。「かういふ場合は確かにもつとも重大な注意すべきものだ。その場合、牽引や類緣や、この放棄や結合を言はゞ十字形に實際に描いてみせることができるし、それまで二つづつ結合してゐた四つのものが接觸しあつて從來の結合を棄てて新しい結合をす

るのだ。この放棄と捕捉、逃亡と探索にはより高い攝理が實際にあるやうに思へる。人はかういふ物に一種の意慾と選擇があるやうに信じ、親和力といふ術語を完全に正しいものに思ふ。」

「さういふ場合を話してきかせてくれませんか。」シャルロッテは言つた。

「かういふことは言葉で片附けてはいけません。」大尉は答へた。「さつき申しましたやうに、實驗そのものをお見せできれば、すぐみんな明瞭に氣持よくなるでせう。いまのところ、あなたには何の概念もあたへない恐いみたいな術語で釣つておかねばならないでせう。これらの死物のやうでゐながら內部にはつねに活動の用意ある物が眼前に作用するのを見、又それらが互に求め合ひ、牽引し合ひ、摑み合ひ、毀し合ひ、呑み込み、吸ひ込み合ひ、そしてこの上なく密接な結合から再び改新された、新しい思ひがけない姿となつて現れるのを共感を以てながめねばなりません。そのとき、はじめて人はこれらの物に永遠の生命を、否、全く感覺や理性の存在をも信ずるに到るのです。我々の感覺がそれらを正しく觀察するに十分なものとは殆んど思はれませんし、理性もまたとてもそれを把握するに十分ではなささうですから。」

「感覺的な直感によらずに概念でこれらの物に親しんでゐる人には珍らしい術語は煩はしく滑稽でさへあるにちがひないことは、僕も否定しない。」と、エドアルトが言つた。「が、差當り文字で、ここで問題になつた關係を表はすことは譯ないだらう。」

「衒學的(ペダンチック)に見えるとお思ひにならねば、」大尉は答へた。「記號で簡單に約言することができ

るでせう。例へば、Bと密接に結合してゐて澤山の手段やいろんな暴力などで分離されることのないAを考へてごらんなさい。又Dと同樣の關係にあるCを考へてごらんなさい。さて、その二組を接觸させてみますと、AはDに、CはBに投じて、どちらが先に去つて他のものと再び結合したか言へなくなるでせう。」

「さあ、そこで、」とエドアルトが口をはさんだ。「僕たちがこのすべてを眼で見るまでは、この公式を直接の役に立つ教訓を引き出す喩へ話に見做さうではないか。シャルロッテ、お前がAの役割だ。僕がお前のBだ。もともと僕はただお前次第だし、AへのBのやうにお前に從つてゐるんだから。Cはこんど僕をお前から少し遠ざからせた大尉であることは全く明瞭なことだ。ところで、お前がさだめない世界へ消え失せてはいけないとすれば、當然お前にDが世話されねばならない。勿論それはあの可愛いゝオティリエだ。あの娘の近づくのをお前はもう防いではいけないよ。」

「ようございます。」シャルロッテは答へた。「この例は私たちの場合にすつかり當てはまるやうには思へませんけれど、今日私たちが完全に一致し、この自然の類緣と親和力が私たちのあひだに打明けた相談をすすめてくれたのはほんとに幸福だと思ひますわ。では、私もちよつと告白をしませう。この午後から私はオティリエを呼ばうと決心してましたの。これまでの忠實な女中頭の家政婦が結婚のため暇をとるはずですから。これはもつとも私の側からの、私のた

めの考へでせうが、オティリエのためにはどうすればよいか、それをひとつあなたに讀んで聞かしていただかうと思ひます。私は手紙を覗き込んだりはしませんけれど、内容はもう勿論私は知つてゐます。どうぞ、ちよつと讀んでみて下さい。」かう言つて、彼女は一通の手紙を引き出して、エドアルトに渡した。

第五章

塾長の手紙

奥様、本日は極く簡單なお手紙を差上げることをお許し下さいませ。昨年私共が生徒に敎へましたことについての公の試驗が濟んで、御兩親様や監督者達全部に宛てて經過を御報告致さねばならないからです。また、言葉少なに多くのことが言へますから、簡單にでもよいかと思ふのでございます。お孃様はあらゆる意味で首席たることを御證明になりました。同封の成績證明書や、又お貰ひになつた賞品についてお述べになつたり同時にこのやうな幸福な成功に對してお抱きになつた御滿足をお書きになつてゐるお孃様自身のお手紙が奥様を御安心否お喜び申上げさせることかと存じます。私の喜びはしかし、このやうに進歩した御婦人をお引戻しする理由ももはやとてもないことかと豫想し、幾分減じられるやうな次第です。では、これで失禮致します。お孃様にとつて最も有利と思はれますことについての私の考へを後便に御披瀝申上げることをお許し下さいませ。オティリエ様については私の親切な助手がお書きすることと存じます。

助手の手紙

オティリエ様については、尊敬すべき塾長の命によつて私がお手紙差上げることに致します。と申しますのは、御報告申上ぐべきことをお告げするのが塾長の考へ方によれば苦しいらしいことと、又、塾長自身お詫びをせねばならぬことがあつて、それを寧ろ私の口から申上げさせたいと思つてゐられるからなのでございます。

私は善良なオティリエ様が自分の内部にあるものや可能なものを表出することが大へん出來にくい方だといふことをあまりにもよく存じて居りますので、公の試驗の前では少し不安でございました。その際大抵準備が不可能であつて、又いつもの方法で行はれるにしましてもオティリエ様は證書を目指して準備などしようとなさらないだらうと思つて、益〻不安を覺えてゐました。結果は私の心配をあまりにも肯定しただけでした。あの方は賞もお貰ひにならず、また證書も受けなかつた仲間の一人でゐられます。何を多く申しませう。習字では他の生徒達であの方ほどに形のよい字の書けるものは殆んどなかつたのに、遙かに自由な筆勢を持つてゐました。計算ではみんなあの方より早く、あの方が他の生徒より上手にお解きになる難問題は試驗に出ませんでした。フランス語では會話や解釋であの方に秀れたものが少くありませんでした。歷史では名前や年數が

あの方にはすぐ思ひ出せませんでした。地理では政治的區分に注意をお忘れになりました。わづかの控目な旋律（メロディ）の演奏には拍子も落着きもございませんでした。圖畫では確かに賞をおもらひになれたでせうが、輪廓は綺麗で仕上げも大へん丹念で才氣に富んでゐましたのに、殘念ながらあまり大きなものをお企てになつたので出來上ることができませんでした。

生徒たちが退場して、試驗官達が一緒に相談し、私共教師にも少くとも二三の發言を許されたとき、私はすぐ、オティリエ様については一言も言はれず、言はれたにしても非認でなければ無關心に話されることに氣づきました。私はオティリエ様の性質をぶちまけて述べてみて、いくらかでも好意を惹き起したいと思ひ、二重の熱意を以てそれを敢てしました。ひとつには、自分の確信に從つて話すことができましたためと、又、若い頃私も丁度同じやうな悲しい場合に落ちたことがあつたからです。私の言ふことは注意して聽いてもらひましたが、私が話し終へたとき、首席の試驗官が親切にではあるが簡潔にかう申されました。能力が假定されてゐるが、それは技能にまでならねばならない。これがあらゆる教育の目的であり、兩親や監督者の全く明白な意圖であり、又、子供たち自身の半ば意識されたに過ぎないものであるが、口に出さない意圖である。これがまた試驗の對象であり、その際教師と生徒は同時に批判されるわけである。あなたからお

聞きしたことで、我々もその子供さんによい希望を抱くのであるが、女生徒たちの能力に仔細に注意を拂はれた點であなたは確かに賞讃に價する。この一年でその能力を技能にまで變へられたなら、あなたにも又その好意を寄せられた女生徒にも賞讃に缺くことはないでせう、と。

この結果として來たものは私はすでにあきらめてゐました。が、すぐこれに次いで起つた一層惡いことについては心配もしてゐませんでした。よい羊飼のやうに小羊たちの一匹でも失つたり、この場合のやうに無裝飾でゐるのを見るのを好まれない私共の塾長は、試驗官たちが退場したあとで、その不機嫌を隱すことができず、他の生徒たちは賞品をよろこんでゐるのに全く靜かに窓邊に立つてゐたオティリエ樣にかう言はれました。

「まあ一體どうして馬鹿でもないのにあんなに馬鹿みたいに見えることができるんでせうね。」オティリエ樣は全く平氣で答へられました。「御免遊ばせ。今日はまた丁度頭が痛くて、可成りひどいものですから。」「誰にもそんなことが分りませんよ。」いつもあんなに同情深い方がさう答へて、不愉快さうに外つぽを向かれました。

ところで、これは本當なのです。誰にも分らないのです。といふのは、オティリエ樣は顏色もおかへにならず、私もついぞあの方が顏顴に手をおあてになつたのを見たことがありませんから。

が、これで全部ではありませんでした。奧樣、いつも活潑であけすけなお孃樣が今日の勝利感ですつかり羽目をはづして尊大になつてゐられました。お孃樣は賞品や證書をもつて部屋を跳び廻つてゐられましたが、オティリエ樣の顏の前でもそれを振つてお見せになりました。「けふのあなたつたら駄目なのね。」さうお叫びになりました。全く平然としてオティリエ樣はお答へになりました。「まだ最後の試驗日ではございませんわ。」「でも、いつも、殿になるんでせう?」お孃樣はさう叫んでとんで行かれました。

オティリエ樣は他の者には皆平氣さうに見えられましたが、私にだけはさうでありませんでした。あの方が刃向はれる心中の不快なはげしい激動は顏色の不同によつてあらはれます。左の頰が瞬間赤くなり、右の頰が青くなるのです。私はこの兆を見て同情を抑へることができませんでした。私は塾長を傍に連れて行つて、まじめにこのことを話し合ひました。優秀な婦人は自分の過ちをお認めになり、私共はしばらく相談し合ひました。それ故冗長に渉らずに、私共の結論とお願ひを奧樣にお申出したいと思ひます。オティリエ樣を暫くお引きとり下さいませ。その理由は奧樣御自身が最もよくおわかりになるでせう。さう御決定下されば、あの善いお子さんのお取扱ひについて更に申上げます。推測されます通りに、御令孃樣が私共の許をお去りになれば、私共はまた喜んでオティリエ樣のお歸りをお待ちうけ致します。

あとで恐らく忘れるかも知れませんから尙一言附加へておきます。といふのは、私はオティリエ様がなにかを要求したり又切に歎願したりなさるのを見たことはございません。之に反して、稀にではありますが、要求されるものをお拒みになる場合がございます。あの方はそれを、その意味の解つたものには不可抗的なある身振りでなさるのです。あの方は高く差上げた兩の掌を合せて、それを、ほんの少し前屈みになり、強いて要求する者を要求や希望をすつかりあきらめたくなるやうな眼差で御覽になりながら、胸の方へ持つて行かれます。この身振りを御覽になることでもあれば、奥様、奥様のお躾の場合はそんなことはありもしますまいけれど、この私の言葉を思ひ出して下さつてオティリエ様をおいたはり下さいませ——

エドアルトは途中微笑んだり頭を振つたりしないではなかつたが、この手紙を朗讀し終へた。また人物や事件の狀態についての批評もないではなかつた。

「もういゝ。」エドアルトはついに叫んだ。「これできまつた。あの娘はやつて來る。ねえ、お前のためにもいゝだらう。僕たちはまた僕たちの提案を進めることができる。僕が右翼の大尉の許に移ることが最も必要となる。晩も朝もやつと一緒に働くに都合よくなる。お前は一方お前とオティリエのためにお前の側にいちばん美しい部屋をとるがいゝ。」

シャルロッテは滿足した。エドアルトはこれからの暮しかたを語つた。なかにも、かれは叫んだ。「左側に少し頭痛がするなんて、しかし姪もばかに愛想がいゝんだね。僕はときどき右側にする。同時にそれが起つて、向き合つて坐つてゐて、僕が右肘をあの娘が左肘をついて頭をちがつた側の手にのせてゐたら、一組の可愛いゝ對畫ができるわけだね。」

大尉はそれを危險だとみようとした。エドアルトはしかし叫んだ。「ねえ君、君はDに注意すればいゝよ。もしCを奪はれたらBはどうすればいゝんだ。」

「でも、それは、」シャルロッテは答へた。「わかりきつてゐるやうに思へますわ。」

「勿論だとも。」エドアルトは叫んだ。「自分のAにかへるだらう。自分のAにね。」さう言つて、かれはとび上つてシャルロッテをしつかりと胸におしつけながら、「おゝ！」と叫んだ。

第六章

オティリエを連れて來た馬車が乘りつけた。シャルロッテはかの女を迎へに行つた。この可愛い〻娘は急いで近寄つて來て、かの女の足もとに身を投げ、その膝を抱いた。

「どうしてそんなに卑屈なことをするの？」シャルロッテは言つた。そして、少し當惑して、かの女を立上らせようとした。「卑屈なつもりではございませんわ。」オティリエはもとのままの姿勢で答へた。「私はただ、私がまだあなたの膝までしかないときにもう可愛がつていただいてゐることをちやんと知つてた頃を思ひ出したいんですの。」

かの女は立上つた。シャルロッテはこころからかの女を抱いた。かの女は男たちに紹介され、すぐ特別の敬意を以て客としてあつかはれた。美は到る所で全く歡迎される客である。かの女は會話に加はりはしなかつたのに、それに注意してるやうに見えた。

翌朝エドアルトはシャルロッテに言つた。「氣持のい〻話好きの娘さんだね。[6]」と。

「話好きですつて？」シャルロッテは微笑みながら答へた。「まだあのひと口を開いたことはございませんのに。」

「さうかな？」エドアルトは思ひ出さうとするやうにしながら答へた。「しかし、不思議だ

ね。」

シャルロッテは新來者に家事の扱ひかたについてほとんど暗示らしいものもあたへなかつた。が、オティリエは全體の秩序をすばやく洞察し、否、さらに感得した。かの女はみんなについて、又個々の人について特に世話すべきことを容易に了解した。すべては正確に行はれた。かの女は命じるやうにみえずに指圖することを心得てゐた。又、誰かが愚圖ついてゐると、すぐ自分でその仕事をした。

暇の時間がどれくらゐ殘されてゐるかが分るや否や、かの女はシャルロッテにその時間を分けて與れるやうに賴み、これは嚴密に守られた。かの女は提供された仕事を、助手にシャルロッテが教へられてゐたとほりの仕方でやつた。かの女はなすままに放任され、ただ時々シャルロッテが勵ましさうと試みた。かの女は時々もつと自由な筆勢に導くために書き耗らした鵞ペンをあてがつた。が、これもすぐまた鋭く削られた。

婦人たちはお互に二人きりのときはフランス語で話すやうに固く約束した。外國語の練習を義務にすると、その方がオティリエがよく喋るのでシャルロッテは益〻それに固執した。この場合オティリエは屢〻言ひたいと思へる以上に澤山喋つた。とくにシャルロッテは、私塾全體についての偶然の、綿密ではあるが愛情の籠つた話を喜んだ。オティリエはかの女にとつて可愛い話相手になつた。そして、いつかは信賴できる友だちになることを望んだのである。

シャルロッテはその間にオティリエに關する古くなつた手紙をまた取出して、塾長や助手がこの善良な子供について判斷したことを思ひ出し、それをかの女の人となりと自分で比べてみようとした。シャルロッテは自分が一緒に暮さねばならない人の性格を知つて、その人に期待される形成され、又是非認め許してやらねばならぬことを知らうとするに早すぎることはないといふ考へであつた。

かの女はこの詮索でなにも新しいことは發見しなかつたが、いろんな既知のことが一層大きく目立つて來た。例へば飲食に於けるオティリエの節制が本當に心配になつてきた。

次に婦人たちが意を用ひたのは衣服のことであつた。シャルロッテはオティリエにもつと豐かな選り抜きの着物をきるやうにのぞんだ。この善良な活動的な娘は以前贈られた布地をすぐ自分で裁斷して、少ししかひと手を借らずに素早く極めて優雅に身に合せることができた。新しい流行の衣裳はかの女の容姿を高めた。人の好ましさといふものは着物の上にもひろがるものだから、その特性を新しい衣服に傳へることにつねに新しく優美になるやうに思はれるのである。

かうして、かの女は初めと同樣益々、正しい名前で言へば、男たちの眞の眼の慰安になつた。綠玉はその素晴らしい色彩によつて視覺に快感をあたへ、否さらにこの氣高い感官にある治癒力をさへ及ぼすものであるが、人の美しさはそれよりはるかに大きな力で內外の感官に作用す

るものである。美を見る人には禍は吹きつけることは出來ない。かれは自分自身並びに世界との融合を感じるのである。

だから、オティリエの到來によつてこの仲間はいろいろに得るところがあつた。二人の友は集る時間を、否、分秒をさへもとより規則正しく守つた。かれらは食事にもお茶にも散步にも正當以上に待たせることはなかつた。とくに夕方は食卓からあまり早く急いで去ることがなくなつた。シャルロッテは十分このことに氣づき、二人を觀察しないではおかなかつた。かの女はどちらが動機になつてゐるか探らうとしたが、區別をつけることができなかつた。二人は概して交際好きになつた。會話に於ても、オティリエの興味を惹きさうなもの、かの女の見解やその他の知識にそふやうなものを考へるやうにみえた。讀書や物語をする場合も、オティリエが戻つて來るまで停止した。かれらはもとより溫和しく又全體として話好きになつた。

これに應へてオティリエの精勤ぶりは日毎にまして行つた。家や人たちや事情を分るやうになるほど活潑に手を出し、あらゆる眼差も動作も半言でも一聲でもすぐに理解するやうになつた。かの女の落着いた注意深さは平靜な敏活さと同樣いつも變らなかつた。かうして、坐つたり立つたり、行つたり來たり、取りに行つたり持つて來たり、また坐つたりするかの女は少しも不安なところがなく永遠の變化であり、永遠の好ましい動きであつた。それに、皆かの女の步くのを聞いたことがないくらゐであつた。それほど靜かにかの女は入つて來た。

このオティリエの瀟やかなまめやかさはシャルロッテを大へん喜ばした。ただ一つあまり適當と思へないことを、かの女はオティリエに隱さなかつた。ある日、かの女は言つた。「ひとが手から物を落したとき、すぐ屈んで急いで拾ひ上げようとするのは感心な注意深さで、言はばその人にお仕へする義務を負うてゐることを告白することになるわけですが、ただ人中ではそんなに身を低くするには相手如何を考へねばなりません。婦人に對する場合はべつに規則を定めてあげようとは思ひません。あなたは若いんだから、長上や年長の方にはそれが義務ですし、同輩に對しては鄭重さとなり、若い目下の者には人間的で親切なことを示すわけになります。ただ、男のかたに女がこんな風に恭しくまめまめしくしてみせるのはあまりふさはしいことではなからうと思ひますよ。」

「こんな習慣はやめにしようと思ひますわ。」オティリエは答へた。「ですけど、どうしてさうなつたかをお話ししましたら、この不作法もお許しになるだらうと思ひます。私たちは歴史を教はりましたが、私は當然覺えねばならぬだけも覺えませんでした。何の役に立つか分りませんでしたもの。ただ一つ一つの事件は大へん印象が殘つてゐます。例へばこんな話がさうですの。

イギリスのカアル一世が所謂審判官の前にお立ちになつたとき、お持ちになつてた杖の金製の頭が落ちたんですつて。そんなとき、みんなが自分のために骨折つて呉れるのに馴れていら

つしやるので、王様は周圍を見まはし、誰かこんどもこの小さな勤めをして呉れるものとお待ちになるふうでした。が、誰も動かないので、王様は御自分でお屈みになり、この頭をお拾ひ上げになりました。私にはこれが大へん痛ましく思へましたので、正しいかどうかは分りませんが、このときから人が手から物を落すと身を屈めずにはをれないのです。が、勿論いつもふさはしいことではございませんし、それに、」かの女は微笑みながらつづけた。「その度毎にこの私の物語をするわけにはまゐりませんから、これからはもつと控目にいたしますわ。」

一方、二人の友だちが使命と感じてやつてゐた優良な施設は間斷なくすすんでゐた。否、日毎にかれらは考へたり企てたりする新しい動機を見出した。

ある日、かれらが一緒に村を通つたとき、秩序と清潔の點で、土地が高價なため住民がそのどちらにも注意を拂つてゐる村々にくらべてはるかに劣つてゐるのに氣づいて不快になつた。

「君は憶えてゐるね。」大尉は言つた。「僕たちは瑞西旅行で、こんな風に横たはつてゐる村を整理し、瑞西風な建築樣式にでなく、大に利用を促進する瑞西風な秩序と清潔さに導いて、田舍風な所謂遊園を本當に美化したいといふ希望をのべたことがあるね。」

「例へば此處でもそれはきつとやれるだらうぜ。」エドアルトは答へた。「舘(やかた)の山は突出た角をなして下に降つてゐる。村はかなり規則的に半圓をなしてそれに向ひ合つてゐる。その間を

小川が流れてゐる。その増水を防ぐに石でする者もあり桟でする者もあり、また梁でするかと思ふと隣りの奴は厚板でする。さうして他の者の仕事を助けるといふより自分にも他人にも損や不利をあたへてゐる。道もまた下手なコースで登つたり下つたり、水の中を行つたり石の上を越したりしてゐる。みんなが手傳へば、ここに半圓の石垣を築き、その後に道を家の側まで上げ、極めて美しい土地をつくつて清潔にし、大規模な施設で小さな不十分な心配を一掃してしまふに大した補助金も要らないだらうがね。」

「ひとつやつてみようぢやないか。」大尉はさつと地勢を見渡して、すぐ判斷しながら言つた。

「僕は町人や百姓共とは交渉を持ちたくないんだがね。もし、すぐにでも命令できるんでなければや。」エドアルトは答へた。

「君の言ふのも無理はないよ。」大尉は答へた。「僕もさういふ仕事でこれまでにもう大分厭な思ひをした。利得と犠牲にせねばならぬことを十分秤にかけるのは難しいものだ。目的を求めて手段を輕蔑しないことも困難だ。多くのものは手段と目的を全く混同して、後者を眼中におかずに前者を喜んだりする。すべての害悪は現れると即座に治癒せねばならぬとして、その依つて來る本來の源泉である地點は氣にかけようとしない。だから、特に、今日のことは十分わかつても明日から先のことは滅多に見ようとしない群衆と相談するのは實に困難なことだ。一人が共同の施設で利を占め、他の者が損をするといふ場合になると、全然融和ができない。

本來共同的な善事はすべて無制限の主權によつてぐんぐん進めねばならないのだ。」

かれらが立つて話してゐるとき、貧しいといふより厚顏にみえる一人の人間が物を乞うた。エドアルトは、話の邪魔をされ落着きを奪はれて不快になつて、二三度平靜にことわつたが無駄だつたので叱りつけてやつた。が、其奴がぶつぶつ言ひながら、否、罵り返しながら、小刻みに遠ざかり、乞食もまた他の人々と同樣神樣と政府の保護の下にあるんだから施物をことわることはできても侮辱することは許されないといふ權利を得意げに主張したとき、エドアルトはすつかり平靜を失つてしまつた。

大尉はかれを宥めようとして言つた。「この事件を地方警察をここまで伸長する勸告ととらうぢやないか。施しはじなくちやならないさ。しかし、自分ではしないのがいゝ。殊に家ではね。家では何事でも慈善に於ても適度で又一律であらねばならぬ。あまり澤山の施與は乞食を追ひ拂ふかはりに誘き寄せてしまふ。が、これとちがつて、旅では通りすがりに路傍の貧乏人に偶然の幸福の神のやうに現れてびつくりするやうな施物を投げてやつてもいゝさ。この村や館の地勢ではそんな施設が大へんつくり易いよ。僕はもう以前からそのことを考へてたんだ。

村の一端には宿屋があり、他端には善良な一組の老夫婦が住んでゐる。兩方に小額の金を預けて置くんだ。村に入つて來るものでなく出て行く者がいくらか貰ふことにするんだ。すると、二つとも館へ行く道にあるから、上へ登らうとする奴はみなこの兩方の場所に行かされるわけ

だ。」

「來たまへ。」エドアルトは言つた。「すぐ片附けてしまはふ。詳しいことはあとでいつでもやれるさ。」

かれらは宿屋の主人と老夫婦の許へ行き、事を濟した。

「僕はよく知つてゐる。」エドアルトは一緒に館への道を再び上りながら言つた。「この世のことはすべて賢明な思ひつきと確固たる決心如何にかかはつてるんだ。そんな風に君は妻の遊園を非常に正しく批判して、一層よいものへの暗示を僕にもあたへて呉れた。それを僕は、言はなかつたなどといふ氣は全然ないんだが、すぐ妻にも傳へたのだ。」

「それは豫想はできたが、」と大尉は答へた。「いゝとは思はなかつたね。君は奥さんを迷はせたよ。奥さんはすつかり放つたからして、そいつのことだけは僕らに拗てゐられる。なぜつて、その話をするのを避けてゐられるし、オティリエさんとは合間にそこへお登りになるにしても、僕たちを二度と苔の小屋へお招きにはならないんだからね。」

「そんなこと恐がるにや及ばないさ。」エドアルトは答へた。「僕は可能であり又當然なすべき何かよいことを信じると、それをしてしまふまでは落ちつけないんだ。僕らはしかし事の緒をつけるのはいつもうまい。晩の話に銅版畫入りの英國の公園記を持ち出さうぢやないか。そのあとで君の莊園の圖にするんだ。まづ、あいまいに冗談みたいに扱はなくちやならん。眞面

目な話にはすぐなつて行くさ。」

この申合せのあとで、いくつかの本が開かれた。それには地方の輪廓や風景が最初の手入れしない自然の狀態のままでその都度素描されてをり、他のページには現在の美點を利用し向上させるために藝術が企てた變化が描き出されてゐた。これを自分の所有地や周圍やそれらをもととして造り上げることの出來さうなものへ移して行くことは極めて容易であつた。

大尉の起草した地圖をもとにすることは、いまや愉快な仕事であつた。ただ、シャルロッテが始めた最初の考へから大して離れることはできなかつた。が、頂上へのまへより樂な道が案出された。上の傾斜の一本の好ましい小さな樹の前に亭を建てたいと思つた。これは館ともある關係を持ち、館の窓からそれを見渡せ、又そこから館と庭を見やることができるやうにする筈であつた。

大尉はすべてをよく考へ、測量し、あの森の道と小川の側の石垣と埋立てとを再び話題に持出した。かれは言つた。「頂上への樂な道をつくれば、あの石垣に丁度必要なだけの石を得ることができる。たがひに組合はして仕事をやれば、兩方とも安くて早く出來るんだ。」

「でも、それからが私の心配ですわ。」シャルロッテは言つた。「是非一定の金額をきめておかねばなりませんわ。その設計にどれだけ要るかがわかると、週にでなければ月に分けるんです。會計は私が決定します。私が傳票を拂ひ、計算も自分で致します。」

「お前は僕らをあまり信用しないやうだね。」エドアルトは言つた。

「氣紛れな事には大してね。」シャルロッテは答へた。「氣紛れなら私たちのはうが制御するすべを心得てゐます。」

準備が爲され、仕事は迅速に始められた。大尉はいつもその場にゐて、シャルロッテはいまや殆んど毎日大尉の眞面目で明確な精神の目擊者であつた。かれもまたかの女を一層よく知るやうになり、二人は一緒に仕事をし、ことを成就するのが容易になつた。

仕事も舞踏と同樣である。歩調のおなじ者同士は不可缺な存在となる。交互の好意は必然的にここから生れる。シャルロッテが大尉をよく知るやうになつて以來實際に好意を抱いた確實な證據には、最初の設計でかの女が特に選んで飾りたててゐたが大尉の計畫には合はなくなつた美しい休息場所を全く平氣で毀たせ、少しの不快な感情も持たなかつたことである。

第七章

シャルロッテが大尉と共同の仕事を見出したため、エドアルトはオティリエとつき合ふことが多くなつた。さうでなくても、かれの心の中では暫く前から祕かな好情がかの女に物を言ひ掛けてゐた。かの女は誰にでもよく仕へ愛想がよかつたが、かれの自惚には自分には最もさうであるやうに見えがちであつた。いまや、疑問はなかつた。どんな食事を、どれほどにかれが好きであるかを、かの女はもうくはしく知つてゐた。又、お茶には砂糖をどれくらゐ入れる習慣だか、そんな風ないろんなことをかの女は見逃さなかつた。とくに、かの女は隙間風を防ぐやうに注意した。かれはそれに對しては過度に敏感で、そのため風がいくらあつても足りない妻とよくぶつつかつたものであつた。同樣にかの女は果樹園や花園に通曉した。かれが望むものを叶へてやるやうにし、かれが我慢できないものを避けるやうにしたので、間もなくかの女はかれにとつて親切な守護神のやうになくてはならぬものとなつた。かれはかの女がゐないと苦痛を覺えるやうになりだした。その上、かれらは二人きりで逢ふと、話好きにあけすけになるやうに見えた。

エドアルトは年をとつても相變らずどこか子供つぽいところがあり、それが若いオティリエ

にはとくに氣に入つた。かれらは二人がお互に出會つた昔のことを思ひ出すのが好きであつた。この思ひ出はエドアルトのシャルロッテへの最初の愛着のころまで溯つた。オティリエは二人をまだ宮廷の最も美しい一對として思ひ出さうとした。そして、エドアルトが、全く小さい頃にそんな記憶がある筈がないと言ふと、かの女はそれでもとくに、ある時かれが入つて來たとき恐怖からでなく子供つぽい驚きからシャルロッテの膝のなかに隱れたときのことをまだすつかりありありと思ひ出すと主張した。かの女はそれがかれがひどく激しい印象をあたへ、大へんかの女の氣に入つてゐたためであることを附加へることが出來たのだつたが。

かういふ事情で、二人の友だちが以前に一緒に企ててゐたいろんな仕事が幾分停滯したために、かれらはも一度概觀圖を作つたり二三の覺書を起草したり手紙を書いたりしなければならなかつた。で、二人は事務室に行つてみたが、年寄の筆耕がひまでゐることが分つた。かれらは仕事に取りかかり、老人にはすぐ仕事をあたへたが、いつもは自分でする習慣のものをいろいろやらせたのには氣づかなかつた。大尉には最初の覺書が、エドアルトには最初の手紙がすぐにはでき上らうとしないのだつた。かれらは暫く起草や書直しで苦しんでゐたが、ついに、少しも仕事の捗らなかつたエドアルトが時間を訊いた。

そのとき、大尉が測時器（クロノメーター）ではかつた精巧なその秒時計をこの數年來初めて卷くのを忘れてゐたことがわかつた。かれらは、自分たちが時間に無關心になりはじめたのを感じないまでも、

豫感するやうに見えた。

男たちが幾分仕事を怠けてゐた一方、女たちの活動はむしろ增加した。概して、家庭の普通の生活樣式は一定の人物と必然的な狀況から生じるものであるが、また異常な愛情や生成する情熱をも桶の中へのやうにうけ容れるものである。そして、この新しい成分が著しい醱酵を起して、泡立ちながら緣から溢れ出るまでには可成りの時間が經過するものである。

この友人たちの間では發生する相互の愛情は極めて快い作用を及ぼした。情意はひらけ合ひ、一般的な好意が特殊の好意から生れた。各自が幸福と感じ、他人にその幸福を許した。

かういふ狀態は心を擴げることによつて精神を高揚するものである。人の爲し企てることはすべて無限への方向をとる。かうして、この友人たちもまた、もはや家の中にとらはれてばかりはゐなかつた。かれらの散步道はとほくへのび、そのときエドアルトとオティリエが小徑をえらび道を拓くために前へ急ぐと、大尉とシャルロッテは、いろんな新しく見出した場所や思ひがけない眺望に興じながら、意味深さうに話をして靜かに性急な先行者のあとを追つた。

ある日、散步道は右翼の館の門を通つて下の宿屋の方へ導いた。橋を越えて沼に出ると、かれらはそれに沿うて、普段、水について行けるだけを步いた。すると、岸は藪になつた丘とその先を岩にとぢ込められてゐて、步けなくなつてゐた。

が、獵のとき步き廻つてこの地方をよく知つてゐたエドアルトはオティリエとともに小さな

生ひ茂つた徑を、とほくない所に古い岩の間に隱れた水車小屋があるのをよく知つて押進んだ。が、ほとんど人の歩かない徑は間もなく失くなつてしまひ、かれらは苔むした岩の間の密生した藪に迷ひ込んだ。が、それもながくはなかつた。水車の響きがすぐに探してゐた場所の近いことを知らせた。

斷崖の上を進み出て、かれらは古い黑い奇妙な木造の建物が谷底に、嶮しい岩や高い樹々に蔽はれてゐるのを見つけた。かれらは簡單に苔と岩の破片を越えて下りることを決心した。エドアルトが先に立つた。そしてうへを見上げて、オティリエが輕やかに歩きながら恐怖も不安もなくこの上なく美しい均衡をとつて石から石へついて來ると、かれは自分のうへを天上の姿が漂ふやうな氣がするのだつた。かの女がときどき不安な場所でかれの差しのべた手をつかんだり、そればかりかかれの肩に身を支へたりすると、かれはかの女がいままで身にふれた最もやはらかい女性であることを否むことはできなかつた。腕に捉へて心臟におしあてることが出來るやうにかの女が顫くか滑ればよいと思ふばかりであつた。が、かれは決してそんなことはしなかつたであらう。かの女を侮辱し傷つけることを恐れる、といふ一つの理由以上の理由から。

これがどんな意味であつたかはすぐわかる。下に着いて、高い樹の下で田舍風な卓子に向ひ合つて坐り、親切な水車小屋のお神さんをミルクをとりに、歡迎してくれる亭主をシャルロッテと大尉を迎へに出したとき、エドアルトは少しためらつたあとでかう話し始めた。

「オティリエさん、僕にお願ひが一つあるんだが。お斷りになるにしてもお許し下さい。あなたは祕密にもなさらないし、その必要もないんだが、着物の下に胸に細畫をかけていらつしやる。それはあなたがほとんど御存じないが、あらゆる意味であなたの心に位置を占めるに價する御立派な方であつたお父さんの御肖像なのですね。ですが、お許し下さいよ、その繪は法外に大きいやうですね。この金屬とガラスが、あなたが子供を高く差上げたり、眼の前に物を運んだり、馬車が搖れたり、たつたいま岩を降りて來たやうに藪を分けて進んだりするとき、僕に非常な不安を抱かせるのです。なにか思ひがけない衝突とか墜落とか接觸があなたをそこなひ傷つけはしないかと思ふと恐ろしいくらゐです。僕のためにこの繪をのけて下さい。思ひ出からや部屋からではありません。いや、お住居のいちばん美しい神聖な場所をそれにおあたへなさい。ただ、胸からはのけて下さい。それが近くにあると、たぶん過度な心配性からでせうが僕には大へん危險にみえるんですから。」

オティリエはだまつて、かれが話してゐるあひだぼんやり前を見てゐた。それから、急ぎもためらひもせず、眼差をエドアルトへといふよりも天の方へ向けて、鎖を解き、繪を引出し、額に押しあて、かう言つて友だちに渡した。「家に歸るまでこれをあづかつてゐて下さい。私がどんなにご親切な御心配を重んじてゐるかをそれ以上にお示しすることはできませんもの。」

友だちはその繪を唇にあてようとはしなかつた。が、かの女の一方の手をつかんで眼におし

あてた。おそらく、いままで結び合された最も美しい二つの手であつたらう。かれは胸から石が落ちたやうな、自分とオティリエとの間の隔ての壁が倒れたやうな氣がした。

水車番に案内されて、シャルロッテと大尉は樂な徑を降りて來た。皆は會釋しあひ、よろこび、元氣づいた。かへりには同じ道はいやであつたので、エドアルトは小川のも一方の側の岩間の小徑を提議した。それを少し努力して進んで行くと、また沼が見えて來るのであつた。さまざまに變化する森の中を皆は進んで行つて、平地の方に、綠の肥沃な周圍をもつたいろんな村や小さな町や農場を眺めた。一番手前に丘の眞中に分農場が全く安らかさうに横たはつてゐた。そのなだらかにのぼつた丘の上で、前にも後にも、この地方の比類ない豐かさが最も美しく現はれた。そこから愉しい小さな森に行き着いて、そこを出ると館に向ひ合つた岩の上に出た。

そこへ幾分思ひがけなく着いたとき、みんなは大へんよろこんだ。かれらは小さな世界を迂回して來たのだつた。かれらは新しい建物が立てられるはずだつた場所に立つて、再び自分たちの住居の窓を見た。

一同は苦張りの小屋に下りて、はじめて四人でそこに坐つた。極めて自然に、かれらが時間をかけて難儀しないではなく歩いたけふの路を、社交的にぶらぶらと暢氣に歩けるやうにつけ直したいといふ希望が異口同音にのべられた。それ〴〵いろんな提議をした。又、數時間もか

かつた路もよくつくれば一時間で館に行けると計算した。あたまの中ではもう、水車の下に、小川が沼に流れ込むところに、路を近くし風景を飾るやうな橋をかけたりした。そのとき、シャルロッテが、さういふ企てに必要な費用を思ひ出せて、この考案する空想力に靜止を命じた。

「それにも方法はあるさ。」エドアルトが答へた。「又、見た眼には美しいがほとんど收入にならない森のあの分農場を賣つてその金をこの設計にあてさへすれば、すばらしい散歩をして、うまく投資した資本の利益を愉快にたのしめるわけだ。いまは、あそこから、年末の最後の決算でも少ししか收益が得られず厭な思ひをしてゐるわけだが。」

シャルロッテ自身もよい家政婦としてあまりこれに反對できなかつた。このことは以前にも話されたことであつた。大尉はそこで森の農夫たちのあひだに地所の分賣計畫をつくらうと思つた。が、エドアルトはもつと簡單に手輕にやりたいと思つた。すでに提言をしてゐた現在の小作人に買ひ受けさして、期日を定めて拂はせ、その期日に從つて計畫通りの設計を一區切づつすすめようといふのだつた。

このやうな合理的な適度な仕組は完全に贊成を得ずにゐなかつた。もう、みんなは心の中で新しい道のうねりを思ひ描いた。又、その道の上や近傍に極めて心地のよい休息場所や展望所を見出したいと思つた。

すべてをもつと細かに思ひ浮べるために、皆は夜、家の中ですぐ新しい地圖を取出した。歩

いて來た道を見渡し、二三の場所では恐らくもつと有利に道をつけられる方法を考へた。以前の計畫全部をもいちど討議し、新しい考へと結び合せ、館と向き合せの新しい家の場所を改めて肯定し、そこへの迂路を定めた。

オティリエはこのすべてに沈默を守つてゐた。そのとき、エドアルトがそれまでシャルロッテの前にあつた地圖を最後にかの女の前に向けて、同時に意見をもとめた。そして、かの女がちよつとためらふと、どうか默つてゐないで下さい、まだみんなどうでもいゝので、これからきまるところだからとやさしく勵ました。

「私でしたら、」オティリエは指を丘の一番上の平面に置いて言つた。「ここにその家を建てますわ。森に蔽はれて館は見えませんけれど、そのかはり、村も人家も皆隱されるわけですから、別の新しい世界にゐるやうな氣がすると思ひますの。沼や水車や丘や山や平地へのながめはとても美しいんです。私それに歩いて行きながら氣づきましたの。」

「その通りだ！」エドアルトは叫んだ。「どうしてそれを思ひつかなかつたんだらう？　かうするんですね、さうぢやない、オティリエ？」――かれは鉛筆をとつて長目の四角を強く亂暴に丘の上にかいた。

大尉にはこれがぐつときた。注意深く綺麗にかいた地圖が醜くされて不快だつたのである。が、かるく非難したあとで、かれは氣をとり直し、その考へに同意した。「オティリエさんの仰

しやる通りです。」かれは言つた。「家ではあまりうまくない珈琲や魚をたべに遠くに散歩するのを人は好むものです。僕たちは變化や變つたものを求めてゐるんです。昔の人が館をここへ建てたのは道理にかなつてゐます。風にはまもられてゐるし、日常のすべての必要物にもちかい。だが、住居よりも社交の場所にする建物は實際そこがふさはしい。よい季節にはこの上なく快い時間をあたへるでせう。」

このことが討議されればされるほど、愈々それは好望にみえた。そして、エドアルトは、オティリエがこの考へをもち出したといふ勝利感をかくすことができなかつた。かれはその創案が自分のものであつたやうに自慢した。

第八章

大尉は早朝すぐその場所を踏査し、まづ一時的の設計圖を起草し、皆のものが現場でも一度きめてから精細な圖を見積りや所要事項全部とともにつくつた。必要な準備にも缺けるところはなかつた。分農場賣却のための仕事にもすぐまた取掛つた。男たちは活動への新しい動機をともに見出した。

大尉はエドアルトに、起工式でシャルロッテの誕生日を祝ふのが禮儀であり、更に義務でもあることを氣づかせた。かういふお祭りに對するエドアルトのもとからの嫌惡を克服するには大してかからなかつた。といふのは、かれはすぐ、あとで來るオティリエの誕生日を同樣に盛大に催さうと考へたからである。

新しい設計やそれに伴ふ事柄が重大で嚴肅で殆んど氣遣はしくさへ思はれたシャルロッテは、見積りや時間と金錢の區分をも一度自分で詳しく取調べるのに忙しかつた。かれらは日中は會ふことが少なかつただけに、夜になると餘計にあこがれて求め合つた。

オティリエはこの間にすでに完全に家政の女主人になつた。その靜かでしつかりした擧措で、どうしてさうならぬわけがあつたらう。かの女の考へ方全體も世間とか戸外の生活へより

も家や家庭的なことにむいてゐた。エドアルトは間もなく、かの女が一緒に附近を散歩するのは本來ただ人の氣に入るためであること、ただ社交上の義務から夜もながく外にゐたりするので、家事の事を口實に家の中へ戻らうとしたことも屢〻あるのに氣づいた。で、かれはすぐに一緒の散歩を日沒前には家に歸つてゐるやうにきめることができた。そして、ながく止めてゐた詩の朗讀をまた始めた。とくに、朗讀に際して純粹な、しかし情熱的な愛の表情をあたへなくてはならぬやうな詩をよんだ。

普通かれらは夕方小さな卓子のまはりに、いつも定つた席に坐つた。シャルロッテはソファに、オティリエは向側の安樂椅子に、男たちは殘りの向き合せの席をとつた。オティリエはエドアルトの右側に坐つた。かれは讀むとき、そちらへも燈火を押しやつた。で、オティリエは本を覗き込むために一層身を寄せた。かの女もまた他人の唇より自分の眼を信用したからである。エドアルトも同樣身を寄せて、できるだけかの女によみやすくしてやつた。そればかりでなく、かれは時々必要以上にながく合間をおいた。それもたゞ、かの女が頁の終りに來ないうちにはめくらぬためであつた。

シャルロッテと大尉は十分それに氣づき、時々微笑みながら眼を見交した。が、二人は、オティリエのひそんだ愛情が折にふれてあらはれる他の徵候によつて驚かされた。

厄介な訪客のためにこの小さな集りが一部分臺無しにされたある夕方、エドアルトはまだ一

緒にゐようと提議した。かれは久しく日課に上らなかつた笛を吹いてみる氣になつたのであつた。シャルロッテは一緒に奏する習慣であつたソナタを探した。が、見つからなかつたので、オティリエが少しためらつてから、かの女が自分の部屋に持つて行つてゐることを白狀した。

「では、あなたはピアノで僕の伴奏ができるんですね？　してくださる？」エドアルトは喜びで眼を輝かして叫んだ。「できるだらうと思ひますけれど。」オティリエはその曲を獨りですつかり譜を持つて來て、ピアノに腰掛けた。聽いてゐる者は、オティリエがエドアルトの演奏の仕方に合せることを心得てゐたのを見て一層驚いた。合せることができた、といつては正しい表現ではない。覺え込んでゐたのに氣づいて驚いた。が、また、かの女がエドアルトの演奏の仕方に合せることを心得てゐたのを見て一層驚いた。合せることができた、といつては正しい表現ではない。躊躇したり早過ぎたりする夫のために止つたり、ついて行つたりするのはシャルロッテの熟練と自由意志によつてゐたのであるが、二三度かれらがソナタを演奏するのをきいてゐたオティリエは、それをただ、エドアルトがシャルロッテと奏するときどんなふうにやるかといふ意味ばかりで覺え込んだやうにみえた。かの女はかれの缺點を自分の缺點にし、そこからは、拍子に合つてはゐないが極めて快い好ましい音の出る一種の生き生きした全體が迸り出た。作曲者さへも自分の作品がこのやうな愛情のこもつたやり方でこはされるのを見ては喜びを感じたであらう。

この不思議な思ひがけない出來事も大尉とシャルロッテは、憂慮すべき結果を思へば肯定はで

きないが、叱ることもできず、却つて羨まざるを得ない子供つぽい行爲を見るやうな感じで、だまつて見守つてゐた。もともと、この二人の愛情も前者たちと同樣に成長してきてゐて、二人とも眞面目で自分を確かに知り、自分を制することもできるたちであつたために恐らく一層危險であつたからである。

すでに大尉は、不可抗的な習慣が自分をシャルロッテに縛りつけようと脅すのを感じはじめてゐた。かれは思切つて、シャルロッテが庭園に來るならはしの時間を避けるために、朝早く起きてすべての整理をしてから館の自分の翼での仕事に戻つた。はじめの二三日シャルロッテはそれを偶然と思つて、かれが居りさうな場所は殘らず探してみた。が、やがて、かの女はかれの氣持が解つたやうな氣がし、それだけに益々かれに氣をとめた。

大尉はいまやシャルロッテと二人きりになるのを避けたが、近づいて來る誕生日の輝しいお祝ひのために益々熱心に庭園の工事を進めた。かれは下から、村の後ろから樂な路をつくる一方、石を切出すといふ名目で上からも仕事をすすめ、最後の夜にはじめて路の兩部分が出逢ふやうにすべてを準備し計算した。上の新しい家にはもう地下室が掘るといふよりは穿たれ、窓孔と冠石のある美しい礎石が一つ切られた。

外面的な仕事、このささやかな、友情のこもつた祕密な意圖は、內部の多少抑へられた感情の故に、集つたとき皆の者の會話を活潑にしなかつた。エドアルトはなにか間隙のあるのを感

じて大尉にある夕、ヴァイオリンをとり出してシャルロッテのピアノに伴奏するやうにもとめた。大尉は一同の慾求にさからふことができず、二人は、感動と愉快と自由さを以て最も困難な曲の一つを合奏したので、かれらや聽いてゐる一組にも最大の滿足をあたへた。かれらはいくども繰返しをし、又一緒に練習をする約束をした。

「僕たちよりうまいね、オティリエー」とエドアルトが言つた。「僕たちは二人を讃へよう。だが、しかし、一緒に喜ばうね。」

第九章

誕生日は來た。すべては出來上つた。水に向いた村道を圍んで高めた石垣全部と教會の側を行く道もできた。道はそこでちよつとシャルロッテのつくつた小徑を走つてから岩をうねり上つて苔張りの小屋を左上に見、それから一廻轉して左下に見て、次第に頂きに達した。

この日澤山の客がやつて來た。人々は教會に行き、そこでは教區の人たちがお祭りの裝飾で集つてゐるのに出逢つた。禮拜のあとで子供、若者、大人の男たちが定められたとほり先に行き、それから主人たちが訪客や從者とともにやつて來た。少女や若い女や婦人たちが最後であつた。

道の曲角に高くした岩の席が設けられてあつた。そこに大尉はシャルロッテと客たちを休ませた。ここで、かれらは道全體を、上つて行つた男たちの群やちやうど通過ぎて行くぶらぶらと後につづいた女たちを見渡した。すばらしいお天氣で、不思議に美しい光景であつた。シャルロッテは驚き、又感動し、大尉の手を心から握りしめた。

人々は徐ろに歩き進んで行く群集について行つたが、かれらはもう未來の家のまはりに圍をつくつてゐた。建築主とその家族と最も身分の高い客たちが下の低い處へ降りるやうに招れ

た。そこでは片側を支へられた礎石が下ろすばかりになつてゐた。着飾つた左官が一人、片手に鏝を他方の手に鎚を持つて、韻語で雅致のある演説をした。それは不完全にしか散文には直せない。

「建物では三つのことが留意されねばなりません。」かれははじめた。「正しい場所に立つこと、基礎を十分にすること、完全に仕上げることです。第一は本來建築主に關する事です。都會では君主と市會だけがどこに建てるかを定めることができるやうに、地方では、ここに俺の住居を建てろ、他の處ではだめだ、と言ふのは土地の所有者の特權です。」

エドアルトとオティリエはこの話の間、お互に近く向き合つてはゐたが互に眼をかはさうとはしなかつた。

「第三の完成は、全く澤山の職人の心配するところです。實際この場合働かないものはほとんどありません。が、第二の基礎工事は左官の仕事です。大膽に言へば、全事業の主要な仕事です。嚴肅な仕事でありまして、私共の御招待も嚴肅なわけです。このお祭は地の底で行はれるのですから。この、狹く掘られた場所の內部に皆様は私共の祕密な仕事の立合人として御光來の榮譽を賜はりました。すぐに、このよく切つた石を下しませう。そして、美しい氣高い方々で飾られたこの土の周壁もまもなくもう近づけなくなり、埋められるでせう。

その角を以て建物の正しい角を、その直角を以て建物の規則正しさを、その水平と垂直の位

置によつてあらゆる壁の直立と均衡とを示すこの礎石を、私共はすぐ無造作に下ろすことができるでせう。それはそれ自身の重みの上に十分安定してゐるのですから。が、この場合もまた漆喰が、接合劑がなくてはなりません。生れつき好き合つてゐる人も法律が漆喰づけにすると一層よく結び合ふやうに、形がすでに適合してゐる石もこの接合力によつて益〻結合するからです。ところで、働く人のなかにゐてひまなのはふさはしくありませんから、貴方樣がたもここでちよつとお手をおかし下さるのをお厭ひにはならないでせう。」

さう言つて、かれは鏝をシャルロッテに渡した。かの女はそれで漆喰を石の上に投げた。數人の人が同じことをするやう求められた。石はすぐ下ろされた。それに次いで、シャルロッテと他の人々に、三度叩いて石と土との結合を明白に祝福するやうに、鎚がすぐ渡された。

「左官の仕事は、」演說者はつづけた。「いまは自由な空の下でするので、かならずしも隱れてやるわけではありませんが、隱れた仕事になるのです。規則正しく作られた基礎は埋められ、貴間造る壁にも結局私共のことは思ひ出されません。石工や彫刻家の仕事が人目につきます。それに、上塗師が私共の手の跡をすつかり塗りつぶして、上塗りをし、滑らかにし、採色して私共の仕事を我物にしてしまふと、私共はそれをよしとしなければなりません。

だから、自分の仕事を正しくすることでみづから滿足することが左官ほど大切なものはありません。又、左官ほど自尊心を養ふ理由を持つ者はゐません。家屋が建てられ、地がならされ

鋪石が敷かれ、外部が裝飾で蔽はれても、左官はいつも外皮をとほして見、全體がその存在と維持を負うてゐるあの規則正しい丹念な接合をみとめます。

が、悪いことをした者があらゆる防禦にもかかはらず明るみに出るのを恐れねばならぬやうに、祕かに善を爲した者も、自分の意志に反してそれが現はれるのを豫期せねばなりません。ですから、私共はこの礎石を同時に記念石にします。此處にある種々のほり刻まれた穴にはいろんなものを遠い後世への證據に入れねばなりません。金屬製の蠟づけにしたこれ等の筒には記錄が入つてゐます。金屬板にはいろんな顯著な事が彫られてゐるし、美しいガラス壜には最上の古い酒を生産年次を記して入れます。今年鑄造された種々の貨幣にも缺けません。このすべてを私共は建築主の寛大によつていただいたのです。又、ここにはまだ、お客様や見物の方方がなにか後世にのこしたいと思召すものがあればいくらでも餘地がございます。」

少し間をおいて職人は見廻した。が、こんな場合のつねで、誰も用意がなく、皆面食つた。が、やつと一人の若い元氣な士官が口火をきつて言つた。「この寶庫にまだ入れてないものを寄進しなくてはならぬとすれば、僕は制服のボタンを二つ三つ切取らねばなりません。これもきつと後世にのこる値打はあるでせう。」言つたのと爲たのと同時であつた。すると、いろんな人たちが似たやうな思ひつきをした。婦人達は小さな櫛を入れるのを躊躇しなかつた。香水の小瓶や他の裝飾品も惜氣なく出された。オティリエだけがためらつてゐた。すると、エドアル

トがやさしい言葉をかけて、寄進し投げ入れられた物をながめてゐるかの女を呼び覺した。かの女はそこで父親の肖像の懸つてゐる金鎖を頸から解いて、他の寶物の上にそつと置いた。エドアルトは少しせはしげに、ぴつたり合つた蓋をすぐのせて漆喰づけにするやうにした。

このとき一番よく立働いてゐた若い職人は再び演說者の顏附にかへつて續けた。「私たちはこの石を、この家の現在又未來の持主の最も長い享受を確保するために永遠に据ゑます。が、言はゞ寶を埋め、すべての仕事のうちの最も根本的なものをしながら、私たちは同時に人事のはかなさを思ひます。私たちはこの嚴封された蓋がまた持上げられる可能性を考へます。それは、私たちがまだ建ててゐないすべての物が再びこはされるときしか起らないでせうが。

が、すべてを建て上げますために、考を未來から返し、現在へ戻りませう。そして、今日のお祝ひが終りましたら、すぐ仕事を進めるやうにし、この土臺の上で働く職人が一人もぼんやりしてゐる必要がないやうにし、建物がはやく空に聳え、完成され、まだ無い窓から家の主人が家族や客たちとともにたのしく四方を見渡せるやうにしませう。では、その方々とともに全列席者の御健康を祝して乾杯いたしませう！」

さう言つて、かれはよく磨いた臺附のグラスを一息に呑みほして空中に投げた。よろこびに使つた器を毀すのは並々ならぬ喜びを示すからである。が、こんどはさういかなかつた。グラスは地に落ちず、それも不思議ではなかつた。

つまり、建築を進捗させるために、反對側の隅の土をすでにすつかり掘り上げて、更に壁を築きはじめ、その目的のために普通必要な程度の高さの足場を拵へてあつたのだ。

とくにこのお祭りのためにそれに板を敷いて澤山の見物人を上らせたのは勞働者たちに好都合であつた。そこへグラスは飛んで行つて一人の男に受けとめられ、男はこの偶然を幸福の印と見た。かれはそれを手から放さず、ついに周圍にみせて廻つた。それにはEとOの文字が美しく絡みあつて刻まれてゐた。小さい時エドアルトのために作られたグラスの一つであつた。

足場は再び空虛になつた。客たちのうちで身輕な人たちが上つて見廻した。四方への美しい眺望はほめきれないほどであつた。高い地點では一階でも高い所にゐるものには何でも發見される。平地の內部に向つては數箇の新しい村が現れ、河の銀色の線ははつきり見え、首都の塔さへ認められるといふ者もあつた。裏側には、森の丘の後にとほい山脈の青い峰が聳え、界隈全體が見渡せた。「もうこれで、三つの沼を一つの湖に合せさへすればいゝですね。」一人が言つた。「そしたら眺めも大きな望ましいもので持たないものはなくなるんだが。」

「それはできるでせう。」大尉が言つた。「もとは一つの湖だつたんですからね。」

「ただ僕のプラターヌとポプラの森だけは大事にしてくれよ。」エドアルトが言つた。「眞中の沼にそらほんとに美しい。御覽なさい——かれはオティリエの方に向いて、二三歩かの女を連

れ出し、下を指さしながら言つた——あの樹は僕が自分で植ゑたんですよ。」

「もう、どれくらゐになりますの?」オティリエが尋ねた。「さうね、」エドアルトは答へた。「あなたと同じ歳くらゐです。さうだ、あなたがまだ搖籃のころに植ゑたんですよ。」

一同はまた館に歸つた。食事が終つてから、かれらは村を通つて散歩に誘はれ、ここでも新しい施設を見學した。そこでは大尉の指圖で住民たちはめいめいの家の前に集つてゐた。列をつくつて立つてはゐなかつたが、家族家族で自然に群をなし、夕方の仕事に忙しげにしてゐたり又新しいベンチに休んだりしてゐた。少くとも毎日曜と祭日ごとにかういふ清潔と秩序を新にすることはかれらの快い義務とされたのである。

我々の友人達のあひだに生じたやうな愛情のある內的交友は人が多くなるといつも不快に中斷されるものである。再び廣い客間で自分たちきりになると四人とも滿足するのであつた。が、この家族的な感情は、エドアルトに渡された手紙が明日の新しい客を告げたためにいくぶん妨げられた。

「僕たちの推測どほりだ!」エドアルトがシャルロッテに叫んだ。「伯母は來ないではゐないね。明日來るさうだ。」

「では、男爵夫人も遠くはございませんね。」シャルロッテが答へた。

「さう。」エドアルトは答へた。「あの人も明日自分の方から着くだらう。一泊したいと言つて

來てゐる。明後日はまた一緒に立たうといふんだ。」

「では遲くならないうちに用意をしなくてはなりませんね。オティリエさんー」シャルロッテは言つた。

「どんな風に致しませうか?」オティリエは訊いた。

シャルロッテは大體の指圖をした。オティリエは去つた。

大尉は大凡しか知らないこの兩人の關係を尋ねた。二人は以前、兩方ともすでに結婚してゐてはげしく愛し合つた。二重結婚は評判となつて破れた。離婚が考へられた。男爵夫人にはそれができたが、伯爵はできなかつた。二人は外見別れねばならなかつた。が、その關係だけは殘つた。冬首都で一緒になれないために、夏遊山旅行や溫泉場でその埋合せをした。二人ともエドアルトとシャルロッテよりは少し年上であつたが、以前の宮廷時代から四人とも親しい仲であつた。友だちのことを全部肯定するわけではなかつたが、そのよい關係はずつとつづいてゐた。ただ今度だけはかれらの來ることはシャルロッテにとつて一寸全く工合が惡かつた。その理由を詳しく調べたなら、もともとオティリエのためであつた。この善良で淸らかな子にさういふ例をあまりはやく知らせたくなかつたのである。

「もう二三日來ないでくれるとよかつたんだがな。」丁度オティリエがまた入つて來たとき、エドアルトが言つた。「分農場の賣却のかたがつくまではね。證書はできてゐる。寫しも一つは

ここに持つてゐるが、も一つのがない。年寄の書記がすつかり病氣なんでね。」――大尉が引受けようと言ひ、シャルロッテもそれを申出た。が、それには少し異議を挾むべきところがあつた。

「私にやらして下さいな。」オティリエは少し性急に叫んだ。

「あなたには仕上らないでせう。」シャルロッテが言つた。

「勿論、明後日朝早く欲しいんだ。それに澤山なんですがね。」エドアルトが言つた。「仕上げてみせますわ。」オティリエは叫んで、もう書類を兩手に持つてゐた。

翌朝、二階から、迎へそこなはないやうにと客を見廻してゐたとき、エドアルトが言つた。「あそこに往來をゆつくり馬で來るのは誰かな?」大尉は騎手の姿を詳しく述べた。「それぢや、確かに、あの男だ。」エドアルトは言つた。「君が僕より上手に見る細かな點が、僕によく見える全體と大へん合つてるんだもの。ミトラーだ。でも、どうしてあんなにゆつくりやつて來るやうになつたのかな?」

姿は近づいた。實際にミトラーであつた。かれがゆつくり階段を上つて來たとき、皆は親しく迎へた。「どうして昨日はおいでにならなかつたの?」エドアルトがかれに叫んだ。

「喧しいお祭は好きませんのでね。」ミトラーは答へた。「今日はしかし、私の女友達の誕生日を靜かに御一緒にお祝ひしようと思つてやつて參りました。」

「一體どうしてそんなにおひまがおありなんでせうね。」エドアルトが冗談に言つた。

「私の訪問は、なにか値打があるとしますれば、昨日私がした考へのお蔭なんですよ。私は仲裁をしてやつたある家で半日ほんとに心から樂しんでゐたのです。そのとき、ここで誕生日があるといふことを聞きました。私は、自分が仲裁してやつた人たちとばかり樂しむのは結局利己的といふものだと考へたのです。なぜ、もともと平和にしてゐる友だちともたのしまないのか、とね。言ふとすると一緒でさ。決心どほりかうしてやつて來たんですよ。」

「昨日なら澤山お客さんがありましたけど、今日はほんの少しの方々ですわ。」シャルロッテが言つた。「あなたにももうお手數をかけたことのある伯爵と男爵夫人なんですの。」

珍らしい歡迎すべき男を取圍んだ四人の家族の人々の中から、かれはすぐ帽子と鞭を探しながら、ひどく嫌らしげにとび出た。「私が休息して樂をしようとすればすぐ、きまつて不吉な星が漂うて來る。だが、どうして私もまた自分の性分から出ようなどとするんだらう。來なければよかつた。もう追ひ出される。あの人たちとはおなじ屋根の下に居たくないんです。御注意なさいよ。禍以外のものは持つて來ない人たちです。傳染さして行く酵母のやうな性質の人たちです。」

皆はかれを宥めようとしたが、無駄であつた。「結婚生活を冒す者には、」かれは叫んだ。「道德社會のこの根本を言葉や行ひで掘り崩さうとする者には私が相手になります。もし私がそ奴を征服できなかつたら、もう緣なき衆生です。結婚はあらゆる文化のはじまりであり頂上です。

粗野なものも溫和しくし、教養ある者はその溫良さを示すにこれ以上の機會はありません。結婚は解消できぬものであらねばならないのです。實に澤山の幸福を齎すもので、これに比すれば一々の不幸は到底勘定に入りはしません。一體不幸とは何でせう。時々人間に襲ひかかる不忍耐ではありませんか。そんな時、ひとは不幸を好むものです。その瞬間を過ごしてしまへば、ながい間存在したものがまだ存在してゐるのを見て人は自分の幸福と讃へるでせう。離婚するに十分な理由などはありません。惱みに於ても悅びに於ても人間の狀態は非常に高いものですから、夫婦がお互にどれだけ負目をうけてゐるか數へることはとても出來ません。永遠によつてのみ償はれる無限の負目です。ときには、うるさいこともあるでせう。それは私も認めます。又、それはそれでいゝんです。私共は夫や妻よりもうるさくて別れてしまひたいとよく思ふ良心とも結婚してはゐないでせうか?」

かれは勢よく喋つてゐた。郵便馬車のラッパが紳士と淑女の到着を告げなかつたら、まだ長く喋りつづけてゐたであらう。その人達は計つてでもあつたやうに兩方から同時に館の庭に乘り込んで來た。家族のものが急いで迎へに出たとき、ミトラーは身を隱し、馬を旅館まで引いて來させて、不機嫌さうに乘り去つた。

第十章

客たちは歡迎され、請じ入れられた。かれらは以前に幾日もよい日を過し、長い間見なかつた家と部屋に再び入つてよろこんだ。家の友人たちにもかれらがゐることはこの上なく快いことであつた。伯爵も男爵夫人も青年時代により中年になつて見よいあの背の高い美しい姿の人たちと言へた。最初の花は消え去つたにしても、愛情とともに確實な信頼の念を起させるからである。またこの一組はいま非常に氣樂な樣子であつた。人生の諸狀態をとらへて論ずるその自由な仕方と明朗さと一見こだはりない感じがすぐ人々につたはり、氣高い禮讓が少しの無理も氣づかせずに全體を制してゐた。

この影響はすぐ人々にも感じられた。衣服や道具や身のまはりのすべての物にも見られたことだが、世間から直ぐ樣に來たこの新しい客たちは我々の友だちとは、その田舍風な祕かに情熱をこめた狀態とは幾分一種の對照をなしてゐた。が、それも、昔の思ひ出と現在の共感が混合し、元氣な早い會話がすばやく皆を結び合せたので、すぐに消えてしまつた。

が、それも長くはつづかず、はや分裂が起つた。婦人たちは自分等の翼に戻り、そこで、いろんな打明け話をしたり、春の衣裳や帽子などの新しい型を吟味したりしはじめ、十分に娛し

んだ。一方男たちは新しい旅行馬車のまはりで、馬を引出したりして忙しく、すぐに取引や交換をはじめた。

食事のときやつとみんなはまた一緒になつた。着換へが行はれてゐて、ここでもまた客の二人に分があつた。かれらの身につけてゐた物は皆新しく言はゞ見たこともないものであり、しかも使ひやうですでにいかにも着慣れたくつろいだものになつてゐた。

會話は盛んで變化に富んでゐた。かういふ人たちの前ではすべてが興味があるやうに思はれ、又何も興味を惹かないやうに思はれるからである。人々は給仕人にわからないやうにフランス語をつかつた。そして、氣紛れな面白がりから上流や中流階級の人々の噂話をした。ただ一つの點で會話は適當以上にながくとどまつた。シャルロッテが若いときのある女友達のことを訊ね最近離婚される筈だと聞いて少し驚いたのである。

「たまたま居合せない友人たちや、好きな友だちが安穩に何不自由なく暮してゐるとばかり思つてゐるとき、突然、その人たちの運命がぐらついてまた新しく今度も不安な道に入らねばならないと聞かされるのはほんとにいやなものですわね。」シャルロッテは言つた。

「もともと、奥さん、」と伯爵は答へた。「こんな風に私たちが驚くのは自分のせゐなんですよ。地上の物、とくに結婚を私たちは永續的なものと思ひたがるものです。結婚については、繰返し私たちの見物する喜劇が世の中の進行と合はないやうなそんな空想に誘惑するのです。

喜劇では私たちは結婚を數々の障害に延びのびにされた願望の最後の目的として見ます。目的が達せられた暖間に幕が下りて、一瞬の滿足が餘韻として心に殘るのです。世間はこれとはちがふんです。そこでは、背後でたえず演じつづけられてゐます。そして、幕が上つても、もう誰も見ようとも聞かうともしないのです。」

「そんなにひどくはないに相違ありませんわ。」シャルロッテは微笑みながら云つた。「舞臺を降りた人たちもやはりも一度役を演じたがるのが見えますもの。」

「それには何も抗議はありません。」伯爵は言つた。「新しい役ならまたひき受けたいと思ふでせう。世間を知ればよくわかるやうになりますよ。結婚生活でもなにか拙いものがあるとすれば、世間の非常に動き易いもののなかでこんなに決定的に永遠につづくといふことなんです。私の友だちの一人が、その男の上機嫌は大概新法律の提議となつて現れますがね、かう主張しました。結婚はすべて五年間にしなくてはならないといふのです。その男によれば、これは美しい神聖な奇數だし、お互に知合つて二三人の子供を產み、離婚し、一番よいことにはまた和解するに十分な期間だといふわけです。いつも先生かう叫ぶのがつねでした。最初の時期はどんなに幸福に過ぎることだらう。二年、三年は少くとも滿足に經過する。それから恐らく一方の者がこの關係をもつとつづけたいと思ふやうになる。解約期が近づくにつれて好意は增すものだ。無關心な、いな不滿足なも一方の者すらもさういふ態度をみせられると宥められ魅

せられてしまふだらう。はては面白い會合で時間を忘れるやうに時の過ぎるのを忘れ、期間が過ぎたあとで、暗默のうちに延ばされたのに氣づいて驚くとともに大に愉快がることだらう、とね。」

この話は上品に面白く聞え、又シャルロッテが十分感じたやうにこの冗談には深い道德的解釋をあたへることもできたが、かういふ言葉はとくにオーテリエのためにかの女には快くなかつた。かの女は、罰すべき、或は半ば罰すべき狀態を普通の一般的な、否、稱讚すべきものと論じるあまりに自由な話ほど危險なものはないことをよく知つてゐた。結婚を攻擊する言葉はすべて確かにこれに屬するものである。かの女はだからその熟練したやり方でこの話を外らさうとした。が、それができなかつたので、オーティリエが席を外すことができないほど萬事を十分に準備してゐたのを悲しく思つた。この落着いて注意深い娘は眼差や手招きで執事と意を通じあつてゐて、二三人新しい不馴れな召使で制服を着てゐるものがゐたにも拘らず、一切をこの上なく運んでゐたのである。

そこで、伯爵はシャルロッテが話を外らさうとするのに氣づかず、この題目について話をつづけた。いつもは會話でうるさがらせたりすることのないかれも、この事柄があまりに心をおしつけてゐて、又、妻から別れることの困難さが結婚に關するすべてに對してかれを辛辣にしてゐたのである。その結婚を男爵夫人とならば熱心に望んでゐたのであるが……

「例の友人は、」かれはつづけた。「も一つ法律の提議をしたんです。結婚は両方か少くとも一方が第三回目に結婚したときはじめて解消できないものとすべきだといふのです。といふのは、さういふ人物ならば、結婚を不可缺のものと認めることを白状してゐるのは否定できないからです。さうなるとまた、以前の結婚ではどんな風であつたか、悪い性質以上に屢々離婚の動機となる特性を持つてゐるかどうかも分つてくるでせう。だからお互に聞合せをしなくてはならないわけです。又、どうしてそんな場合が來るか分らないから、既婚者にも未婚者同様に注意をしなくてはなりません。」

「さうなると勿論社會の興味を非常に増すことだらうね。」エドアルトは言つた。「實際結婚してしまふと、誰も我々の徳性や缺點を訊ねるものはないからね。」

「そんな制度でも、」男爵夫人は微笑みながら口をはさんだ。「この家の御主人方はもう二つの階段は幸福に越えて、第三の階段の準備をなさることができるわけですわね。」

「あなた方はうまく行きましたよ。」伯爵は言つた。「ほんとなら宗務局がいやいやですることを死神が進んでしてくれたんですからね。」

「死んだ人たちはそつとしておきませうよ。」シャルロッテがなかば眞面目な眼附で答へた。

「なぜです。」伯爵は答へた。「あの人たちを尊敬して追憶できますもの。あの人たちは、いろんな善いことを殘して、自分たちは二三年で滿足するほどに謙遜だつたんです。」

「そんな場合、最もよい歳月が犠牲にされることさへなければね。」男爵夫人は溜息を抑へて言つた。

「全くです。」伯爵が答へた。「この世で望み通りの結果を得るなんて滅多にないことだといふことがなかつたら、人はそれに絶望せずには居れないでせう。子供は約束を守らないし、若い人も滅多に守らない。かれらが守つたにしても世間が守らない。」

會話の向きが變つたのをよろこんで、シャルロッテは朗らかに答へた。「さあ、それでなくても私たちはよいことを少しづつ味ふやうに急いで慣れなくてはいけませんね。」

「確かに、」伯爵は答へた。「あなた方はお二人とも非常に美しい時を味はれました。あなたとエドアルト君が宮廷で一番美しい一組であつた頃を思ひ出すと、あんなに輝しい時代もあんなに光つてゐる姿もいまではもう話題に上りません。お二人が一緒に踊られると、すべての人の眼はあなたがたに向けられ、お二人に求婚でもしてゐるやうでした。あなたがたはお二人だけで互に姿を映しあつていらしたのに！」

「いろんなことが變りましたから、」シャルロッテは言つた。「そんな華やかなことも謙遜な氣持でお聞きできますわ。」

「エドアルト君に頑張りがたりないといつて私は時々祕かに非難したものですよ。」伯爵は言つた。「結局はあの不思議な御兩親も讓歩されたでせうからね。十年の若い日を得ることは些

細なことではありません。」

「私はエドアルトさんの辯護をせずにはゐられませんわ。」男爵夫人が口をはさんだ。「シャルロッテさんにだつて全然罪がなく、躊躇逡巡の風がなかつたわけではございませんもの。エドアルトさんを心から愛し、祕かに良人に定めていらしたにしても、よくひどくお苦しめになつたのを私は見てゐました。それで、旅に出て、遠ざかり、忘れようといふ不幸な決心をするやうに迫られたのですわ。」

エドアルトは男爵夫人にうなづいて、その辯護に感謝する樣子であつた。

「それから一つ、」と、かの女はつづけた。「シャルロッテさんの辯解に附加へておかなくてはいけませんわ。あのときシャルロッテさんに求婚した人はもうずつと以前からシャルロッテさんへの愛著で目に立つてゐて、よく知つてみれば、あなた方他人がおみとめになるよりたしかに愛すべき方でしたもの。」

「ねえ。」伯爵は少しはげしく言つた。「白狀しようではありませんか。あの人はあなたに全然無關心ではなかつたし、シャルロッテさんは誰よりもあなたを恐れねばならなかつたんです。一人の男への愛著をながく持ちつづけ、どんな離別でも妨げられたり止められたりすることがないのは御婦人方の大へん美しい特性だと思ひますよ。」

「そのよい特性はたぶん男の方たちが餘計に持つていらつしやいますわ。」男爵夫人は答へ

た。少くとも、伯爵、あなたで氣づきましたわ。以前にお好きだつた御婦人ほどあなたに力のある方はございませんもの。その方のための口添へになら現在の女友達に以上にお骨折になるのをお見受け致しましたわ。」

「そんな非難でしたら甘んじてお受けできます。」伯爵は答へた。「だが、シャルロッテさんの最初の御主人については私は好きになれなかつたのです。あの方は美しい一組を、いちど結婚したら五ヶ年を怖れたり第二第三の結婚を考へたりする必要のない本當に運命に定められた一組をお裂きになつたんです。」

「私たちは疎かにしたものを取返すやうにしたいと思ひますわ。」シャルロッテが言つた。

「それには急がなくてはいけません。」伯爵は言つた。「あなた方の最初の結婚は、」かれは少しはげしくつづけた。「實際全く憎むべき種類のものでした。が、殘念なことに結婚なんて大抵、激しい言葉を使つてよければ、一種愚劣なものです。最もやさしい關係を破壞してしまふものです。そして、それは本來、少くとも一方が誇りとする愚鈍な確實さの故です。すべては自明なことです。各自が勝手に生きて行くために結婚したやうなものです。」

この瞬間、シャルロッテはあくまでこの會話を中斷しようと思ひ、ある大膽な轉換を企てて、成功した。會話は一般的になり、二組の夫婦と大尉が加はることができた。オティリエさへも口を開く機會があたへられた。食後の茶菓は極めて上機嫌に味はれた。それは何よりも、綺麗

な果物籠に盛られた豊かな果實と、華麗な器物に美しく分けて挿された澤山の彩なす花のお蔭であつた。

新しい遊園もまた話題に上り、食事のあとですぐ一同は其處を訪れた。オティリエは家事を口實に家に留つた。しかし實際はかの女はまた清書の机に向つたのである。伯爵のお相手は大尉がした。あとでシャルロッテがそれに加はつた。頂上に着いて大尉が地圖を取りに愛想よく急いで下りて行つたとき、伯爵はシャルロッテに言つた。「あの人は非常に好感が持てますね。大へんよく、しかも聯絡して物を知つてゐられる。仕事もまた非常に眞面目で首尾一貫してゐる。あの人がここでやつてゐることは、上流社會でなら大いに價値のあることでせうけれど。」

シャルロッテは大尉についての讃辭を心からたのしく聞いた。かの女はしかし氣持を抑へて、伯爵の言葉を落着いてはつきり保證した。が、伯爵がかうつづけたとき、かの女はどんなに驚いたことであらう。「私はほんとにいゝ時に知合になりましたよ。私はあの人に完全にぴつたりする地位を一つ知つてゐます。この推薦で私はあの人を幸福にするとともに、ある身分の高い友人にひどく有難がられることになるんです。」

それはシャルロッテにとつて雷霆のやうなものであつた。伯爵はしかし何も氣がつかなかつた。つねに自己を制御することになれてゐる婦人たちは、非常な特別の場合にも一種の外見上の平靜を保つものだからである。が、かの女は、伯爵が次のやうにつづけたとき、もはやその

言葉を聞いてはゐなかつた。「私はなにかを確信すると、すぐやつてしまふたちです。もう頭の中で手紙を綴りました。それを書かずにはゐられません。今夜にも出せるやうな騎馬の使者を一人お世話願へませんか。」

シャルロッテのこころは裂けた。この提議と自分自身に驚いて、かの女は言葉を發することができなかつた。が、幸ひにも伯爵は大尉についての計畫を話しつづけてゐた。その好望なことはシャルロッテにもあまりに明瞭であつた。その時、大尉が登つて來て、卷物を伯爵の前にひろげた。が、何といふ別な眼でかの女は失はねばならないこの友人を見たことであらう。辛うじてお辭儀をしてかの女は身を振向け、下の苔張りの小屋へ急いだ。もう道のなかばでかの女は涙が眼から轉び落ちた。いまや、かの女は小さな庵の狹い部屋に身を投げ入れて、瞬時の前まで少しも豫感さへしなかつた苦痛と情熱と絶望にすつかり身を委ねた。

一方エドアルトは男爵夫人と沼の畔を歩いてゐた。何でも知りたがるこの賢い婦人は、間もなく手探りの話で、エドアルトがオティリエをひどくほめちぎるのに氣づき、極めて自然に次第にかれをおびき出して、ついには、情熱が起りつつあるのではなく實際にもう起つてゐることが燒ひなくなつた。

既婚の女たちはお互に愛し合つてはゐなくても暗默のうちに相互に同盟してゐるもので、とくに若い娘に對してさうである。かういふ愛情の結果はかの女の世なれた心にはあまりにも

素早く眼に見えてきた。それに、今朝既にかの女はオティリエのことをシャルロッテと話し、この娘の田舎への滞在を、とくに靜かな性質故によくないとし、オティリエを都會のある女友達の許へやるやうに提議してゐたのであつた。その婦人は非常に獨り娘の教育に意を向けて、氣立のよい遊び友だちを探してゐて、それを第二の子供として扱ひ、あらゆる利便をともにうけさせる考へだといふのであつた。シャルロッテはそれを考へてみることにしてゐた。

いまや、しかし、エドアルトの心を一瞥したことが男爵夫人にこの提議を全く故意に確固たるものにした。この考へがかの女の心にはやく行はれただけ、外面的には益々エドアルトの希望に媚びるのであつた。この婦人ほどに自分を制御できる者はなかつたからである。非常の場合に於けるかういふ自制は普通の場合をも假裝を以て扱ふやうに我々を馴らし、自分自身にひどく無理を加へることによつて他人へも支配力を擴げ、外部で得ることで內部に缺けるものを幾分償はうといふ傾向をあたへるものなのである。

かういふ心術には概ね、他人の暗愚や、不幸に陷る無意識を祕かに嘆ら笑ふやうな氣持が結びつくものである。現在の成功ばかりでなく、將來不意に慚愧させることをよろこぶ。かうして男爵夫人は、エドアルトをシャルロッテとともにかの女の莊園の葡萄摘みに招待し、オティリエも連れて來てよいかとのエドアルトの問ひに對して、かれが自分の都合のよいやうに勝手に解釋できるやうな返事をするほど意地惡であつた。

エドアルトはもう有頂天になり、すばらしい地方や、大きな河や、丘や、岩や、葡萄畑の山や、古城や、舟遊びや、葡萄摘みや葡萄搾りの歡喜のことなどを話した。かれは無邪氣な心のままに、さういふ風景がオティリエの清新なこころにあたへる印象を豫め大よろこびしてゐるのであつた。この瞬間、オティリエのやつて來るのが見えた。男爵夫人は素早くエドアルトに、この計畫中の秋の旅行についてはなにも言はないやうにと言つた。あまりはやくから喜んでゐることは出來なくなるのが普通だから、と。エドアルトは約束したが、オティリエを迎へるためにもつと足を早めるやうに强いた。そして、ついに、その可愛い娘の方へ、かの女より數歩先んじて急いだ。心からの悅びがかれの體全體にあらはれてゐた。かれはかの女の手に接吻し、道々摘んだ一束の野花を握らせた。男爵夫人はこの光景に心中殆んど憤激せんばかりであつた。この愛情に於ける罰すべき點を肯定できなかつたにしても、その愛すべく愉快なものをこの無意味な新來の娘に許すことはできなかつたのである。

夕食にまた集つて坐つたとき、皆のあひだには全くちがつた氣分がひろがつてゐた。食事前に既に手紙を書いて使者を送り出してゐた伯爵は大尉と話し、かれを側に寄せて、理解のある謙遜な態度で益々根掘り葉掘り訊きただした。伯爵の右側に坐つてゐる男爵夫人にはそこからは殆んど話が來なかつた。同樣にエドアルトとも話さなかつた。かれは最初咽喉が渴いてゐて、やがて昂奮して葡萄酒を惜しまず、身近に寄せたオティリエとひどく元氣に話しこんでゐた。

他の側には大尉の傍にシャルロッテが坐り、心中の動揺を隠すことは困難に、いな殆んど不可能にみえた。

男爵夫人は十分觀察をするひまがあつた。かの女はシャルロッテの不快に氣づき、エドアルトのオティリエへの關係のみ考へてゐたために、シャルロッテもまた良人の態度を怪しみ氣持を惡くしてゐるのだと簡單に思ひ込んだ。そして、いまや自分の目的を達する最善の方法を考へるのだつた。

食事後もまた一同に分裂が起つた。大尉を根本的に知らうとした伯爵はこの落着いた虚榮心のまるでない概して寡默な人物に、その望みを聞知らうといろんな言廻しをもちひた。かれらは廣間の一方の側を互にあちこちと歩いた。一方エドアルトは葡萄酒や希望で昂奮して窓際でオティリエと冗談を言ひ、シャルロッテと男爵夫人は默つて廣間の他の側を互に行つたり來たりしてゐた。かの女たちの沈默と所在なげなぶらつきはついにまた他の人々にも停頓をもたらした。婦人たちはその翼に退き、男たちは他の翼に行き、かうしてこの日も終つたかに見えた。

第十一章

エドアルトは伯爵を部屋に案内して、自分から好んで話をまじへながら、まだ暫くそこに留つてゐた。伯爵は昔の頃に思ひ耽り、シャルロッテの美しさを生々と思ひ出し、通人としてひどく熱を以てそれを述べたてた。「美しい足は自然の大きな賜物だね。この優美さは荒ぶことはない。僕は今日あの方が歩かれるのを觀察してゐたが、いまでもあの方の靴になら接吻して、愛し敬ふ人の靴を盃にして健康を祝して飲むのを最上のこととする少し野蠻ではあるが感情の深いサルマチア人の敬意の表しかたを繰返したくなるよ。」

二人の親友の間では足の先だけが賞讃の對象ではなかつた。かれらは人のことから昔の話や冒險のことに溯り、以前この二人の愛人の逢合に對して置かれてゐたいろんな障碍のことを話した。愛し合つてゐることをただお互に言ふことができるためだけに、どれほど骨を折り策略を練つたことであらう。

「おぼえてゐるかい。」伯爵がつづけた。「僕たちの主君が叔父君をご訪問になつて大きな城でお會ひになつたとき、僕が君に友情と無我の氣持からどんな冒險の助けをしたかを。日中は儀式ばつたことですみ、夜の一部は少くとも自由な愛情にみちた話で過ごされる筈だつたね。」

「女官達の宿舎へ行く道はあなたがよく氣づかれましたね。」エドアルトは答へた。「僕たちは運よく僕の愛人の許へ着けたんでした。」

「あの方は、」伯爵はつづけた。「僕の滿足より禮儀をお考へになり、醜い侍女を側にひきとめてらしたので、君たちは眼や言葉でたのしく話し合つてたのに、僕は全く面白くない鏡をひきあてたつけね。」

「昨日もお知らせをうけたとき、妻とあの話を、殊に歸り道のことを思ひ出してたんですよ。」エドアルトが答へた。「道を間違へて近衛兵の控室に出たんでしたね。そこからは道がよく分つてゐると思つてたものだから、ここも全く躊躇なく通つて、歩哨兵やその他の場所も通りぬけられると信じてゐたのでした。ところが、戸を開けてみて、どんなに驚いたことでせう。道は蒲團を敷きつめてあつて、その上に幾列にも巨人たちがからだを伸ばして眠つてゐるといふ始末でした。一人歩哨に立つて覺めてた奴が驚いて見たけれど、若い勇氣と横着さで僕たちは全く平氣で伸びた長靴の上を越えて行きましたね。鼾(いびき)をかいてたこのアナク(6)の子供たちがまた一人も眼を覺まさなかつたことでした。」

「僕は躓いてみたくてならなかつたよ。」伯爵は言つた。「大騒ぎになるだらうと思つてね。きつと珍妙な復活の光景が見られたことだらうからね。」

この瞬間、館の鐘が十二時を打つた。

「眞夜中だ。」伯爵は微笑みながら言つた。「丁度よい時刻だ。男爵、あなたの御厚意をお願ひしなくてはならないが、あのとき僕があなたを案内したやうに、けふは僕を案内してくれないかね。僕は男爵夫人にあとで訪ねて行くと約束しといたんだ。一日中二人きりでは話せなかつたし、ながく會はないでもゐたんだから、打ちとけるひまがほしいのも極めて自然なことだよ。行きだけ教へてもらへば、歸りは自分でわかるだらう。何れにしても、長靴に躓いたりはしないですむだらうよ。」

「よろこんでそのおもてなしはいたしますよ。」エドアルトは答へた。「ただご婦人たちは三人一緒に向ふの翼にゐますのでね。まだ別れてゐないかも知れませんし、なにか變に見えるやうなことを惹起さないともかぎりませんからね。」

「その心配はいりませんよ。」伯爵は言つた。「男爵夫人は僕を待つてゐるんです。この時刻には確かに自分の部屋に一人でゐる筈です。」

「そんなら譯ありません。」エドアルトは答へて、燈火を手にし、ながい廊下に導く祕密の階段を先に立つて伯爵を照らしながら降りて行つた。その行止りでエドアルトは小さな戸を開いた。かれらは螺旋階段を上つた。うへの狹い中繼段で、エドアルトは燈火を伯爵の手に渡して右側の壁紙張の戸を指した。それは最初のノックですぐ開いて、伯爵をうけ入れ、エドアルトを暗い空間に殘した。

左側のも一つの戸はシャルロッテの寢室に通じてゐた。かれは話聲を聞いて耳をそばだてた。シャルロッテが小間使に話してゐた。「オティリエさんはもうお寢み？」「いゝえ。」小間使は答へた。「まだ下で坐つて書き物をしていらつしやいます。」「では、夜燈を點けてちやうだい。」シャルロッテは言つた。「そして、すぐお退り。もう晩いからね。蠟燭は私が自分で消して勝手にやすみます。」

エドアルトは有頂天になつて、オティリエがまだ書いてゐることを聞いた。かの女は僕のために働いてくれてるんだ！　かれは勝ち誇つて考へた。闇のために全く自分自身に閉ぢこめられて、かれはかの女が腰掛けて書いてゐるのを見た。かれはかの女に歩み寄り、かの女が自分のはうを振向くのを見たやうに思つた。かれは、もいちどかの女の近くにゐたいといふ打克ちがたい慾望を感じた。此處からはしかし、かの女の住んでゐる中二階へ行く道はなかつた。いま、かれは妻の部屋の戸のすぐ傍にゐるのだつた。一つの變な錯誤[7]がかれの心に起つた。かれは戸を捩ぢ開けようとして、締つてゐるのを知つた。かれは低く叩いた。シャルロッテには聞えなかつた。

かの女は少し大きい隣室をはげしく行つたり來たりしてゐた。かの女は伯爵のあの思ひがけない提議をきいて以來ひとりで十分にひねくり返してみたことを幾度も幾度も繰返した。大尉がかの女の前に立つてゐるやうであつた。まだ家中はかれで一杯であり、かれはまだ散歩に活

氣をあたへてゐた。それなのに、かれは去らねばならないのであり、すべては空しくならねばならなかつた！　かの女は人が自分に言ひきかせうるやうなことはすべて言つてみた。人がよくするやうに、かういふ苦痛も時間によつて和げられるものだといふ苦しい慰めさへ豫め考へた。かの女は苦痛を和げるに必要な時間を呪つた。苦痛が和げられてしまつた死んだやうな時間を呪つた。

ついに、涙への逃亡が、かの女には滅多にないことだつただけに餘計うれしかつた。かの女はソファに身を投げ、すつかり苦痛に身を委せた。エドアルトはエドアルトで戸から離れることはできなかつた。かれはもいちど叩いてみた。そして三度目に少しつよく叩いた。すると、シャルロッテは夜の靜けさにはつきりとそれを聞き取り、驚いて起ち上つた。最初の考へは、大尉かも知れない、大尉にちがひない、といふのだつた。次には、そんなことはあり得ない、といふ考へだつた。かの女は氣の迷ひだと思つた。しかし、かの女は聞いたのだ。聞いたことを願ひ、また恐れた。かの女は寢室に行つて、錠をかけた壁紙張りの戸にそつと歩み寄つた。かの女は恐怖を叱つた。伯爵夫人[8]がなにか欲しいのかも知れないではないか！　かの女は自分自身にさう言ひきかせ、落着いて冷靜に呼びかけた。「どなたですの？」低い聲が答へた。「僕だよ。」「どなた？」シャルロッテは聲の見分けがつかずに答へた。かの女には大尉の妻が戸の前に立つてゐた。まへより少し高い聲がかの女の方に響いた。「エドアルトだよ。」かの女は開けた。

良人が前に立つてゐた。かれはかの女に冗談で挨拶をした。かの女はその調子を引繼ぐことができるやうになつてゐた。かれは謎のやうな訪問を謎のやうな説明に纏れさせた。「一體何故來たかを白狀しなくちやならないね。」かれはついに言つた。「僕はこん夜君の靴に接吻する誓ひを立てたんだよ。」

「もうながいこと思ひ附かなかつたことね。」シャルロッテは言つた。「餘計わるい。」エドアルトは言つた。「でも、益々結構だ。」

かの女は薄い寢衣をかれの眼からはなすために安樂椅子に腰掛けてゐた。かれはかの女の前に身を投げた。かの女はかれがかの女の靴に接吻しないやうに、又、靴がかれの手に殘つたとき、かれが足をつかんでやさしく胸におしつけるのを防ぐことはできなかつた。

シャルロッテは生れつきほどよいたちで、結婚生活でもわざと努めたりせずに戀人のやうな仕方をつづける女性の一人であつた。決して夫を刺激したり、又その慾望を迎へたりも殆んどしなかつた。が、冷さや突放すやうなきびしさはなく、いつも、許された人の前でも心から羞ぢらふ愛情にみちた花嫁に等しかつた。この夜、エドアルトは二重の意味でそんな風なかの女を見たのだつた。どんなにかの女は夫をとほざけたいと思つたことであらう。大尉の幻影がかの女を非難するやうに思へたのである。が、エドアルトをとほざけるはずであつたものが益々かれを惹き附けてしまつた。かの女には一種の動亂が明らかに見られた。かの女は泣いた。が、

柔弱な人はそのため概ね優美さを失ふものであるが、平生氣强く落着いてみえる人はこのため非常に優美さを增すものである。エドアルトは實に愛すべく、やさしく、切なげであつた。かれはかの女に傍に居らせるやうにねがつた。かれは要求はしなかつた。あるときは眞面目に、又あるときは巫山戲てかの女を說得しようとした。かれは權利を持つてゐることは考へなかつた。そして、ついに勝手に蠟燭を消した。

ランプの薄闇のなかで、すぐ內心の愛著と想像力が現實に對して權利を主張した。エドアルトはただオティリエを腕に抱いてゐた。シャルロッテのこころには近く又遠く大尉が漂うた。かうして、不思議にも居ないものと現在するものとが魅惑的に歡樂にみちて織り交つた。

が、現在はその巨大な權利を奪はれることはない。かれらは夜の一部をさまざまな話や冗談で過した。悲しいことに心がそれにあづからなかつたために餘計悉なものであつた。が、エドアルトが翌朝妻の胸に眼覺めたとき、その日は豫感にみちてかれを覗き込むやうに思はれた。太陽はかれの犯罪を照らすやうであつた。かれはそつとかの女の側から滑り出た。かの女は眼覺めたとき、珍らしく、ひとりであつた。

第十二章

皆の者が朝食にまた集つたとき、注意深い觀察者ならば各人の擧動にその內心の氣持や感情の差異をよみ取ることができたであらう。伯爵と男爵夫人は別離に耐へたあとでお互の愛情をまた確かめえた戀人同士の持つ朗らかな快適さで出會つた。これに反して、シャルロッテとエドアルトは言はば恥ぢ入り後悔しながら大尉とオティリエに向つた。愛はおのれのみが正しいやうに思ひ、他のすべての權利はその前には消え失せるものだからである。オティリエは子供のやうに朗らかであつた。その樣子からあけすけと言つてもいゝくらゐであつた。大尉は眞面目に見えた。伯爵との話で、暫く休息して眠つてゐたすべてを搔き立てられ、此處ではまつたく自分の使命を果すことなく結局ただ半働きの安逸をむさぼるだけであることをあまりにも感じてゐたのである。二人の客がまだ遠くへ行かぬうちにもうまた新しい客が着いた。自分自身から拔け出て氣を紛らさうと思つてゐたシャルロッテには歡迎された。が、オティリエの相手をしたいといふ倍加した願ひを抱いてゐたエドアルトには迷惑であつた。明朝必要な淸書をまだ仕上げてゐないオティリエにも同樣迷惑であつた。そこで、かの女は、客が遲くなつて歸るとすぐ部屋に急いだ。

夕方になつた。客が馬車に乘るまで少し歩いておともをして行つたエドアルトとシャルロッテに大尉は沼のはうへも少し散歩することに一致した。エドアルトがかなりの金をかけて遠方に注文してゐた小舟が着いてゐた。それが容易く操縱されるかどうかを試さうといふのだつた。

小舟は中央の沼の岸に、すでに未來の設計で計算に入れてある二三本の槲の老樹に遠からぬところに繫がれてゐた。此處に上陸場を設け、樹の下に湖を渡る人々が漕ぎ寄せるやうな建築學的な休息椅子をつくることになつてゐた。

「一體、向岸にはどこに上陸場を置いたらいちばんいゝだらうかね。」エドアルトが訊いた。

「僕の植ゑたプラターヌのあたりはどうかと思ふがね。」

「少し右に寄り過ぎてるよ。」大尉は言つた。「もつと下に上陸すれば館にも近いわけだ。だが、よく考へなくてはいけない。」

大尉はもう小舟の尾端に立つて、櫂をつかんでゐた。シャルロッテが乘り込んだ。エドアルトも乘り、も一つの櫂をつかんだ。が、まさに舟を突離さうとしたとき、かれはオティリエのことを、舟遊びで遲れて、いつ歸れるかわからないことを考へた。かれは咄嗟に決心して、また陸地にとび上り、大尉にも一つの櫂を渡して、ちよつと言譯をして家へ急いだ。

家でかれはオティリエが閉籠つて書いてゐることを聞知つた。かの女が自分のために仕事をして與れてゐるといふ快い氣持にもかかはらず、かれはいまかの女に會へないといふはげしい

不快を感じた。かれの短氣は一瞬毎に增した。かれは大きな廣間を行つたり來たりして、いろんなことをやつてみたが何も注意を引き止めうるものはなかつた。かれはかの女に會ひたい、シャルロッテが大尉と歸つて來ないうちにひとりで會ひたいと思つた。夜になつた。蠟燭が點された。

漸くかの女が、愛らしさに輝いて入つて來た。友だちのために仕事をしたといふ感情がその全身を自己以上に高めてゐた。かの女は原本と書寫しとをエドアルトの前に卓子の上に置いた。「讀み合せを致しませうか?」 かの女は微笑んで言つた。エドアルトは何と答へていゝか分らなかつた。かれはかの女を見た。その寫しをしらべて見た。最初の幾枚かは非常に丹念に、やさしい女らしい筆蹟で書いてあつた。それから筆が變つてゐるやうに、輕やかに伸び伸びとなつてゐるやうに見えた。が、終りの方の頁に眼を走らせたとき、かれはどんなに驚いたことであらう。「おや!」かれは叫んだ。「これはどうしたんだ? 僕の筆蹟ぢやないか!」かれはオティリエを見て、また紙の上を見た。とくに最後は全くかれ自身で書いたかのやうであつた。オティリエは默つてゐた。が、この上ない滿足をこめてかれの眼を見てゐた。エドアルトは兩腕を差上げた。「あなたは僕を愛してゐるんだ!」かれは叫んだ。「オティリエ、あなたは僕を愛してゐるんだ!」かれらは互に抱き合つた。どちらが先に相手をつかんだか誰にも見分けがつかなかつたであらう。

この瞬間からエドアルトにとつて世界は一變した。かれはもはや以前のかれではなかつた。世界は以前の世界ではなかつた。かれらはお互に向ひ合つて立ち、かれはかの女の兩手をとり、また抱き合はうとお互の眼を見あつた。

シャルロッテが大尉と一緒に入つて來た。長く外にゐた言譯に對してエドアルトは祕かに微笑んでゐた。おゝ、君たちはあんまりはやく來すぎた! かれは自分自身に言つた。

かれらは夕食の席についた。けふの訪問の人たちが批判された。エドアルトは愛に溢れ、昂奮して、誰のことも、絕えずいたはり、又折々は肯定しながら、よく言つた。かれと同意見でばかりはなかつたシャルロッテはこの氣分に氣がついて、いつもは別れた客のことをひどく酷評するくせに今日ばかりはばかに穩やかで寬大なのをからかつた。

熱情と心からの確信をこめてエドアルトは叫んだ。「唯一人の人を本當に根柢から愛さねばならないんだ。さうすれば他の人たちも皆愛すべきものに見えてくるんだ!」オティリエは眼を伏せた。シャルロッテはぼんやり前を見てゐた。

大尉はその言葉を受取つて言つた。「尊敬や敬意の感情もしかし似たやうなものだね。あるいつの對象にそんな氣持を抱く機會があつたときはじめて世の中の尊ぶ價値のあるものを知るんだ。」

シャルロッテは間もなく寢室に行かうとした。こん夜大尉との間に起つたことの思ひ出に耽り

たいのだつた。——

エドアルトが岸にとび上つて小舟を陸地から突離し、妻と友人を搖らめく水に委せたとき、シャルロッテはいまや、そのためにあれほど祕かに思ひ惱んだ男が薄闇の中で前に坐り、二本の櫂を操つて氣儘な方向に漕いで行くのを見た。かの女は深い、滅多に感じない悲しみを覺えた。小舟の旋回、櫂の水音、水鏡のうへを戰きわたる微風、蘆のそよぎ、小鳥の最後の飛翔、最初の星々のまたたきやまたたき返し、すべてがこの漠とした靜けさの中で妖怪じみて見えた。かの女には、友だちが自分をとほくへ運んで捨て、ひとりぼつちにするやうな氣がした。不思議な感動が身内に起つた。が、かの女は泣くことはできなかつた。

大尉はその間にかの女に、自分の目論見通りにやればどんな設計になるかを話してきかせてゐた。かれは二本の櫂で簡單に一人で操ることのできるこの小舟の性能のよさをほめた。あなたも自分でお習ひになるといゝ。ときどき獨りで水の上を漂うて自分で漕手にも舵手にもなるのは氣持のよいものですよ。

この言葉をきいて、目前に迫つてゐる別離がシャルロッテの胸を打つた。わざとさう言つてゐるのかしら？　かの女は獨りで考へた。もうあのことを知つてゐるのかしら？　推測してゐるのかしら？　それとも、偶然にさう言つて、無意識に私の運命を豫言してゐるのか知ら？　大きな悲哀と焦慮がかの女をとらへた。かの女はかれに、できるだけはやく上陸して館に歸るや

うに願つた。

大尉が沼を漕いたのはこれがはじめてであつた。大體はその深さを調べてはゐたが、細かな部分はまだ知らなかつた。もう暗くなりはじめた。かれは進路を、上陸に好都合と思ひ又館へ歩いて行く道にも遠くないと知つてゐた方向へむけた。が、シャルロッテが一種の氣づかはしさではやく上陸したいといふ希望を繰返したので、かれはこのコースからも少し外れてしまつた。かれは努力を新にして岸に近附いた。が、殘念にも岸から少し離れた所で動けなくなつてしまつた。坐礁したのであつた。引放さうとしても無駄であつた。どうしたらいゝのか？もう十分淺い水中に降りて、女友だちを陸地に運ぶほかなかつた。幸ひにかれは力が強く、搖れたり少しも不安がらせたりしないで、この可愛いゝ荷物を渡すことができた。が、かの女は不安さうにかれの頸に兩腕を卷きつけてゐた。かれはかたくかの女を抱き、身におしつけた。芝生の傾斜地にやつとかの女を下したのだが、動搖や混亂がないではなかつた。かの女はまだかれの頸につかまつたまゝであつた。かれは新にかの女を兩腕に抱き、はげしい接吻をかの女の唇におしつけた。が、瞬間、かれはかの女の足もとに膝まづき、口をその手におしあてて叫んだ。「シャルロッテさん、お許し下さるでせうか？」

友だちが敢てし、かの女もまたほとんど返さうとした接吻がシャルロッテを我にかへらせた。かの女はかれの手を握つたが、かれを起さうとはしなかつた。が、かれのはうに身を屈め、片

手をかれの肩にのせて、叫んだ。「この瞬間が私たちの生涯に一つの時期を劃することは止めやうがありません。が、それが私たちに値するかは私たち次第です。ねえ、あなたは別れて行かねばならないのです。また、別れてお行きになるでせう。伯爵があなたの運命をよくしようと手配をなさつていらつしやいます。私にはうれしくもあり悲しいことです。はつきりきまるまでは默つてゐたいと思つてゐました。が、いま、この祕密を打明けずにはゐられないのです。私たちの氣持を變へることは私たちではどうにもなりませんから、私たちの境遇を變へる勇氣があれば、そのときは私もあなたを、又自分を許すことができます。」かの女はかれを起してその腕をつかんで身を支へた。かうして、かれらは默つて館に歸つた。

が、いま、かの女は、エドアルトの妻として自分を感じ又見なければならない寢室に立つてゐた。この矛盾の中でもかの女のすぐれた、生涯を通じていろいろに鍛へられた性格は役に立つた。つねに自己を意識し抑へることに慣れ、かの女はいまもまた、眞面目な反省によつて、願はしい心の均衡に近づくことは困難でなかつた。それに、かの女は、あの不思議な夜の訪問を思ひ出しながら、自分に微笑まずにはをれなかつた。が、すぐにある不思議な豫感が、うれしく不安な戰慄がかの女をとらへて、それはまたかなはぬ希望となつて消えた。かの女は感動して膝まづき、聖壇の前でエドアルトにした誓ひを繰返した。友情、愛著、諦めが明るい姿でかの女の前を過ぎて行つた。かの女は心が回復するのを感じた。やがて、甘い疲れがかの女を

とらへ、かの女は靜かに眠つた。

第十三章

エドアルトのはうでは全くちがつた氣分でゐた。かれは殆んど眠らうなどとは考へず、着物を脱ぐことも思ひつかなかつた。書類の書寫しを、オティリエの子供らしい内氣な筆蹟の初めのはうをかれは千度も接吻した。終りのはうは彼は殆んど接吻する勇氣がなかつた。自分の筆蹟を見るやうな氣がしたのである。あゝ、これが他の書類だつたらなあ！　かれは祕かに獨言ちた。が、また、それは自分の最上の望みがみたされた最も美しい確證である。たとへ第三者の署名で汚されるにしても、それはかれの手にのこるものであり、かれはたえず胸に抱きしめないことがあらうか。

虧けた月が森の上にあらはれた。溫い夜がエドアルトを戸外に誘うた。かれはあたりをぶらつき廻り、すべての人間のうちで最も落着かず、幸福な存在であつた。かれは庭園をさまよつたが、それはかれには狹過ぎるやうに思はれ、急いで野に出たが、そこはまた廣過ぎた。館に引き戻され、かれはオティリエの窓の下に來た。そこで、かれはテラスの階段に腰掛けた。壁や錠はいま自分たちを隔ててはゐるが、お互の心は隔てられてはゐない。かれは獨言ちた。もしかの女が自分の前に立つたら、この兩腕に倒れかかるだらうし、自分もまたさうだ。この確

かさ以上に何が要らう！　まはりは全て靜かであつた。風ひとつ動かなかつた。實に靜かで、日も夜も區別のない勤勉な動物が地下で土を掘るのが聞えるくらゐであつた。かれはすつかり自分の幸福な夢に耽り、ついに眠り込んだ。そして太陽が華やかに昇り、曉の霧を消してしまふまで眼を覺まさなかつた。

自分の領地内で一番先きに眼を覺ましたのはかれであつた。勞働者たちの來かたが遲過ぎるやうに思はれた。かれらはやつて來た。が、人數が少なすぎるやうに、定められた一日分の仕事がかれの希望に比すれば少なすぎるやうに思へた。かれは多數の勞働者を求めた。約束ができ、その日のうちに差配された。が、それでもかれの計畫を速かに實行するには十分でなかつた。仕事はもう悦びではなかつた。もう一切が出來上つてゐねばならなかつた。誰のために？　道はオティリエが樂に歩めるやうに切り開かれ、腰掛はオティリエが休めるやうに卽座にもうでき上らねばならなかつた。新しい家でもかれは全力をつくした。オティリエの誕生日には建てねばならなかつた。エドアルトの氣持にも行爲にももう限度がなかつた。愛し愛されてゐるといふ意識がかれを無限に驅り立てた。あらゆる部屋と周圍の光景が何と變つたことであらう。かれはもう自分の家にはゐなかつた。オティリエの存在がすべてを呑みつくしてゐた。かれは全くかの女に沒入し、他の考へはあらはれず、いかなる良心も話しかけなかつた。その本性の束縛されてゐたものは爆發し、全身がオティリエに向つて流れた。

大尉はこの情熱的な行動に氣がついて、悲しむべき結果を豫防したいと思つた。いま一方的な營みで過度に進捗されてゐるこれ等の設計はすべて安らかに仲のよい共同生活を目標につくつたものであつた。分農場の賣却はかれによつて成立し、最初の支拂は濟み、約束通りシャルロッテがその金庫に收めた。が、かの女は最初の週にすぐに今まで以上に眞劍と忍耐と秩序をまもり、又それを監視せねばならないのだつた。急ぎすぎたやりかたのために豫定のものでは足りなかつたからである。

澤山のことが始められ、なすべきことも多かつた。どうして大尉はシャルロッテをこの狀態に放つておけやう！　かれらは相談し、計畫通りの仕事をむしろ促進し、その目的のために金を借入れ、その支拂には分農場賣却の殘りの賦金を當てることに一致した。それは殆んど損失なしに權利の讓渡によつて爲された。活動は自由になり、萬事が進行し勞働者も十分にあつたので一度に澤山のことができるやうになり、確實迅速に目的に達した。エドアルトは自分の意圖と一致したので喜んで同意した。

內心ではしかし、シャルロッテは自分が考へ決めたことに固執してゐた。大尉が男らしく同じ氣持でかの女を助けた。が、丁度このために二人の親密を增すばかりであつた。かれらはお互にエドアルトの情熱を說明し合ひ、そのことで相談をした。シャルロッテはオティリエを一層身に引きつけるやうにし、今までよりきびしく觀察した。かの女は自分の心を知れば知るほど、この娘の心にも深く見拔いた。そして、この娘を遠ざける以外に救ひやうはないのを知るのだつた。

ところで、ルチアネが私塾で圖拔けた稱讚を博したことはかの女には幸福な攝理に思へた。そのことを知つた大叔母さんが是非かの女を引取つて、身のまはりに置き、世間へも出したいと思つたからである。さうなるとオティリエは私塾に歸ることが出來、大尉は高給で去り、すべては二三ケ月前と同樣の、否、益々よい狀態になるであらう。エドアルトに對するかの女自身の關係をシャルロッテはすぐ元通りにしたいと思つた。かの女はこのすべてを當然のものにひとりで解釋したので、以前の抑制された狀態にかへることが出來、むりに結び目を解かれたものもまた緊密な狀態に戻されるといふ妄想を益々强くした。

エドアルトは自分の前途に置かれたこの障碍を非常に高く感じた。かれは間もなく、自分とオティリエが引きはなされ、かの女に二人きりで話したり、大勢のゐるところ以外では近づくことさへも難しくされるのに氣づいた。このことを怒るとともに、かれはその他のいろんなことにも腹を立てた。ちよつとでもオティリエに話すことができると、かれはかの女に自分の愛を保證するだけでなく、自分の妻や大尉への不平を訴へた。かれは、自分のはげしい督促によつて自分が金庫を消耗させようとしてゐることを感ぜず、シャルロッテと大尉とを、最初の申合せに反した仕事をするといつて嚴しく非難した。その實、かれは第二の申合せを承認してゐた

のであつて、否、むしろ自分でその動機をつくり餘儀なくさせてゐたのであつた。

憎惡は黨派的であるが、愛はさらにさうである。オティリエもまた幾分シャルロッテと大尉から遠ざかつた。エドアルトがあるときオティリエに大尉のことを、友人としてあんな境遇にありながらあまり正直な行動をしないといつて訴へたとき、オティリエは輕率にも答へた。「あの方があなたにあまり正直でないのはとつくに私いやに思つてゐましたわ。いつかシャルロッテさんに、エドアルト君があの下手な笛さへ勘辨してくれるといゝがね、あんなことは何にもならないし、聽く方にとつては實に厄介だ、と言つてらしたのを聞きましたわ。あなたの伴奏をするのが好きな私にはどんなに悲しかつたかお分りになりますわね。」

さう言ひ終らぬうちに、かの女は、默つてゐればよかつたのにといふ心の囁きを受けた。が、もう言つてしまつたことであつた。エドアルトの顏附は一變した。これほどかれを怒らしたものはなかつた。かれはその最も愛好する要求を攻擊されたのだ。かれは少しも傲慢な氣持はなく無邪氣な努力として認めてゐたことであつた。かれを娛しませ、悅ばせるものは友人たちにもいたはつてもらはねばならなかつた。かれは下手な藝で耳を害されることが第三者にとつてどんなにひどいことであるかを考へなかつた。かれは侮辱され、再び許すことが出來ないほど怒つた。そして、あらゆる義務から解放されたのを感じた。

オティリエと一緒にゐ、かの女に會ひ、なにか囁きかけ、打明け話をせずに居れない氣持が

日とともに增大した。かれは內證の手紙の交換をもとめてかの女に手紙を書かうと決心した。そのことを十分簡潔に書いた一片の紙が机の上にのつてゐたが、從僕が髮を縮らすために入つて來たとき隙間風に下に落された。いつものやうに鏝の熱を試すために、從僕はこの紙片の方へ身を屈めた。そして手紙を掴んで急いで鏝に挾んだので、それは焦げてしまつた。エドアルトはこの失策に氣がついて、從僕の手から手紙を引つたくつた。そのあとで直ぐ、かれはもいちど手紙を書かうと机に向つた。が、二度目にはすつかり前の通りに墨ペンから出て來なかつた。かれは少し疑惑と心配とを感じた。が、かれはそれを克服した。手紙はオティリエの手に、近づくことのできた最初の瞬間に握らされた。

オティリエは返事を書くことを忘らなかつた。讀まないうちに、かれは紙片をチョッキにさし込んだ。チョッキは流行型で短かつたので十分入れておくことができなかつた。手紙はずれて、かれの氣づかないうちに床に落ちた。シャルロッテがそれを見て、拾ひ上げ、ちよつと一瞥してかれに渡した。「あなたのお書きになつたものが落ちてますわ。」かの女は言つた。「たぶんお失くしになつてはいけないんでせう?」

かれはあわてた。知らぬふりをしてゐるのかしら? かれは考へた。紙片の內容を見たのかな、それとも、筆蹟が似てゐるので間違へたのかな? かれは後のはうをのぞみ、又、さうだと考へた。かれは警告され、二重にも警告されたのだつた。が、神がわれわれと話すやうに思

はれるこの妙な偶然の兆もかれの情熱には理解されなかつた。むしろ、情熱はいよいよかれを引きずつて行くばかりで、自分を阻むやうに思へる束縛を益ゝ不快に感じた。親しい集ひも失くなつた。かれのこころは閉され、友人や妻と一緒にゐねばならないときも、以前の友情を再び胸に見出し蘇らせることはできなかつた。このために自分自身に加へねばならぬ祕かな非難がいやで、かれは一種のユーモアで自分を助けようとしたが、愛がない故にいつもの優雅さに缺けてゐた。

このすべての試煉にシャルロッテをその内的感情が助けた。かの女は、これほどに美しい氣高い愛情を諦めようといふ嚴肅な意圖を意識してゐた。

どんなにかの女は、あの二人の者をもたすけたいと思つたことであらう。かういふ禍をのぞくには遠ざけることだけでは十分でないことをよく知つてゐた。かの女はあの善良な娘にこのことを話し出さうかと思つた。が、出來なかつた。自分自身の心の動搖を思ひ出して、阻まれたのである。かの女はまた一般的な言ひ方をしようかと思つたが、その一般的なものは口に出すのを恐れてゐるかの女自身の狀態にも通用した。かの女がオティリエにしようとするほのめかしはすべてかの女自身の心を指し返した。かの女は警告しようとして、自分自身も警告が必要らしいのを感じた。

だまつて、かの女は戀人たちを引きはなしつづけた。が、それで物事はよくはならなかつた。

ときどき、かの女から洩れるかすかな暗示もオティリエには作用しなかつた。エドアルトがかの女に大尉へのシャルロッテの愛情を說ききかせ、自分がいま正しい方法で行はうと考へてゐる離婚をシャルロッテ自身も望んでゐると信じ込ませてゐたからである。

オティリエは自分の無垢を意識するまま、最も願はしい幸福への途上で、ただエドアルトのためにのみ生きた。かれへの愛によつてすべての善い事は强められ、かれゆゑに爲すことが一層たのしく、他人へは心が開け、かの女は地上の天國にある思ひであつた。

かうして皆の者がめいめい日々の生活を一緒につづけ、內省するものもあり、しないものもあつた。一切はいつものとほり進んでゐるやうに見えた。すべてが危機に瀕してゐる非常の場合にも、何の問題もないかの如く人は生きて行くものであるやうに。

第十四章

その間に、伯爵からは大尉に手紙が着いた。しかも、二重の手紙であつた。一通は人にも見せるためのもので、遠い將來へのすばらしい見込を示してゐた。もう一通は、現在への決定的な申出を、重大な宮廷の事務の地位や、少佐の資格や、可成りな俸給やその他の有利な條件を書いたものであつたが、これはいろんな周圍の事情からまだ祕密にすることになつてゐた。大尉もまた友人たちには前者の見込のことだけ話して、眼前に迫つてゐることは隱しておいた。

が、かれは現在の仕事を元氣につづけ、祕かに、自分が居なくなつても萬事すむうすにはこぶやうに準備をしてゐた。で、かれにはいろいろなことに期限を定めることや、オティリエの誕生日のために多くのことをはやめることが大切であつた。いまや二人の友人ははつきりと諒解を示しはしなかつたものの、喜んで一緒に仕事をした。エドアルトは金を豫め調達して金庫を强化したことが大へん滿足であつた。すべての施設が急激に進捗した。

三つの沼を一つの湖に變へることは大尉がいま最も止めさせたいことであつた。下手の堤防を强化し、中央のを取除かねばならず、その事全體は一つならぬ意味で重大でもあり危險でもあつた。兩方の仕事はしかし、相互に作用し合ふことができるので、すでに始められてゐた。

この場合、非常に好都合にも大尉の以前の教子である若い建築家がやつて來た。かれは堪能な親方を任命したり、さうしてよい處では仕事を請負はしたりして、仕事を促進し、工事に確實さと持續とを約束した。大尉は自分がゐなくてもよくなつたのを祕かに喜んだ。かれは自分の地位が十分補充されるまでは、引きうけた未完成の仕事から手をひかないといふ主義だつたのである。自分の去ることを感づかせるために、無教養な利己主義者らしく自分がもうやらない筈の仕事をぶちこはさうと思つて、周圍に混亂をさへ捲き起すやうな人々をかれは非常に輕蔑してゐたのであつた。

かうして益々努力をして、オティリエの誕生日をすばらしくするために仕事が進められた。が、そのことを口に出したり、正直に白狀したりするものはなかつた。嫉んだりしたわけではなかつたがシャルロッテの考へによれば、決定的なお祭のやうなものはする譯にいかなかつた。オティリエの若さ、その幸福の事情、家族への關係が、一日の女王としてかの女が現はれることを正當としなかつたのである。エドアルトもそんなことを言つた覺えはないと言つてゐた。すべてはひとりでに發生し、人を驚かし、自然に喜ばせねばならなかつたのである。

だから、皆の者は暗默のうちに、その日になにも特別の關係はなくて例の園亭を建てるんだといふ口實に同意した。その際、村人達や友人たちにお祭を告げることができた。

エドアルトの愛著はしかし無限であつた。オティリエを自分のものにしたいと望んで、獻身

や贈與や約束に限度を知らなかつた。その日かれがオティリエにしたいと思つた二三の贈物に對して、シャルロッテがあまりにみすぼらしい提案をした。そこで、かれは自分の衣裳の世話をし商人や小間物商人などと絶えず交渉をもつてゐる從僕に相談した。この男は又となく好ましい贈物やそれを渡す最善の方法を知らないではなかつたので、すぐに都會に非常に綺麗な鞄を注文した。赤い山羊皮張りで、鋼の鋲を打ち、そんな容器に價するやうな贈物を一杯つめたものであつた。

も一つこの從僕はエドアルトに提案した。いつも點火するのを忘つてきた小さな花火があつたのである。これを強く大きくするのはわけなかつた。エドアルトはこの考へを採用し、從僕はその實行の心配をする約束をした。このことはまた祕密にすることになつた。

大尉はこの間に、その日が近づくにつれ、多數の群衆が呼び集められたり誘ひ寄せられたりするとき大に必要な警備の用意をした。又、お祭の優雅さがこはされる物乞やその他の不愉快なことに對して徹底的な豫防策を講じさへもした。

エドアルトとその腹心の從僕はこれに反して、主に花火のことで忙しかつた。中央の沼の例の大きな樹の林の前で點火することにした。對岸のプラターヌの下に見物の人々を置いて、適當な距離からその發火や、水面への反映や、水の上を燃えながら泳ぐやうに定められてゐるものを確實に氣樂に眺めさせるはずであつた。

他の口實でエドアルトはプラターヌの下の藪や草や苔を拂はせた。すると、さつぱりなつた地上に樹の生長の美しさがはじめて丈にも幅にもあらはれた。エドアルトはこれを非常によろこんだ。——俺がこれを植ゑたのは大體この季節だつた。あれからどれくらゐになるかな？かれは獨言ちた。——かれは家に歸り着くや否や、父親が殊に田舍で非常に几帳面につけてゐた古い日記をめくつてみた。この植附のことはなるほど述べてなかつたが、エドアルトもまだよく憶えてゐる同じ日の他の家庭的に重大な事件が必ず見つかるはずであつた。かれは二三卷めくつてみた。その事があつた。が、實に不思議な暗合に氣づいたとき、どんなに驚き、又悅んだことであらう。あの植附の日と年は同時にオティリエの誕生の日であり年なのであつた。

第十五章

ついに待焦れた朝がエドアルトに輝いた。澤山の客たちが次第に現れた。遠方まで招待を出してあつたし、大へん綺麗であつたといふ定礎式を見落してゐた人々がそれだけにこの第二のお祭は缺かすまいと思つたのである。

食事前に大工達が音樂につれて、段々に重なつて搖れてゐる澤山の木の葉や花の輪を集めて作つた豐かな花環をかついで館の庭に現はれた。かれらは挨拶を述べ、習慣になつてゐるお飾りのために絹の布や紐を婦人たちから請ひうけた。主人たちが食事をしてゐる間に、かれらは歡聲をあげて行列を進めて行き、村で暫く立止つて女達や娘たちから同樣にいろんな紐を貰ひ受けたあとで、最後に多數の人々に伴はれ又待受けられて建てた家のある丘の上に來た。

シャルロッテは食事のあとで少し皆の者を引止めた。お祭めいた形式的な行列は好まなかつたのである。だから、皆は三々伍々、列も順序もなく氣樂に場所にあらはれた。シャルロッテはオティリエと躊躇してゐた。が、それで事がよくなりはしなかつた。オティリエが出て來た最後の者となつたので、ラッパや太鼓はただかの女を待つてたやうな、お祭はかの女の到來ではじめてすぐ始るかのやうなかたちになつたのである。

建物から粗造な外觀をのぞくために、大尉の指圖で綠の柴や花が建築學的に飾られてゐた。ただ大尉には知らさないで、エドアルトは建築家に軒蛇腹に日附を花でつくらせておいた。それはまだよかつた。が、全く折よく大尉がやつて來て、オティリエの名前まで切妻に輝かせるのは止めさせた。かれは巧みにこのすでに始められてゐたことを拒んで、もう出來上つてゐた花の文字を取りのけさせることができた。

花環が立てられ、遠方まで見えた。紐や布が多彩に飜り、短い演說は大部分風に消えた。式は終り、建物の前の地ならしをして木の葉で緣をとつた場所に舞踏がはじまることになつた。着飾つた職人が一人エドアルトに輕快な百姓娘を連れて來て、傍に立つてゐたオティリエを促した。二組には直ぐつづく者ができ、エドアルトは間もなく相手をかへ、オティリエをつかんで二人で輪舞を踊つた。若い人々は愉しげに群衆の踊にまじり、年寄りたちは眺めてゐた。

やがて、人々が散步にちらぬうちに、日沒とともにまたプラターヌの側に集るやうに申合せができた。エドアルトがまづ第一にあらはれ、萬事を整理したり、從僕と打合せをしたりした。從僕は對岸の花火師の中で花火の世話をしなくてはならなかつた。

大尉は其處にしてある準備を見たが、滿足ではなかつた。見物人が殺到するのを見込んでエドアルトと相談したいと思つたが、エドアルトはこのことは自分獨りにまかせてくれるやうに少し性急に賴んだ。

もう村人達は上部を剝り落して芝生を剝いだ堤防の上に押寄せて來てゐた。そこは土は平らでなく確實でもなかつた。日が沈み、黄昏が來て、もつと暗くなるのを待つて見物人達はブラターヌの下で飲物を供された。人々は此處を比類ないところに思ひ、將來ここから廣い多樣な輪廓をもつ湖をながめる思ひを樂しんでゐた。

靜かな夕べと完全な風は夜のお祭を惠む約束をしてゐた。そのとき、突然恐ろしい叫びが起つた。大きな土の塊が堤防から裂け、數人の人が水中に落ちるのが見えた。殖える一方の群衆が押寄せて踏みつけたので、土が崩れたのであつた。誰も最上の場所をとらうとして、前にも後にももう動けなくなつてゐた。

たれもがとび上つて押しかけたが、何かしようといふより見るためであつた。誰もそこへ行くことが出來ないのにどうすることが出來やう。二三の決心した人とともに大尉が急いで來て、すぐ群衆を堤防から岸へ追ひ下し、沈んでゐる人を引出さうとする救助者が自由に活動できるやうにした。間もなく皆が自分の力や他人のお蔭でまた陸地に上つた。ただ男の兒が一人あまり心配しすぎた努力をしたため堤防に近づくかはりに却つて遠ざかつてしまつた。もう力が拔けるやうに見えた。ただ時々まだ手や足が水上に見えた。不幸にも小舟は向岸にあつて、花火を滿載してあつたために、さつさと荷を下すことが出來なかつた。救助は愚圖ついた。大尉の決心は定つた。かれは上衣を投げ捨てた。すべての眼がかれに向けられ、その强く逞しい姿は

皆の者に信頼の念を起させた。が、かれが水にとび込んだとき、群衆から驚きの叫びが上つた。眼は殘らずかれを追ひ、かれは達者な泳ぎ手らしく子供にすぐ追ひついて、死んでゐるものと思つて堤防に連れて來た。

その間に小舟がやつて來て、大尉はそれに乘り、そこに居る人々にほんとにみんな救はれたかどうかをくはしく訊ねた。外科醫が來て、死んだと思はれた子供を引取つた。シャルロッテは歩み寄つて、大尉に自分の心配をして、館に歸り、着物を換へるやうに願つた。かれは、すぐ近くに居て自分でも救助に從つたしつかりした分別のある人々がみんな救はれたことを誓つて保證するまではためらつた。

シャルロッテはかれが家へ戻るのを見て、葡萄酒やお茶やその他の必要品が錠を掛けてしまつてあるのを思ひ、こんな場合は人はよく逆なことをするのを考へて、かの女もまだブラターヌの下に散らばつてゐる人々を拔けて急いだ。エドアルトは頻りに皆に、留つて居てくれるやうに、間もなく合圖をするつもりだから花火が始まるはずだと說いてゐた。シャルロッテは歩み寄つて、その樂しみを延ばすやうに願つた。いまの場合相應しくないし、そんなもの味つてはゐられないといふのだつた。かの女はかれに救はれた人や救助者にしてやらなくてはならないことを思ひ出させた。「外科醫がちやんと自分の義務をするだらう。」エドアルトは答へた。「すつかり準備はしてゐるし、僕らが押しかけても邪魔になるばかりだらう。」

シャルロッテは自分の考へを固執してオティリエに眼くばせをした。オティリエはすぐ出かけようとした。エドアルトがその手をつかんで叫んだ。「僕たちは今日を病院で終りたくない！ 看護婦にはこの人はよすぎる。僕たちがゐなくても氣絶した者は眼を覺ますし、生きてゐる者はからだを乾かすだらう。」

シャルロッテは默つて去つた。二三の者がかの女につづき、他の者がその人々につづいた。ついに、誰も殿りになりたくないと思ひ、みんながついて行つた。エドアルトとオティリエは二人きりでプラターヌの下にゐた。かれは、オティリエが一緒に館に歸るやうにと不安さうにねがつても、あくまで止つてゐるやうに言ひ張つた。「いゝえ、オティリエ！」かれは叫んだ。「非常のことは平坦な普通の道では起らない。こんな夜の思ひがけない出來事が僕たちを益々はやく結びつける。あなたは僕のものだ！ 僕はもういく度も言つたり誓つたりした。もうこの上は僕たちは言つたり誓つたりしたくはありません。もうさうならなくてはならないんです！」

小舟が對岸からやつて來た。從僕であつた。かれは當惑さうに訊ねた。「花火はもうどういたしませうか。」「あげてくれ！」エドアルトは答へて叫んだ。「オティリエ、これをあなた一人のために用意したんだ。だから、あなた一人で見なくてはいけない！ 僕にもあなたの傍に腰掛けて一緒に見さして下さい。」優しく慎しやかにかれはかの女の傍に腰を下し、かの女に觸れよ

うともしなかつた。

打上花火がしゆうとあがつた。筒の音が轟いた。光の玉が上り、南京花火がうねり、爆發し、輪花火が燃え立ち、はじめ一つ一つだつたのが對になり、みんな一緒になり、益々はげしく綾け樣になつて合體した。エドアルトは胸を燃やしながら、生き生きと滿足さうな眼差でこの花火の光景を追つた。オティリエのやはらかな昂奮したこころにはこの鳴り光る生滅の有樣は快いといふより不安げであつた。かの女はおづおづとエドアルトに凭れ、この接近と信賴はエドアルトに、かの女が全く自分のものだといふ一杯の感情をあたへた。

夜がまたその權別を取戻さぬうちに、はやくも月が昇つて、歸つて行く二人の道を照らした。帽子を手にした一人の男がかれらの道を遮つて、今日のお祭に除け者にされたと言つて旆興をねだつた。月がその顏を照らした。エドアルトはあの押しつけがましい乞食の顏附を認めた。が、かれは大へん幸福であつたので、不機嫌にもならず、又けふはとくに物乞ひは固く禁じられてゐることにも思ひつかなかつた。かれはながくポケットを探さずに、金貨を一枚あたへた。自分の幸福が無限であつたので、誰をも幸福にしたかつたのである。

家ではその間に萬事望み通りに成功してゐた。外科醫の活動や、必要品が皆用意してあつたことや、シャルロッテが加勢したことや、すべてが一緒になつて、子供は再び生命を取戻した。客たちは、遠方から花火をまだ少し見てみたくもあり、又かういふ混亂した光景のあとで落着

いたわが家に歸りたくもあつて散り散りになつてゐた。

大尉もまたすばやく着換へて必要な準備に甲斐甲斐しく手傳つてゐた。すべては靜かになつた。かれはシャルロッテと二人きりになつた。打解けた親しさでかれはいまや、自分の出發が近いことを說明した。かの女はこの夕あまりに澤山の經驗をしてゐたので、この打明け話もあまり印象をあたへなかつた。かの女は友だちが身を犧牲にし、救ひ、又みづから救はれたのを見た。この不思議な事件はかの女にはある重大な、しかし決して不幸ではない未來を豫言するやうに思はれた。

オティリエと一緒に入つて來たエドアルトにも大尉の差迫つた出發は告げられた。かれはシャルロッテは自分より前に詳しく知つてゐるのではないかと怪しんだ。が、自分自身や自分の計畫で夢中で、それを惡くは思はなかつた。

反對にかれは、大尉が任命される筈の良い名譽ある地位を注意深く滿足して聞取つた。かれの祕かな願望は抑制しきれずに實際の出來事より先走つて進んでゐた。かれはもう大尉とシャルロッテ、自分とオティリエが結婚してゐる樣を見た。このお祭にこれより大きな贈物はかれになかつたであらう。

が、オティリエは、自分の部屋に入つて卓子の上に高價な小さな鞄を見出したとき、どんなに驚いたことであらう。かの女は躊躇せずにそれを開いてみた。すべての品物が實に美しく包

裝し整頓してあつたので、かの女は取出すことも、否ほとんど空氣に當てることもよう出來なかつた。モスリンや上等の麻布や絹やシュオルやレースが纖細と優美と高價さを競つてゐた。裝身具も忘れられてはゐなかつた。一度ならずいく度も頭から足までかの女を着飾らせたいといふ志がかの女にはよく分つた。が、みんなあまりに高價で見馴れなかつたので、空想のなかででもそれを自分の物にする勇氣がなかつたほどであつた。

第十六章

翌朝、大尉はゐなくなつてゐた。感謝をこめた手紙が友人たちに殘されてゐた。かれとシャルロッテは前夜すでにほのかに簡單な別れをしてゐた。かの女は永遠の別れを感じたが、それを忍んだ。大尉がついにかの女にみせた伯父の第二の手紙には有利な結婚の見込をも語つてあつたからである。かれはこの點には注意を拂はなかつたが、かの女はそのことをもう確實なものと考へて、綺麗さつぱりとかれを諦めた。

これに反して、かの女はいまや、自分自身に加へた自制力を他人にもまた要求できるものと信じた。かの女には不可能ではなかつた。他人にも可能である筈であつた。この意味でかの女は、是非事件を片づけねばならないと感ずれば感ずるほど、あけすけに確信を以て夫と相談を始めた。

「私共の友だちは私たちを去りました。」かの女は言つた。「私たちはいままた以前のやうに差向ひです。全く昔の狀態に歸るかどうかは恐らく私たち次第でせうね。」

自分の情熱に媚びるやうなこと以外は聞かうとしないエドアルトは、シャルロッテがこの言葉で以前の寡婦の狀態を指し、ぼんやりながら離婚の希望を述べようとしてゐるのだと信じた。

かれはだから微笑みながら答へた。「さうでなくつてさ。ただお互に理解し合ふことが問題だらうね。」

だから、かれはシャルロッテがかう答へたとき、まつたく欺かれたやうな氣がした。「オティリエも他の地位に移すには、今では選びさへすればいゝんですの。あの娘に願はしい境遇にしてやるに二重の機會がございますのよ。私の娘が大叔母さんのもとに引取られましたから、私塾に歸ることもできますし、ある大きな家に引取つてもらつてそこの獨り娘と一緒に身分相應の教育の利益をうけることもできるんですの。」

「でも、」エドアルトはかなり落着いて答へた。「オティリエは僕たちとの親しいつき合ひで甘やかされてるから、他處に行くのはあまりうれしくないだらうよ。」

「私たちはみんな甘やかされてますわ。」シャルロッテは言つた。「あなたも人後に落ちませんわ。でも、もう、正氣に返つて、私たちの小さな世界の全部の者の最善を考へ、何かの犠牲は拒まないやうに嚴肅に警告をうける時期ですわ。」

「少くとも僕は、オティリエが犠牲にされるなんて、正當だとは思はないね。」エドアルトが答へた。「いまあの人を他人のなかへ突落せば結局さうすることになるんだもの。大尉は好運に探し出されたんだ。僕たちも安心して、否快く別れることができるわけだ。だが、オティリエがどうなるか誰も知りやしない。何だつてまたそんなに急がなくちやならないのか

ね？」

「私たちがどうなるかは、かなりはつきしてゐますわ。」シャルロッテは少し激昂して答へた。そして、是非とも自分の氣持を言はうと思つてゐたので、つづけた。「あなたはオティリエを愛していらつしやいます。あの娘に馴染んでいらつしやいます。あの娘のはうでもまた愛著や情熱が生れて育くまれてゐます。どうして、絶えず告白されてゐるものを言葉に出してはいけないのでせう？　これはどうなるだらうと自問するだけの用心をしてはいけないのでせうか？」

「すぐその返事はできないにしても、」と、エドアルトは氣を取直して答へた。「これだけのことは言へると思ふ。ことがどうなるか言へない時こそ、まづ、未來が教へるものを待たうと決心するものだ、とね。」

「この場合豫見するには格別大きな智恵も要りませんわ。」シャルロッテは答へた。「いづれにしても、私たちは二人とも、もう、行きたくない所や行つてはいけない所に盲滅法に行くほど若くはないことだけはたしかですわ。誰ももう私たちの世話はできません。私たちは自分で友だちになり家庭教師にならなくてはなりません。誰も私たちが極端なことに落ち込まうとは思つてゐませんし、非難されるやうな、物笑ひになるやうなことにならうとは豫期してゐないでせうよ。」

「僕がオティリエの幸福を考へてゐるからといつて、僕を惡くとつたり非難したりできるのか

ね。」妻のあけすけではつきりした言葉に答へることが出來ずにエドアルトは言つた。「それも、當てにならない未來の幸福といふわけでなく、現在の幸福なんだ。素直に自分を欺かないで考へてごらん。オティリエを僕たちのあひだから引離して、見知らぬ人の許にやるなんて――僕は少くとも、そんな變化をあの人にもとめるほど殘酷にはなれないね。」

シャルロッテは夫の假裝の背後に、その決心を十分に認めた。いまはじめて、かの女は、どんなにかれが自分から遠ざかつてゐるかを知つた。少し昂奮してかの女は叫んだ。「私たちを引裂いて、私から夫を、子供たちから父親を奪へば、オティリエは幸福になれますとも。」

「僕たちの子供のことなら心配してあると思ふ。」エドアルトは微笑んで冷く言つた。が、少しやさしくつけ加へた。「誰がまたすぐそんな極端なことを考へるんだらう。」

「極端なことは情熱と隣り合せですわ。」シャルロッテは言つた。「まだ間に合ふうちに、よい忠告を斥けないで下さい。私が申出る助言を斥けないで下さい。混濁したときは、最もはつきり見える者が働いてたすけねばなりません。こんどの場合は私がそれです。ねえ、エドアルト、私に委せて下さいな。私のかち得た幸福を、美しい權利を、あなたをそんなにすぐにも諦めろと仰しやることができまして？」

「誰がそんなことを言つてるんだ。」エドアルトは少し當惑して答へた。

「あなたが自分で仰しやつてますわ。」シャルロッテは答へた。「オティリエをそばに引きとめよ

うとしながら、そのために起ることはみんなおみとめになりませんの？　私はあなたのこころに押し入らうとは思ひません。でも、あなたが御自分に打勝つことがおできにならないにしても、少くともいつまでも自分を欺くことはもうおできにならないでせうよ。」

エドアルトはかの女の言ふことが正しいのを感じた。心がながい間あへてしてゐることを突然に發言するときは、一言でも恐ろしいものである。ただその場を避けるために、エドアルトは答へた。「僕にはまだ君のくわだててゐることが少しもはつきりしないんだがね。」

「私はあの二つの申出をあなたとよく考へてみたいと思つてゐますの。」シャルロッテは答へた。

「二つとも大へんいゝところがございます。あの娘のいまの様子を見てゐますと、私塾は大へんオティリエにふさはしいやうです。しかし、あのもつと大きな廣い地位も、あの娘の將來を考へると一層有望に思はれます。」かの女は二つの境遇を夫に詳しく説明して次の言葉で結んだ。「私の考へを申上げれは、いろんな理由から私塾よりあの夫人の家をとりたいと思ひますわ。殊に、あそこで、オティリエに寄せられたあの青年の愛著といふより情熱を增さしたくありませんもの。」

エドアルトは贊成するやうにみえた。が、少し延ばすためにすぎなかつた。なにか決定的なことをしようと考へてゐた。シャルロッテは、エドアルトが直接に反對しなかつたので、すぐその機をつかんで、もうすつかり祕かに用意しておいたオティリエの出發を數日後にきめた。

エドアルトは身震ひした。かれは裏切られたやうな氣がし、妻の愛情のこもつた言葉も永遠に幸福から引離すために巧みに計畫的に考へ拔いたものに思つた。かれは一切を妻に委せるやうに見えた。が、すでに、內心ではそのこころは決つてゐたのであつた。ただ息をつくために、オティリエを遠ざけるといふ目前のはかり知れない不幸を轉ずるために、かれは自分の家を去る決心をしたのであつた。が、シャルロッテに全く氣づかれないではすまなかつた。それをかれは、オティリエの出立のときに居合せたくないのだ。否、もう今後オティリエに會ひたくないのだといふ前置きの文句でごまかすすべを心得てゐた。勝つたものと信じたシャルロッテはいろんな援助を惜しまなかつた。かれは馬を命じ、從僕に、荷作りすべき物や、ついて來いといふことや必要な指圖をあたへ、もう言はば鐙を踏みながら、机に向つて書いた。

エドアルトからシャルロッテへ

愛するシャルロッテ、僕たちを襲つた不幸は救はれるかも知れないし、救はれないものかも知れない。——僕はただかう感ずる。いま絕望すべきでないとすれば、僕のために又僕たち全部のために延期を願はねばならない、と。僕は自分を犧牲にすることによつて、要求をすることが出來る。僕は家を去り、もつと惠まれた安らかな見込がついたときだけ歸るつもりだ。君はその間家を所有すべきだ。しかし、オティリエと一緒にでな

くてはならない。僕はあの人を君の許に置きたい。他の人のもとにやつてはいけない。そしてあの人の世話をし、平素のやうに、いままで通りに扱つてもらひたい。否、益〻愛情をこめて、親切にやさしくしていただきたい。僕はオティリエとは祕密な關係は求めないことを約束する。むしろ、暫く、君たちの暮しを全然知らさないでくれ。僕は最善を想像してゐやう。僕についてもさうお願ひする。ただ、心の底から是非ともお願ひしたいことは、オティリエをどこかへ預けたり、新しい境遇に移したりしないでくれ。君の館と庭園の區域外に、他人に委せたりしたら、そのときはあの人は僕のものだ。僕はあの人を占有する。が、僕の愛著、希望、苦痛を尊敬し、僕の妄想、希望に媚びてくれるなら、恢復があらはれるとき僕はそれに反抗しないつもりだ。——

この最後の言廻しは筆から流れ出たもので、心から出たものではなかつた。實際かれはその文句を紙の上に見たとき、はげしく泣きはじめた。かれはどんなにかしてオティリエを愛するといふ幸福、否、不幸を諦めねばならなかつた。いまはじめて、かれは自分のしたことを感じた。かれはこれがどうなるかを知りもせずに立去るのだつた。少くともいまは再會は許されなかつた。再會できるやうになるかどうか、それもどれほどの確かさを約束できたらう。が、手紙は書いてしまつた。馬は戸の前に立つてゐた。かれはたえず、オティリエをどこかで見かけ、

自分の決心が空しくなるのを怖れねばならなかつた。かれは氣をとり直し、いつでも歸れるのだ、立去ることによつて自分の希望には近づくわけだと考へた。反對に、自分がとどまつてゐて、オティリエが家を逐ひ出されるのを想像した。かれは手紙に封をし、階段を急いで降り、馬にとび乘つた。

旅館の側を行過ぎたとき、かれは昨夜自分が澤山の施與をした乞食が園亭に坐つてゐるのを見た。乞食は氣持よげに晝食に向つてゐたが、立上つて、恭しく、否、拜むやうにエドアルトにお辭儀をした。この姿は、かれが昨夜丁度オティリエの腕をとつて歩いてゐたとき現はれたのだ。いまや、その姿はかれの生涯の最も幸福な時間を思ひ出させた。かれの苦惱は增した。後へ殘して來たものの感情がたへがたかつた。もいちど、かれは乞食を見た。「あゝ、羨しい奴だ！」かれは叫んだ。「お前は昨日の施與でまだ飯を食つてゐるが、俺にはもう昨日の幸福はない！」

第十七章

オティリエは、誰か馬で去る音を聞いたので窓際に歩み寄つた。まだエドアルトの背なかが見えた。かれが自分に會はず、朝の挨拶もせずに家を去るのが不思議に思はれた。かの女は不安になり、シャルロッテが遠い散歩に一緒に連れ出して、いろんなことを話しながら良人のことはわさとのやうに少しも話さなかつたとき、益〻考へ込んでしまつた。だから、歸つてみて、食卓が二人前の食事しか用意してないのを見て二重に胸をつかれた。

つまらなく思はれる習慣でも無くしたがらないものであるが、さういふ缺乏を重大な場合にはじめて苦痛に感じるものである。エドアルト大尉はゐなかつた。シャルロッテは久振りに食卓をはじめて自分で用意した。オティリエには自分が免職でもされたかのやうに思へた。二人の婦人は差向ひで坐つた。シャルロッテは全くこだはりなく大尉の就職や當分再會の望みの少いことを話した。ただ一つかういふ狀態でオティリエを慰めたことは、エドアルトが友人に少しついて行くためにその後を追つたと信ずることができたことであつた。

が、二人が食卓から立上つたとき、窓の下にエドアルトの旅行馬車が見えた。シャルロッテが少し不機嫌に、誰が馬車をここへ廻したのかと訊ねると、それはまだ少し荷積みをするために

從僕だとのことであつた。オティリエは驚きと苦痛を隱すためには精一杯に氣持を抑へねばならなかつた。

從僕が入つて來て、二三の品物をもとめた。主人のコップとか銀の匙を二つ三つと、オティリエにとほい旅を、長い不在を暗示するやうないろんなものであつた。シャルロッテは全く無愛想にその要求を叱りつけた。主人に關することは從僕がみんな自分で決定權を持つてゐるんだから、どういふ意味か分らないといふのであつた。勿論ただオティリエと話し、そのため何かロ實をもうけて部屋から誘き出さうといふ腹であつたこの器用な男は、言譯をしてその要求を固執することを心得てゐた。オティリエもそれを叶へてやりたいと思つた。が、シャルロッテは拒絶した。從僕は立去らねばならなかつた。馬車は軋り去つた。

それはオティリエには怖ろしい瞬間であつた。かの女には分らず、又つかめなかつた。が、エドアルトがながい間自分から引離されたことは感ずることができた。シャルロッテはその氣持に同情して、獨りきりにしておいた。ここにかの女の苦痛と涙を記述する勇氣はない。かの女は無限に惱んだ。けふだけでも過すおたすけを賜はるやうにと神樣に願つた。日と夜を乘り切つて、かの女が再びみづからを見出したとき、なにか他人にでも逢ふやうな氣がした。

かの女は氣が落着かず、諦めてもゐなかつた。が、あのやうに大きな損失のあとでもやはり存在してゐて、まだその上に心配なことがあつた。意識を取戻したあとで、最初の心配は、男

たちが立去つたあとで、自分もまた同様に遠ざけられるのではないか、といふことであつた。かの女は、エドアルトが威嚇をもちひてシャルロッテの傍にかの女を置いておくやうに保證したことを夢にも知らなかつた。が、シャルロッテの態度はかの女を幾分でも落着かせるのに役立つた。シャルロッテはこの善良な娘を忙しがらせようとつとめ、滅多に自分から離さず、又それを好まなかつた。また言葉では決定的な情熱に對して大した效目もないことはよく知つてゐたのだが、思慮や意識の力をも知つてゐて、オティリエとのあひだにいろんなことを口に出してみた。

かうして、オティリエには、シャルロッテが折にふれて思慮と計畫を以て賢明な意見を述べてくれるのが大へん慰めになつた。「私たちが靜かに情熱の混迷から救ひ出してあげる人々の感謝はどんなにかつよいものでせうね。」かの女は言つた。「殿方たちが未完成に殘した仕事によろこんで元氣に手をつけませうよ。さうすれば、私たちは、あの人たちが歸られるのに美しい希望を準備することになるのです。あの人たちの嵐のやうな短氣な性分ではこはれてしまふのを私たちの節制で保存したり、進捗させたりしてね。」

「節制のことをお話しになりましたので、叔母さん、」と、オティリエが答へた。「殿方たちの、殊にお酒についての不節制を思ひ出したことをお隱しできませんわ。純粹な理性や賢さや他人への思ひやりや優美さや愛らしさまでが幾時間も失はれてしまひ、秀れた方がおあらはしにな

り又おみせになることのできるすべての善いことのかはりに禍と混亂が起らうとするのに氣づかねばならないとき、どんなにいくども私は悲しい不安な氣持になつたことでせう。また、そのため無理な決心がいく度されるかも知れませんわ。」

シャルロッテはその通りだと言つた。が、かの女はその話をつづけなかつた。ここでもまたオティリエがただ、いつもではないが願はしい程度以上に屢々その娛しみやお饒舌や働きを時折の飲酒で高めるくせのあるエドアルトを思ひ出してゐることを十分に感じたからである。

シャルロッテのあの言葉でオティリエは殿方たち、とくにエドアルトをまた思ひ出すことが出來たのであるが、それだけにシャルロッテが大尉のさし迫つた結婚のことを全く知り拔いた確實なことのやうに話すのをきいたとき、よけいに異様な感じがした。その話で、かの女がエドアルトの以前の確證によつて想像したと思へることはすべて全くちがつた外觀を呈したからである。それやこれやで、シャルロッテの言葉や暗示や行動や歩みに對するオティリエの注意は增していつた。オティリエはわれにもなく賢く、鋭く、疑ひ深くなつた。

シャルロッテは一方自分の周圍の一々の事物を鋭い眼差で見拔き、明敏な熟練を以てそれを處理した。そして、オティリエもたえず手傳はせるやうにした。かの女は不安氣もなく家政を緊縮した。實際、一切を精確に觀察してみれば、情熱的な事件も一種の幸福な攝理と考へられた。これまでの行きかたでは、わけなく無制限に陷り、豐かな富の美しい狀態を、折よく正氣にも返

らぬうちに、我武者羅な生活や仕事でぶちこはしまではせずとも動搖させたかも知れなかつたのである。

遊園の工事で進行中だつたものはかの女は妨げはしなかつた。むしろ、將來の完成の基礎となるに相違ないやうなものは繼續させた。が、それも適當なところで止めておいた。歸つて來る夫にもまだ十分たのしめる仕事をのこしておかねばならなかつたのである。

これらの仕事や計畫でかの女は建築家のやりかたをいくらほめてもほめきれなかつた。湖は間もなく眼の前にひろげられ、新しくできた岸には美しく多樣に樹を植ゑ又芝をつけられた。新しい家では荒仕事はすつかり出來上り、保存に必要なものは配慮された。それから、最初からまた樂しんではじめることができるやうなところで一先づ結末をつけた。かの女は落着いて朗らかであつた。オティリエはさう見えただけであつた。かの女はすべてのことに、エドアルトがすぐ歸るか歸らぬかの兆候以外には見ようとしなかつたからである。すべてのことにかの女はこのこと以外に興味は持たないのであつた。

だから、百姓の男の子たちを集めて、廣くなつた遊園をつねに清潔にしておかうとする施設がかの女には歡迎された。エドアルトもすでにこの考へを抱いてゐたのであつた。子供たちには一種の明るい制服をつくつてやつた。それを彼等はすつかり身體を清めたあとで夕方に着るのであつた。衣裳室は館にあつた。一番頭のよい精密な子供に監督が委された。建築家が全體

を指導した。思ひがけもなく子供たちは皆一種の熟練を持つてゐた。彼等を訓練するのは氣持のよいことであつた。彼等はその仕事をするとき調練みたいな感じがないではなかつた。確かに彼等が呼(あぜ)搔きや柄のある小刀や熊手や小さな鋤や斧や尻尾のやうな箒をもつて入つて來、又他の者は雜草や石を拂ふために籠をもつて續き、或は高い大きな鐵のローラーを引きずつて來ると、それはすばらしい樂しい行列であつた。建築家はそれを見て園亭の長押(なげし)の位置の行儀のよい配列を氣づいた。オティリエはこれに反してそのなかに、歸つて來る主人をやがて迎へる一種の觀兵式を見るばかりであつた。

このことはかの女にエドアルトをなにか似たやうなもので迎へようといふ元氣と樂しみをあたへた。これまで村の娘たちには裁縫や編物や絲紡ぎやその他女の仕事を奬勵するやうにつとめてあつた。上述の、村の清潔と美のための施設以來これらの德性も增してゐた。オティリエはたゑずそれにたづさはつてゐた。が、むしろ偶然に、折にふれて氣紛れにであつた。いまや、かの女はそれを完全に徹底的にやらうと考へた。しかし、一定數の女の子から一團體をつくることは男の子の場合のやうには出來なかつた。かの女はそのよい考へにしたがつた。そして、自分でも全くはつきりせず、一人一人の娘にその家や兩親や兄弟への愛著を注ぎ込む以外のことはしようとしなかつた。

これは澤山の娘に成功した。ただ一人の小さな元氣のよい娘には、いつも、熟練が足りない

とか、家でもちつとも何もしようとしないとか小言がいはれた。オティリエはその娘を憎むことはできなかつた。かの女にはとくに親切だつたからである。許されさへすれば、その娘はかの女のもとに行き、一緒に歩き、又走つた。その場合はよく働き、元氣で疲れを知らないのだつた。美しい女主人への愛著はその子に必要なものと思はれた。はじめオティリエはその子のくつついてくるのを我慢した。それからかの女は自分でもその子に愛情を持つた。ついには二人はもはや別れることがなく、ナンニイはどこへでも女主人のおともをした。

オティリエは時々庭園への道をとつて、美しい成長をたのしんだ。苺や櫻實の季節は終つてゐた。その晩成(おそな)りがナンニイはとくに美味しかつた。秋には豐かな收穫を約束してゐる他の果實に園丁はたえず主人を思つた。いつも歸宅をのぞまぬことはなかつた。オティリエはこの善良な老人に好んで耳を傾けた。かれは自分の仕事をすつかり會得してゐて、かの女にエドアルトのことを話すのをやめなかつた。

オティリエがこの春接木(つぎき)した枝がみんな實に美しく育つたのをよろこんだとき、園丁は考へ深さうに答へた。「御主人樣にこれを喜んでいただきたいと思ひますよ。秋にここへお歸りになつたら、まだ御先代の頃からこの古い館の庭にどんなに立派な種類のものがあるかを御覽になるでせうに。今頃の果樹園師は昔のカルト僧團(9)の人たちほどには信用になりませんからな。カタログには成程とても立派な名前があるにはありますが、接木をして育て、さて實が成つてみ

ますと、こんな木を庭に植ゑてたつて骨折損だつてことが分りますわい。」

繰返し、しかし、この忠實な下僕は、オティリエを見るごとに、主人の歸りとその時期を訊いた。そして、オティリエが答へられないでゐると、この善良な男はかの女に、自分には打明けてくれないのだと思ひ込んでゐる樣子をみせ、祕かな悲しみをもよほさせないことはなかつた。こんな風にして自分におしつけられる知らないといふ感情はかの女には辛かつた。が、かの女はこの花壇からはなれることはできなかつた。かれらが一緒に一部分は種を蒔き、あとは全部植ゑたものがいまや全く花盛りなのであつた。ナンニイがいつも水をかける以外はもうほとんど世話は要らなかつた。いまやつと出てきた遲咲きの花をオティリエはどんな感じで眺めたことであらう。その輝かしく豐かな花の群が、かの女がいくどもお祝ひをする約束をしたエドアルトの誕生日に美しく人の眼を惹き、かの女の愛情と感謝をあらはすはずであつたのである。が、この祝祭を見る希望はかならずしも同じやうに生きてはゐなかつた。疑惑と心配がたえずこの善良な娘の心に囁きかけた。

シャルロッテと本當に心を一つにして打ちとけあふやうにはもう恐らくならなかつたであらう。二人の婦人の狀態は非常に異つてゐたからである。すべてがもとのままで、正規の生活の軌道に歸れば、シャルロッテは現在の幸福をかち得、將來へのたのしい展望がひらけた。が、これに反して、オティリエはすべてを失つた。すべてと言つても過言ではあるまい。かの女はエ

ドアルトに於てはじめて生命と喜びを見出し、現在の狀態では以前にはほとんど豫感さへしなかつた無限の空虛を感じたからである。求める心は缺乏を感じるが、失へる心は喪失を感じる。あこがれは不機嫌と焦慮に變り、期待と待望に慣れた女らしい氣持もその世界を踏み出して、活動的となり、事を企て、幸福をもとめて何事かをしたくなる。

オティリエはエドアルトを諦めなかつた。どうしてかの女にそれができたらう。シャルロッテがたとへ十分賢明に自分の確信に反してまでそのことを既定のこととし、夫とオティリエとの間の友情的な靜かな關係の可能性を決定的なものと假定したにしても。かの女はいくども夜部屋にとぢこもつたとき開いた鞄の前に膝まづいて、まだ使はず、裁斷もせず作つてもゐない誕生日の贈物をながめるのだつた。又、この善良な娘はどんなにたびたび日が昇るとともに、かつてはその幸福のすべてを見出した家から、いつもなら何の興味もない戸外へ、近郊へ急ぎ出たことであらう。地上にもかの女はとどまりたくなかつた。かの女は小舟にとび乘り、湖の眞中まで漕いだ。それから、旅行記をひき出して、うごく波に搖られながら讀み、異鄕を夢み、いつもそこに自分の友人を見出すのであつた。かれの心にかの女はつねに近く、かれもまたかの女の心に近かつた。

第十八章

既に我々が知つてゐる、あの不思議に活動的な男であるミトラーが、この友人たちの間に起つた不幸を知つて、誰もたすけをもとめたわけではないのに、この場合自分の友情と熟練をしめしたいと思つたことは想像できる。が、まづ暫くは躊躇するのがよいと思はれた。風儀上の紛擾では無教養者よりも教養ある人のはうが救ひがたいことをあまりにもよく知つてゐたからである。かれはだから暫く本人たちに委せておいた。が、ついにもう我慢できなくなつて、はやその足跡を知つてゐたエドアルトを訪ねようと急いだ。

道は心地よい谷間に導いた。その優美な綠色の樹木の多い草地を貫いていつも生々とした小川の溢れるやうな流れがあるときはうねり、又せせらいでゐた。ゆるやかな丘の上には豐饒な畑とよく手入れをした果樹園が伸びてゐた。村はたがひにあまり近接せず、全體はいかにも平和で、個々の場所も繪にするには適しなくとも、生活にはとくに好ましく思はれた。

庭に圍れた、さつぱりとしてつつましやかな住居のある、よく手入れをした分農場がついにかれの眼に落ちた。かれはここにエドアルトがいま住んでゐるのにちがひないと思つた。それは間違つてゐなかつた。

この孤獨な友人については次のことだけが言へる。かれは靜かにすつかり自分の情熱的感情に身を委せ、いろんな計畫を考へ、いろんな希望を育ててゐたのであつた。かれはオティリエにここで逢ひたいと思ひ、ここに連れて來、又誘ひ出したいと思ひ、許されること許されぬことを考へずにはゐられなかつたことを否定できなかつた。かれの想像力はあらゆる可能性のなかをふらつき廻つた。オティリエをここでわが物にする。合法的にわが物にすることができないとすれば、莊園をかの女のものにしたいと思つた。かの女をここに靜かに獨りで、誰にも賴らずに暮させるはずであつた。かの女は幸福なはずであつた。そして、自分を苦しめる想像力がつのると、恐らく他の人間と二人で幸福になるはずであつた。

かうしてかれの毎日は希望と苦痛、涙と快活、計畫や準備と絶望の間の永遠の動搖のうちに流れ過ぎてゐた。ミトラーを見てもかれは驚かなかつた。かれはとうにその到來を待つてゐたのであり、かうしてなかば歡迎されたかたちであつた。それにシャルロッテに遣はされて來たのだと思つたので、かれはもういろんな辯解や延期や、それから決定的な申出を心に用意した。が、又、オティリエのことも少し聞きたいと思つたので、ミトラーは天の使のやうによろこばれたのだつた。

だから、ミトラーがシャルロッテからではなく自分の衝動で來たのを知つたとき、エドアルトは腹を立て不機嫌になつた。その心は閉された。話は最初緒が見つからなかつた。が、ミトラ

ーは、愛情でいつぱいの心といふものは想ひを語り、自分の心に起るすべてを友人の前にさらけ出したいといふはげしい欲求を持つてゐることを知りすぎるほど知つてゐたので、二三の問答のあとで、こんどは自分の役割から拔け出し、仲裁者の代りに親友になることに甘んじた。

かうしてかれが親しげにエドアルトにその孤獨な生活を非難したとき、エドアルトは答へた。

「あゝ、これ以上氣持よく過す方法を僕は知りませんね。たえず僕はあのひとのことを考へ、又その傍にゐるのです。オティリエがどこにゐるか、どこへ行くか、どこに立ち、どこに休むかを獨りで考へることができるといふこの上ない得があります。僕はあのひとが僕の前でいつものやうに立ち働き、創造し企てるのを見ます。勿論みんな大抵僕の氣に入るやうなことばかりです。が、さうばかりでもありません。なぜなら、どうしてあのひとからはなれて僕が幸福でありえませう。だから、僕は空想で、僕に近づくためにオティリエがどうしたらよいかを考へ拔くんです。僕はあのひとの名前で僕宛の甘い打解けた手紙を書き、その返事をし、その手紙を一緒に保存します。僕はあのひとに一歩も近づかうとしないと約束したが、それはまるつもりです。が、あのひとが僕を振向かないのは何があのひとを縛つてゐるんでせう。シャルロッテが殘酷にもあのひとに約束や誓を要求して、僕に書いたり消息を告げたりしないやうにさせてるのかしら？　それは自然であり、ありうることです。が、僕には法外な耐へがたいこ

とです。もし、僕が信じ又知つてゐるやうに、あのひとが僕を愛してゐるならば、なぜ決心をし、思切つて逃げ出し、僕の腕にとび込んでくれないのでせう？　僕はいくども考へます。あの人はさうするはずであり、さうできるんだ。と、次の間でなにか動くものがあると、僕は戸の方を見ます。あの人がはいつて來るんだ！　僕はさう思ひ、又のぞむのです。あゝ、僕は考へますよ、可能なことが不可能ならば、不可能なことも可能なはずだ、と。夜、眼が覺めて、ランプがぼんやりした光を寢室に投げるとき、僕はあの人の姿が、魂が、あのひとの豫感がただよひ過ぎ、入つて來て、僕をつかむやうな氣がするんです。ほんの一瞬だけれど、あのひとが僕のことを思ひ、僕のものである證據を手に入れたやうな氣がするんです。

僕にはまだ一つ喜びが殘つてゐます。あのひとの近くにゐたとき、僕はあのひとの夢を見たことはありませんでした。が、いまは遠くにゐて夢の中で僕たちは一緒になります。そして、全く奇妙なことに、この近所でほかに愛らしい女たちを知るに及んではじめて、あの人の姿が夢の中に現はれ、かう言ひたいかのやうです。まあ、あたりを見廻してごらんなさい。私より美しく可愛い方は見つからないでせう、と。かうして、あの人の姿は僕のどの夢にもまざりこんで來ます。あの人と一緒に僕が出逢ふことはみんな交り合ひ重り合ふのです。あるときは、僕たちはある契約に署名をします。あの人の手蹟と僕の手蹟と、あの人の名前と僕の名前と、二つが互に消し合ひ、からみ合ふんです。また、かういふ樂しい空想の手品も苦しくないこと

はありません。ある時は、僕があの人に抱いてゐる純粋な觀念を侮辱することがあります。そのとき僕ははじめて、言葉にいへない不安に落ち、どんなに僕があの人を愛してゐるかを感じるのです。また、あるときは、あの人がまつたくその性質とは反對に僕をからかひ、苦しめることがあります。が、すぐに、その姿は變り、美しいまるい天上のもののやうな顏はながくのびて、他の女になつてしまひます。が、僕は苦しく、不滿で心をとり亂すのです。

ミトラーさん、笑はないで下さい。それとも、やはりお笑ひなさい。あゝ、僕はこの愛著、お好みならこの馬鹿げた氣違ひじみた愛情を恥ぢません。否、僕はこれまで愛したことはなかつたのです。いま、はじめて、愛とはどんなものかを知つてゐます。あの人を知り、愛し、全く本當に愛すまで、これまでの僕の生涯は序曲であり、つなぎであり、暇つぶしであり、時間の空費にすぎなかつたのです。べつに面と向つてではないが、蔭で僕はよく、大抵のことが拙く不器用だといふ非難をうけたものです。それはさうかも知れません。僕はまだ名人としての自分をしめしうるやうなことが見つかりません。が、愛の才能に於て僕にまさるほどの人がゐたら會つてみたいものです。

なるほど、それは悲しい、苦しい、涙の多いものでせうが、僕には極めて自然な、特有なものなのです。だから、それを捨てるやうなことは僕には容易に出來ません。」

このはげしい心からの言葉でエドアルトは氣がかるくなつたが、またその不思議な狀態の個

個の様相が突然はつきりと眼の前にあらはれたので、苦しい矛盾に耐へられなくなつてわつと泣き出してしまつた。打明け話で心がやはらかになつてゐたため、よけいに涙が流れた。

ミトラーは、エドアルトの情熱のこの傷ましい爆發によつてその旅行の目的をとほく外らされてしまつたため、餘計にその性急な性質と酷薄な理性を抑へかね、率直に又無神經に不贊成をあらはした。エドアルト様は——かうかれは言つた——しつかりなさつて、男子の面目上なすべきことをよく考へ、不幸に際しても氣を引締め、苦痛をも平然と耐へて取亂さず、大に敬ひ尊ばれ、模範として立てられることは人間最高の名譽に達する所以だといふことをお忘れになつてはいけません。

エドアルトは昂奮し、世にも苦痛な感情でいつぱいであつたため、これらの言葉は空虛な無意味なものにしか思はれなかつた。「幸福な人や、氣樂な人は何とでも言へますよ。」エドアルトは怒つた。「が、苦しんでゐる者にとつて自分がどんなに耐へがたい存在であるかがわかつたら恥ぢ入るでせうよ。際限もなく辛抱せねばならないと言ひ、頑冥な氣樂な奴は限りもない苦痛を認めようとはしないのです。あらゆる慰めが卑しく、絶望が義務であるやうな場合がある、さうだ、さういふ場合があります。英雄を描くことのできた氣高いギリシヤのある詩人[10]はその人物を苦しい衝動にあつては泣かせることを恥ぢませんでした。格言の中でもかう言つてゐます。涙の多い人は善良である。乾いた心と眼の人は誰でも自分を見捨ててもらはう、と。僕は、

不幸な者が見世物にならねばならぬやうな幸福な人々を呪ひます。不幸な者はどんなに殘酷な肉體的精神的窮境にも喝采を博するため高貴に振舞はねばならない、死に際しても喝采されるやうに劍客のやうに從容としてかれらの眼前に倒れねばならない、といふのです。ミトラーさん、僕はあなたの訪問には感謝しますがね、この庭や周圍でも眺めていただけば、大へん有難いですね。僕たちはまた會ひませう。僕はもつと落着いて、あなたに似るやうにしませうよ。」

ミトラーは話を折るよりも、また本道にかへしたいと思つたが、容易に再び結びつけることができなかつた。さうでなくても目標に向つて走らうとつとめてゐるこの會話を更につづけることはエドアルトにも全く好都合であつた。

「勿論、」エドアルトは言つた。「あれこれと考へたり話したりしてみたつて何の役にも立ちません。が、いまの話で僕はやつと自分が分つたやうな氣持です。何を決心すべきか、又してゐるかがはつきり分りました。僕に現在の、又未來の自分の生活が眼に見えるやうです。ただ不幸と歡樂のどちらかをえらべばよいのです。ねえ、ひとつ、このどうしても必要な、もう起つてしまつたと言へる離婚の世話をしてくれませんかね。シャルロッテの同意を得るやうにして下さい。同意を得ることができると信ずるわけはもうくだくだしく申しません。では、ひとつ、出掛けて、僕たちみんなを安心させ、幸福にしてやつて下さい。」

ミトラーは詰つた。エドアルトはつづけた。「僕とオティリエの運命ははなすことは出來ません。また、破滅することもないでせう。このコップを御覽なさい。僕たちの名前の頭文字が刻まれてゐます。樂しい歡呼の聲をあげた男が空中に投げたのです。もう誰もそれでのまぬやうに、岩土の上で碎くつもりだつたのです。が、それが受け止められたのです。僕はそれを高い値段で買ひ戻しました。そして、いまでは毎日それでのんで、運命に結ばれた關係は決してこはれないものだと信じることにしてゐるんです。」

「おゝ、これは困つた！」ミトラーは叫んだ。「何といふ我慢をしなくてはならぬのだらう！人の心に起る最も有害なものとして憎んでゐる迷信にぶつつかるなんて！　豫言や豫感や夢を弄んで、日々の生活を意味あるものにすることはするが、生活自體が重大になつて、まはりのすべてが動きさわめくときは、嵐はそんな幽靈でますます恐ろしいものになるばかりですよ。」

「この不確かな人生で、」エドアルトは叫んだ。「この希望と不安の間にあつて貧しい心に一種の導きの星を許して下さい。その方へ舟を漕いで行くことはできなくとも、その方を見ることができますやうに。」

「それで少ししか結果が得られないにしても、私はいいんですがね。」ミトラーは答へた。「しかし、私はいつも氣づいたことだが、警告するやうな兆候には誰も注意せず、自分に媚びるやうな前途を約束するやうなものにばかり注意したがるんですよ。そして、そんなものへの信仰

ばかりが生きてゐるんです。」

いまやミトラーは、ながく居れば居るほど不快を感じる朦朧とした領域にふみ込んだのを見て、シャルロッテの許へ行つて呉れるやうにといふエドアルトの切なる希望を幾分進んで受け入れた。この場合どうしてまだエドアルトに反對する氣があつたらう。婦人たちがどういふ工合かをさぐるために時間を得ること、それが、かれの考へによればいまかれ自身に殘つてゐる仕事であつた。

かれはシャルロッテのもとに急いだ。かの女はいつものやうに落着いて朗らかであつた。かの女はよろこんで、起つたことを殘らず敎へた。エドアルトの話からは結果を引出すことができただけであつたのである。かれは自分の方から用心深く歩み寄つて行つた。が、離婚といふ言葉を序にでも話すことはどうしてもできなかつた。だから、シャルロッテがいろんな面白くないことのあとで、たうとう次のやうに言つたとき、どんなにかれは怪しみ、驚き、自己流の考へで朗らかになつたことであらう。「私は、萬事もとどほりになり、エドアルトがまた近づいてくれるだらうと信じ、又希望せずにはゐられません。また、どうしてさうでなくてゐられませう。私は姙娠してゐるんですもの。」

「ほんたうですか？」ミトラーは口を挾んだ。「まつたくですわ。」シャルロッテは答へた。「これはまた途徹もなく祝福すべき知らせですな。」かれは、手を打ちながら叫んだ。「私は男の心